
彼女になった彼

やがみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女になった彼

【Nコード】

N3704W

【作者名】

やがみ

【あらすじ】

いい男は何をしても許される。

そんな貂蟬のともでも理論で彼は知識を引っさげてやってきた。そして、彼女となった。

主人公は両性具有者です。お気をつけて。

独自設定・解釈あり。

ご都合主義もあり。

始まりは好奇心（前書き）

独自設定・解釈あり。

息抜きの為、更新不定期の可能性あり。

始まりは好奇心

彼はオタクである。

一口にオタクとはいっても、その種類は様々だ。
車オタク、アイドルオタク、鉄道オタク……

オタクとは元々は蔑称ではあるが、今では特定の分野に対し極めて興味を持つ人達を言う単語となっている。

特定の分野に対して興味を持つとは転じて、趣味ともいえる。
マニアともいえよう。

中には変なオタクもあり、空き缶やビールの蓋などを集める、中々に他者から理解されない輩もいる。

そして、彼はその中々理解されないオタクに分類される。
それもそうだろう。

彼は戦争オタクであつた。

ここで重要なのは彼は兵器オタクではないことだ。

確かにそれなりには詳しいが本物から見ればにわか程度。

そうではなく、戦争が起きた背景や戦略や戦術といったことに極めて強い関心を持っていた。

彼はインターネットで旧日本軍の歩兵操典をはじめとした各軍の野戦教本を見つけ、それを読み込んだ。

兵を動かすには兵を鍛えねばならぬ、と。

そして、それが高じてどんな武器が最適か、と兵器オタクの道へ入ったところだ。

とはいったものの、彼本人は持久力こそあるものの、筋力などは極々一般的。

また、彼はひきこもりでも何でもなく、普通に友達もいる。

そろそろ大学2年だが、まだ1年の遊ぶ猶予があった。

ある日の深夜。

飲み会の帰りに彼はほろ酔い気分で歩く。

彼は下宿しているアパートまであと少しというところにきていた。彼のアパート周辺は外灯の数は少なく薄暗い。

そして、そこで彼は自身から数m先で男が何かを探しているかのように地面を見回していることに気がついた。

「……すっげ」

ジロジロとガン見である。

何が凄いかというと、その格好だ。

裸にパンツ一丁というあまりにも男らしすぎる格好。

そして、筋骨隆々である。

若い故に怖さよりも好奇心が先に立つ。

頭のおかしい変質者ならば表情や雰囲気ですれなりに分かるし、何よりも探しものが人ではないことは明白だ。

「どうかしたんですか？」

故に彼は声を掛けた。

その声に気が付き、男は顔を上げた。

「あら、いい男……じゃなくて、私ちよつと探しものしているのよ」
女言葉でソツチ系の人か、と彼は察するが別段それだけしか思わない。

同性愛に対しては個人の自由だというのが彼のスタンスだ。

「手伝いましょうか？」

「あらん、助かるわあ。それじゃお願いするわ」

そうして手分けして探すこと数分。

彼は側溝に落ちていた古ぼけた鏡を発見し、男に手渡した。

「ありがとう、助かったわ」

「いえ、別にこれくらいは……」

「私の名前は貂蟬よ。縁があつたらまた会いましょう」

投げキス一つ、貂蟬がウィンク。

すると彼女はまるで陽炎のように消えてしまった。

「……お化け？ てか、貂蟬て……源氏名？ オカマバーかどっかのかな」

怖さよりも不可思議さに思わず彼は首を傾げるが、ここにいるわけにもいかない。

とりあえず帰宅することにする彼であった。

それから数週間は特に何事もなく過ぎ去り、貂蟬についての記憶が風化しかけた、そんなときであった。

「はい」

ある日、彼が帰宅するとアパートの前に貂蟬がいた。

彼は目を白黒させたものの、とりあえず中にといいことで彼を部屋へと招く。

お茶と和菓子を出し、一息ついたところで彼は問いかける。

「何か用ですか？」

「ええ、実はあなたの力を借りたいと思って」

「探しものですか？」

「いえ、ちょっとした海外派遣というか、外史派遣というか……」

「詳しくお願いします。それで決めます」

「わかりやすく言えば平行世界にいつて欲しいの」

予想外の言葉にポカンとしてしまう。

「いや、何か人知を超えた存在みたいだからそういうのもあるかも
だけど……」

敬語が崩れているが彼は気にしない。

貂蟬もまた気にすることなく話を進める。

「勿論、何も無しに放り出すことはしないわ。私のできる範囲であ
なたに力を与えましょう」

「はぁ……」

彼には曖昧な返事しかできない。

「私は外史……まあ、全部じゃなくて特定の時代のみんだけど、
その平行世界の管理人。あなたを送りたいっていう理由は……いい
男だから」

「……えらくいい加減だな」

「あらん、こういうのは重要よ。いい男は何しても許されちゃうイ
ケナイ子なんだからあん」

さすがの彼もこの言葉にやや引く。

「あなたと別れた後、私はちょっとあなたのことを観察させてもら
ったわ。あなたは平和を望みつつも、戦場で指揮をとりたい。そう
思っているでしょう？」

「まあ、男だしなあ……そういうのには懂れるね」

隠すこともなくそう告げる。

「でしょ？ 変に倫理や道徳を盾に綺麗事を言うよりは余程好感が持てる。そういうところもやっぱりイイオトコ……」

「……ともかく、大学卒業まで返事は待ってくれ。学費も返したいし、親に恩返しとして温泉旅行も連れてってやりたい」

「いいわよ、そういうところもますます好感もてるわぁ……今まで何人も外史に送り込んだけど、誰もそういったことは言わなかったもの」

前例が何件もあることに彼は苦笑せざるをえない。

「大抵の子はハーレム作ってたわ。色んな能力を私から与えられて」「ハーレムは漢の永遠の夢」

「否定しないわぁ……ところで、あなたに聞きたいんだけど……今の男の姿で送り込む、そのときには能力を与えることができるわ。アニメとか漫画とかそういうものの能力もいいわよ」

一度言葉を切り、彼の反応を窺いつつ貂蝉は更に続ける。

「転生という形で女の子になればあなたは超人的な身体能力を得ることができる。勿論、私ができる範囲で強化もするわ。こっちはゲームの能力とかは無理よ」

どっちがいい、と彼は問いかける。

「その前に聞きたいが……何で女の子なんだ？」

「その世界は女の方が力が強い世界なのよ」

「なるほど……それじゃ、女に転生という形で」

「あら、あっさり。能力はいらないの？」

「いや……あっても困るし」

「無限の剣製とか王の財宝とかもいいわよ？」

「お断りします」

即答であった。

そして彼は続ける。

「というか、そういうアニメの技とかを現実で使いたいって思う人はかなり……うわぁ、と思う」

うわぁ、で済ませたのは彼の優しさ。

貂蟬はなるほどなるほど、と何度か頷き、やがて口を開く。

「わかったわ。それじゃ……アドレスと番号交換しましょ」

にっこり笑顔で告げる貂蟬に彼は溜息一つ。

どうしてそうなるかがよく分からなかったが、これも何かの縁、と彼は交換に応じたのであった。

それから彼は今まで以上に大学生活を満喫した。

友人達と一緒にバイトし、海外旅行に行ったり、登山にいたり、北海道で美味しいものを食べ歩いたり……彼は友達と遊ぶ時間、そして頻繁に帰省し、家族との時間を大切にした。

また貂蟬の言い分から戦国時代か何かではないか、と見当をつけた彼は長く生きられなくとも、英傑を間近で見たいと思うようになった。

できるならばそのような連中の下で働きたいとも。

現代で歯車のように働いて長く生きるのと太く短く、鮮烈な嵐の如く生きる——その選択において彼は後者を望んだ。

卒業を待たずに彼は貂蟬に行く、と伝えた。

そして、それから間を置かずに自分の要望を彼に送り、できるか否かを判定してもらいつつ、より一層趣味に力を注いだ。たとえ斬り合いはできずとも軍師として働きたい、と。

そんなこんなであつという間に時間が過ぎ去り……彼は卒業を迎えた。

家族に挨拶を、ということでは彼は貂蟬にスーツを着てもらい、実家へと戻ることとなった。

就職に関しては既に両親に伝えてある。

具体的な仕事内容は伝えず、海外へ行つて色々やる仕事であり、帰省も連絡も難しい、と。

まさか平行世界へ行くとも言えず、そついう曖昧な言葉でしか表せない。

「うちの息子をよろしく頼みます」

そう言い頭を下げる父母に彼は思わず涙ぐむ。

彼からすれば今生の別れなのだ。

貂蟬もまたその意気を汲み、しっかりと告げる。

いつもの女口調ではない。

「お任せください。彼が幸福な人生を送れるよう、私も努力致します」

力強くそう言う貂蟬に彼の両親は安堵の息を吐く。

貂蟬は彼に目配せする。

それを受け彼は涙を拭い、告げる。

「行ってきます。いつまでも健やかに」

このときばかりは彼も敬語であった。

今まで育ててくれた恩がある。

学費は……彼が稼いだ分では半分も返せないが、そこらは貂蟬が何とかする、と確約してくれたので問題はない。

「体に気をつけて」

「元気でな」

父母からの言葉は短いものであった。

だが、言葉よりもその表情が何よりも彼の心に訴えかけていた。

彼は自らの欲望の為に行く。

だが、彼に罪悪感はない。

きっとそのことを話しても父母は何も言わないだろう。

彼とてもう成人。

ならばこそ、彼が決めた道を進むのを助言こそすれ、止めることはない。

「うん……行ってくる」

そして、貂蟬と共に彼は実家を後にした。

目立たぬ場所ならどこでもいい、と彼は貂蟬から説明を受けている。

ならば実家近くの山で、と彼は望んだ。

「確認だけど……俺の要望通りの体質、それは万全か？」

「問題ないわ」

そう貂蟬は返し、彼が望んだものを挙げていく。

あらゆる病気や毒にかからない

自分と交わった者のあらゆる病気や毒などの治癒

どんなに不健康な生活を送っても体型が変わらない

ニキビができない

視力が落ちない

肌が荒れない

どんなに食べても太らない

便秘にならない

虫歯にならない

あらゆる腹痛や頭痛にならない

髪が傷まない

気持ち悪くならない

酔わない

一度覚えたものは忘れない

一度見たものは忘れない

多くの人間から羨望のまなざしを向けられること間違いない。
またこれらに加えて、彼としての知識、そして元々のオプション
として超人的な身体能力が付与される。

「ただし、俺はそのまま私になるわけではない……だったかな」

「ええ、そうよ。あなたに女としてのあなたを混ぜた感じ。あなたの知識は引き継がれるけど……」

「どちらにしろ俺ではなくなるみたいだな」

「そうしないと心が死んでしまう可能性があるの。ごめんなさい」

頭を下げる貂蟬に構わない、と彼は答える。

「あと私がおまけもつけておくわ。有意義に使って幸せな人生を送って頂戴」

「わかった。ありがとう、貂蟬。あなたのおかげで俺はきつと有意義な人生を送れると思う」

頭を下げる彼に貂蟬は胸がときめいた。

ああ、ホントにいい男だね、と思いつつ、彼ならきっと大丈夫ね、と確信する。

「あ、あと孕ませよう、孕もつって思わない限りは子供できないからそこだけ注意ね」

この言葉に彼は首を傾げる。

女になるのだから孕もうはともかくとして、孕ませようは無理なんじゃないか、と。

「あと、今から行く時代はあなたの知ってるものとは違うわ。色々とおーパーツ的なものもあるけど、そこらへんは了承して頂戴」

「わかった」

「では外史へ1名様ご案内」

貂蝉はどこからともなく古ぼけた鏡を取り出した。

その鏡から光が溢れ出し……

彼は意識を手放した。

そして、彼は彼女となって生まれた。

古代中国は涼州、とある異民族の一員として。

好敵手？（前書き）

独自設定・解釈あり。

好敵手？

「ふう」

彼女は一息つき、筆を休める。

簡素な机の上にある無数の紙の束。

現代と比べれば質は悪いが、意外にもこの時代では既に紙が広く普及している。

それもその筈で紙は数十年以上前に蔡倫によって改良がなされていたからだ。

そこにびっしりと書かれているのは調練のやり方。

記憶にある歩兵操典などをはじめとした各種野戦教本を頭の中で照らし合わせ、この時代に合わせたアレンジを行っていた。

この時代ではできないことはバツサリと切り捨て、陣形や移動方法、基礎的な体力作りといったところが中心だ。

また難解であったり抽象的な表現は全て排除し、図を交えるなどできるだけ誰にでもわかりやすくしていた。

さて、彼女の部族はいわゆる騎馬民族だ。

しかし、その戦闘方法は策などを用いず力任せに突撃するのみ。

個々の武は高いのだが、連携という概念があまりないのだ。

彼女としては母親を通じ、部族の長や大人達に色々と言っているのだが、そんなことしなくても勝てるからいいだろう、というある意味で当然な答えが返ってきて以来、もはや諦めていた。

彼女は今年で10歳にも関わらず、類まれなる才能、生来の特身体質、そして何よりも口うるさいことにより彼女は部族内で腫れ物扱っていた。

確かに彼女の母親をはじめ、部族の大人達は彼女が極めて優秀であり、かつその体質から漢王朝はじめ、多くの諸侯に対して有効な手札となりうることは分かっている。

この世界において皇帝や英雄などの力ある者は全て女性である。

そして、彼女達は男よりも同性を好む。

だが、女性同士で子をなすことは不可能。

唯一つの例外——両性具有者を除いて。

数万人に1人いるかないかと思われる両性具有者は有力者にとつて、女同士で子をなす為に喉から手が出る程に欲しい存在であった。

故にもし彼女を皇帝にでも売り払えば膨大な金が入ること間違いない。

だが、そうはしなかった。

強い者が部族の長となるべき、とそういう概念があり、彼女はまさに次代の部族の長に相応しい——かといって口を開かせればあれをしるこれをしるあれはやるな、と口うるさいのだが。

ともあれ、勉強に関しては彼女は独学で——もつとも、彼女が望めば母親が動き、どこからか望むものを手に入れてきてくれた——学んでいたが、武術・馬術はみっちり母親に、あるいは他の巧い大人に仕込まれていた。

外から喧騒が聞こえる。

「そついえば今日は他部族が来るって聞いたかな」

背筋を伸ばしつつ、思わず呟く。

長い銀髪が揺れ、白いうなじが露になる。

彼女は机の上を片付けて、立ち上がり天幕を出た。

天幕を出、喧騒のする方へと歩いていけばそこには見慣れぬ集団がいた。

彼らはゴザを地面に敷き、その上に色んなものを並べている。

彼女はどうかやら彼らが他部族らしい、とあたりをつける。

どこの部族か、と興味津々な彼女が近づこうとすると後ろから声が聞こえた。

「彩、きたの？」

後ろを振り返ればそこには黒髪で長身の女性が立っていた。

胸は大きく、天を向いている。

彼女は母親であった。

「あんたが鍛錬以外で天幕から出るなんて珍しい」

しげしげと娘の顔を見つめる彼女。

彼女の言うとおり、鍛錬以外は天幕で紙に何やら書いていることが多く、そのことは部族内で広く知られていた。

故に、彼女に友達はいなかった。

大人達の態度を見、子供達はおかしなヤツ、と彼女を認定し、彼女の邪魔をすべく、いたずらを仕掛けた……のだが、既に大人に混じって体を鍛えている彼女にとって、そんなものは赤子の手をひねるよりもたやすく粉碎してしまった。

痛い目に遭った子供達からは恐れられ、以後彼らは彼女に近寄ることがなくなった。

「いいじゃない。で、何か？」

「ああ、暇なら力比べに出てみたらどうだ？」

その言葉に彼女は一も二もなく頷いた。

こちらに転生して以来、彼女は体を動かすことが大好きでたまらない。

前世では到底できないようなことが軽々とできてしまうからだ。

また、貂蟬が何かやったのかどうか知らないが、鍛錬すればよかっただけ彼女は力を得ることができた。

着実に力量が上がれば当然、楽しくもなるわけで。

「今日来た部族にあんと同じ年くらいの子がいてね。その子が結構強かったから、遊んでこい。場所は長の天幕前」

「はい」

彼女は小走りで向かった。

「へえ……」

彼女は対象をじっくりと観察する。

その人物は彼女と同じく銀髪であるが、こちらは短く切りそろえてある。

だが、その得物は彼女の身の丈の2倍はあろうかという大戦斧。そんなものを軽々と振るい、対峙する大人の武器を弾き飛ばす。殺傷しては駄目なので武器を弾くか、相手に参ったと言わせなければならぬ。

ふと少女の視線が彼女とかち合った。

彼女は戦斧を向ける。

「我が名は華雄！ その者、私と勝負しろ！」

響く声。

観客達はざわめく。

名乗られた彼女は内心驚きつつも言葉を紡ぐ。

「我が名は高順。かかってこい。相手になってやる」

彼女——高順はそう言いつつ、手近な者から槍を受け取る。

彼女の得意な得物は槍であるが、槍だけしか使えないのではない。

「その意気やよし」

華雄はそう答えつつ戦斧を構え、眼光鋭く高順を睨みつける。

対する高順もまた油断できる相手ではない、と知識から知っていた。

観客達は大人から子供までまるで本物の一騎打ちであるかのような雰囲気にもまれ、声を出せない。

弓につがえられた矢の如く、極限まで緊張が高まっていく。

いつ爆ぜてもおかしくはない。

瞬間、一陣の風が2人の間を駆け抜けた。

両者動いた。

先手を取ったのは華雄。

戦斧を振り回し、力任せに槍をへし折ろうと上段から叩きつける。

高順はそんな手は食わぬとばかりに半歩だけ横に体をずらし、その場でくるりと回転。

槍の柄が華雄に迫るが敵もさるもの。

彼女はひょいっとその場で僅かに飛び上がり、柄をかわすや否や、戦斧を上には振り上げ、その柄でもって高順を強襲する。

すかさず高順は後方へ跳躍。

着地するや否や、槍を構え前へ。

華雄は面白いとばかりに笑みを浮かべ、真正面から高順を迎え撃つべく戦斧を構える。

そして始まる刃の応酬。

お互いに防御は考えずにただひたすらに攻め続ける。

幾何の時間が経過したか。

お互いに譲らず、攻撃につぐ攻撃。

両者共、額から汗が吹き出し、息荒く。

観客達の存在も、力比べということも当に忘れ、もはや本物の一騎打ち。

天高く響く刃を交える音。

それは一種の音楽ともいえよう。

知らず知らずに華雄は声を出し、笑っていた。

その顔には満面の笑み。

彼女は楽しかった。

大人をも負かす彼女にとって同世代で自分と張り合う高順。

楽しくないわけがなかった。

対する高順もまた同じ。

一撃毎に振るう速度が速くなり、そして華雄もまた速くなっていく。

打ち合う音、そして感触は心地良く、疲れなど湧いてもこない。

「我が真名は嵐！」

唐突に華雄が名乗った。

高順は驚きもせずに返す。

「我が真名は彩！」

華雄は告げる。

「彩、どこまでも踊り続けようではないか！」

「ついてこれる？」

「お前がついてこい！」

もはや2人だけの世界。

何人たりとも彼女達の世界を崩せない、と思われたが……

「いい加減にしろ！」

重なって聞こえた怒鳴り声。

どちらも聞き覚えのある声故に2人の踊りは終わりを迎える。

「母上……」

「母さん……」

両者の母親怒り心頭。

般若も逃げ出すその形相にさしもの高順、華雄といえど後退り。

「1刻も戦い続けて……やりすぎだ!」

「長同士の話し合いがお前達がつるさいおかげでできないじゃないか!」

2人の戦っていた場所は長の大幕前。

当然ながら、そこには両部族の長がおり……そして、華雄と高順は打ち合う音だけでなく笑ったりしていた為に。

高順はちらりと華雄に目配せ。

心得た、と頷く華雄。

「三十六計逃げるに如かず!」

高順叫び、2人は脱兎の如く駆け出した。

「ああ、楽しかった」

鬼から逃げ、手近な岩陰に隠れた2人。
華雄は息を整えつつそう言った。

「私もよ」

高順もまた同じく息を整えつつ。

「彩か……綺麗だな」

華雄は高順を見つめつつ、そう言う。
対する高順も同じように華雄の顔を見つめつつ。

「嵐ってあなたによく似合っている名前ね。嵐みたいに激しい」
「ふふ、そうだろう？ でも、母上以外に許したのはお前が初めてだ」

「私も似たようなものよ。私、部族でもちょっと浮いてるから」

そう言う高順に不思議そうな顔の華雄。

「お前なら実力で黙らせられるだろう？ 私もそうした」

「私って色々口出しするからうるさいんですって」

「そうなのか？ 例えばどんな？」

「戦に限れば少数の味方で大軍を打ち破る方法とか、鮮やかに敵を打ち倒す方法とか」

「何でそれが駄目なんだ？」

「突撃してるだけで勝てるから問題ないんですって。突っ込むことしかできないなんて猪みたいね」

華雄は高順の言葉に黙して語らず。

彼女自身と彼女の部族にも思い当たる節があったからだ。
高順はそんな華雄の様子を横目で見つつ、告げる。

「敵の虚をこちらの実で突く。孫子よ」

華雄は思わず感嘆の声を上げる。

「他にも？」

「兵法書を読むのは武を扱う者の嗜みよ。兵法書も読まない武人なんて……」

クスクスと笑ってしまう高順に華雄は冷や汗をかく。
文字の読み書きも危うい彼女は本など読める筈がない。
今まで華雄がやったことは武術と馬術のみだ。

「どうせならうちに来る？ 色々あるけど」

「……行こう。あと、できれば私に文字と……孫子を教えて欲しい」

敗北感を存分に味わった華雄であった。

母親達が周囲にいないことを確認しつつ、高順と華雄は天幕へと入る。

そして、机の横にある棚にこれでもかと詰め込まれた書籍に華雄は呆気にとられてしまう。

「はい、孫子。とりあえず第一巻。文字が読めなくてもどんな風に書かれているかは見ておいたほうがいいと思うの。本の形式に慣れるっていうか……」

本棚から1つ取り出し、高順はそう言いつつ華雄に手渡した。彼女は受け取り、最初のページを開き、そしてすぐに閉じた。

「……私にはどうやら無理なようだ。文字はこんなにも難解で……」

「勉強も戦い。体を動かすか、頭を動かすか……」

「私は体を動かすだけでいい。だからお前は頭も動かせ」

「押し付けるなんてひどいひどい」

むーっと頬を膨らませる高順に華雄は笑う。

そして、彼女は笑いを静め、高順をまっすぐに見据える。

「彩、これからよろしくな」

差し出す手はまだ小さい。

高順はその手をぎゅっと握る。

「嵐、よろしく……でも、勉強はしなさい」

「……それはちょっと」

「文字も読めない書けない、本も読めない武人はただの猪って昔の偉い人が言ってた」

「そ、そうなのか……猪はさすがに嫌だな……」

「猪のままなら、私に勝てなくなるかも」

ちらつと横目で見つつそう言う高順。

むむむ、と唸る華雄。

あと一押し、と高順はトドメの一言。

「私だけが頭も力も強くなるなんて……嵐は可哀想。力だけしか取り柄がないなんて……」

「わかった。やる。やってやる。彩には負けたくない」

かかった、と高順は内心ほくそ笑む。

「で、どうすればいいんだ？」

「とりあえず文字の読み書きと簡単な本からね。劉邦と項羽の戦いとかそういうのなら興味ある？」

「そついうのなら……たぶん大丈夫だと思う」

「ならそれからね。平行してやっていきましょう。どんどん読んでいけば読書が苦痛でなくなるの。そこまでいけばもう大丈夫」

重々しく頷く華雄ににっこり笑う高順。

「その後は計算ね。計算もできると周りから知勇兼備って言われると思うの」

「け、計算……」

思いつきり顔を引き攣らせる華雄だが、高順は容赦しない。

「計算ができれば戦で有利。距離を割り出すには速さに時間を乗算したもの……」

「じよ、じょうざん……」

あうあうあう、と先ほど勇猛果敢であったとは思えない程に元気を無くし、俯いてしまう華雄。

まだ乗算の概念がないからそれも無理はないが……この様子から

だと足し算引き算も危なそうであった。

「あ、どうせなら超オーバー知識として、三角関数でも教えてみようかしら？ 虚数平方根、二次関数に方程式、数列に行列。三平方の定理は外せない。あとはマニアックなところでフェルマーの最終定理とか円周率の求め方とか」

「や、やめろ……何かわからないけどすごく危険だからやめてくれ……」

頭を抱えて座り込む華雄に高順はニヤニヤと笑いながら、さらに言葉責めを敢行する。

「 $e = mc^2$ で相対性理論。電子の質量は 9.1×10^{-31} 9、原子爆弾を作るにはウラン238からウラン235を取り出し、濃縮する」

1700年以上、時代を先取りした知識のオンパレードだ。

華雄は訳のわからない単語に恐怖を感じ、ただ怯えることしかできない。

「嵐は可愛いなあ……微分積分、確率計算」

ニヤニヤと笑う高順により、それから半刻程言葉責めが続いた。

ちなみにだが、彼女は確かに知ってはいるが、どうしてそうなるか証明はできない。

だが、知っているのと知らないのでは雲泥の差があるのは確かだ。

「うう……酷い目に遭った」

涙目になっている華雄に高順は思わず唾を飲み込む。
可愛いのである。

故に彼女は実行した。

華雄をぎゅっと抱きしめるということを。

「さ、彩っ!？」

「嵐可愛い」

「か、可愛いって……」

しどろもどろになる華雄はなされるがままだ。

どうやら彼女は受けに回ると弱いらしい。

抱きついている高順は思いつきり息を吸い込み、華雄の匂いを堪能する。

このままでは何だかまずい、と思った華雄は高順を引き離し、手近なところに座らせる。

そして、彼女自身も対面に座った。

「で」

「うん」

「何で急に？」

「可愛いと思った。悪気はなかった」

「可愛い、か。私としてはカッコイイと言われたいのだが」

「じゃあ今度はカッコイイで」

「もうやらなくていい」

華雄の言葉にむーっと頬を膨らませる高順。

対して素知らぬ顔をする華雄。

沈黙が訪れるが、すぐに高順は頬を膨らませるのをやめ、問いかけた。

「ところであなたのところも父親はいないの？」

「ああ。お前も？」

「ええ。何でも略奪したとき、手近な男を強姦してできた子が私なんですって」

「私と似ているな」

「で、母さんがイクとき、男殺しちゃって父親いないんですって」

「……私と全く同じだな」

「まあ、それが様式というか形式みたいね」

勿論、部族には男もいるが、何分、女の力が強いので立場は弱い。部族内で結婚というものはなく、やりたくなったら男を漁るとそういう感じであった。

再び訪れる沈黙。

それを破ったのは華雄であった。

「お前はもう初陣を済ませたのか？」

「まだ」

答えた高順に華雄は腕を組み、勝ち誇ったような笑みを浮かべる。

「私はもう済ませたぞ。部族を討伐しにきた官軍相手にな。あの子の私は凄かった。3人殺した」

「それは凄い」

子供の身でそれだけやれるというのはさすがであった。

「嵐」

「ん？」

「将来、私、部族から出るかも」

「むしろ、そうしない方が不自然に感じてしまうんだが」

「まあ、そこは置いておいて……私と来ない？」

問いかけに驚いたように目を丸くする華雄。

「いいのか？」

「旅は道連れっていう言葉があるもの。ここで会ったのも何かの縁。あなたも部族の長とかで終わるような、ちっけな器じゃないと思うの」

じーっと高順は華雄の瞳を見つめる。

「私もちよつと考えていたことだ。もっと強いヤツと戦ってみたい。強くなりたい」

「決まりね」

にっこりと高順は微笑んだ。

華雄もつられて微笑んだ。

「で、その為には勉強ね」

華雄の表情が曇り空となったのは言うまでもなかった。

華雄と高順はこの日以後行動を共にし、時には鍛錬、時には勉強と実に有意義な時間を過ごしたのであった

高順は2週間後の別れのために華雄に色々な文字の読み書きや計算問題や本などを渡したのであった。

光陰矢の如し（前書き）

独自設定・解釈あり。
微工口あり。

光陰矢の如し

華雄と別れて早2年。

高順は順調に武を、知を磨き、彼女が書いた紙は束ねられ、数冊の本となっていた。

そんなある日。

「そろそろあんたも出てみる？」

1日の鍛錬が終わり、風呂というものはないので水で濡らした手ぬぐいで簡単に体を拭き、寢床で母親と揃って横になったときだ。

高順は母親から尋ねられた。

すぐに彼女は何のことか思い当たった。

基本的に畜産と交易で暮らしている部族であるが、時折略奪を行う。

勿論、行うのは漢族の街だ。

彼女の部族をはじめ、涼州を根城にする異民族は今は漢に対して反乱を起こしている状態。

だが、元々従ったり反抗したり、の繰り返しなので数年もしないうちにまた漢王朝に従うだろうことは簡単に予測できた。

そもそも反乱といっても、本格的に漢を倒そうなどという気はなく、略奪などをした結果、漢王朝から反乱の認定をいただいた、ということである。

略奪はお小遣いや女も手に入ることから、ちょうどいい金策なのだ。

遊牧民族にとっては。

ただ、面白いことにある街では略奪を行う傍ら、別の街では行商をするということもある。

主に彼女達の部族と仲がいい董君雅が治める街が行商の対象だ。漢に対して反乱を起こしているのに、漢の役人として涼州を治めている彼女とは仲が良いという極めて不可思議な状態である。

董君雅は中々のやり手であり、贈り物などをし、異民族達と友好関係を結ぶ一方、自分が抑えているからこの程度で済んでいる、と中央に報告している。

色々な意味でいいところ取りだ。

閑話休題

「どうしよう」

唸る高順に母親はその大きな胸を押し付ける。

2人は全裸である。

冬以外、寝る時は全裸に毛布と母親が決めていた。

これには2つの意味がある。

男としての高順の成長具合を見るため、そして自らを女として高順に意識させる為。

「いいじゃないか。お前だってそろそろ男としても目覚めはじめている。女の1人や2人、抱いておかないとな」

そう言いつつ、母は高順の尻へと手を伸ばし、そして後ろから股

を責める。

体を震わせる高順。

だが、拒否はしない。

知識として、あるいは記録として彼女は前世のことを覚えている。彼の意識がそのまま高順となったわけではない。

現代的な倫理観を知識として、記録としては知っているが、体験として彼女は知らない。

故に近親相姦が悪いとも、略奪が悪いとも彼女は感じられない。それは現代でのことであって、今の大陸では違う。

「でも、初めては私が欲しいしなあ」

そう言いつつ、高順を責める。

「襲撃に参加するのはまだやめとく……」

母親の背中に手を回し、抱きつきながらそう途切れ途切れに告げる。

「色々やりたいから……」

「わかった」

母はそう答え、本格的に高順を責め始めたのであった。

翌日、董君雅の本拠地である臨？に行商へ行くと長が皆の前で宣言した。

そして、人選が行われたのだが、そこに高順が選ばれた。

読み書き計算ができる高順はこういうときにこそうってつけの人材だ。

高順は胸をときめかせた。

彼女が部族から離れるというのはこれが初めてであつたからだ。

そして、それが董卓の母親である董君雅の下へ行くとすれば尚更。

ともあれ彼女の希少性を考えれば部族から離れたことがない、というのも納得がいくだろう。

両性具有者であることが知れたら、そのまま誘拐されてどこかに売り飛ばされる可能性が極めて高い。

もっとも殺し合いこそ経験していないものの、結構な強さとなつてゐる彼女を誘拐できるような輩は滅多にいないだろうが。

そんなわけで彼女は臨？へ向けて出立した。

初めて見るこの時代の街に高順は圧倒された。

知識としては知っているが、実際に見るとやはり違う。

街は高い城壁に囲われ、大きな城門から人々は出入りしている。

まさに城塞都市。

「何してんの、早く行くよ」

そう言うのは高順の母。

董君雅と知り合いだから、という理由で行商の隊長としてついできた。

高順は間の抜けた返事をしつつ、物珍しげにきよろきよろとあちこちを見回しつつ、街へと入った。

今回の商売相手は他ならぬ董君雅。

大通りをまっすぐ隊列を組んで直進する。

納めるものは馬10頭。

ただし、普通の馬ではない。

遊牧民族の育てた馬は一般に軍馬として優れている。

故に官軍にとっても、そして諸侯にとってもそれは喉から手が出る程に欲しいもの。

やがて一際大きな城が見えてきた。

一行は粛々と城へと進む。

門番には既に連絡がいつているらしく、特に引き止められることもなく一行は城内へと入る。

そして、入ってすぐに妙齡の美女が出迎えた。

銀髪を後ろで一つに纏め、白い肌が眩しい。

そして何よりも……たゆんと揺れる胸。

彼女以外にも文官と思しき男や兵士達がいるが、彼女程存在感を放ってはいない。

「夕、久しぶり」

「久しぶり、晴」

馬から下りつつ母親は親しげに妙齡の美女——董君雅と挨拶する。

「で、早速だけどこれがうちの娘」

馬に乗った高順に近づき、そのまま体を抱っこして董君雅の前に持つてくる。

「へえ……中々可愛らしい子じゃないの」

「文字の読み書きに計算に孫子その他諸々。色々やっててさ」

その言葉に董君雅はまじまじと高順を見つめる。

「……ね、よかったらうちに見習いとして働きに来ない？ あなたが望むなら太学にゴリ押しで入れることもできるけど」

高順は目を輝かせた。

異民族である自分がまさかそんなところに入れるとは思ってもみなかったことだ。

学ぶこと……というよりか、どちらかといえば自分の経歴に泊をつけた彼女だ。

異民族出身だけどエリートだぞ、とそういう風にどや顔したいのである。

キラキラと目を輝かせる娘に母親——高廉は苦笑する。

「お前は一部族の長で終わるようなヤツじゃないってことは産んだ私が一番知ってるよ」

そう言いながら彼女は高順を地面に下ろす。

「とりあえず、さつさと取引をやっちまおう。その後、ゆっくり話せばいい。彩、計算頼んだ」

娘に丸投げする高廉であつたが、できない自分がやるよりはできるヤツがやった方が早いというある意味で合理的な考えである。

もつとも高順としてもそれが役目としてついてきたので異論はない。

「馬1頭10万銭だから……10頭で……」

えーと、と悩む董君雅に対し、高順は涼しい顔で答える。

「100万です」

「……速いわね」

その言葉に不敵に笑う高順。

面白い、とばかりに董君雅は試してみた。

「馬1頭が9万だつたら、20頭で幾ら？」

「180万です」

「4万5000で100頭だつたら？」

「450万です」

「服が1着220銭、5着で？」

「1100銭です」

「素晴らしい！　うちの財務に是非欲しいわ！」

「私は高いですよ？　雇うならば太学でかかる全ての費用とお小遣いを頂きたい」

「それくらいなら安いものよ。何ならどっかの県令にでもなる？　あなたならすぐになれるわ」

「県令はちよつと……太学出たら色々と見て回りたいので」

「そう……まあ、太学も18歳以上という制限があるけど、人脈と金と実力があれば何歳でも入れるし」

「では1年程、董君雅様のところで見習いとして働かせてもらい、その後入学という形で」

「問題ないわ」

母親を放っておいてとんとん拍子で決まった話だが、当の高廉は何とも思わない。

高順はもう大人である、と思っていたからだ。

「というわけで、晴。今日からこの子、うちで面倒みるから。後で荷物送って頂戴」

「ああ、わかったよ。長にはうまく伝えておこう」

手をひらひらさせる高廉に高順は苦笑する。

母親は竹を割ったようなサッパリとした性格だ。

高順はこれからの自身の飛躍に思いを馳せつつ、華雄に手紙を出す、と思ったのだった。

「ああ、そうそう。月を呼んできて頂戴」

董君雅が手近な兵士にそう告げた。
その単語に反応したのは高廉。

「あんたの娘、前に会ったときはまだ10歳かそこらだったっけ？」
「そうよ。大きくなって可愛くなってもう……」

しばしの母親同士の井戸端会議。
そうこうしているうちにも高順は文官から代金を受け取り、念の
為に1頭ずつ代金を確認し、1頭ずつ担当の兵士に引き渡していく。

それが少しの間続き、全ての作業が終わったとき、タイミング良
く彼女は現れた。

董君雅と同じ色の髪を肩にかかる程度に切り揃えている。

「あの、母様……何か御用ですか？」

「月、今日からうちに見習いとして働くことになった子よ」

董君雅はそう言い、高順へと視線をやる。
対する高順は少女に会釈する。

「初めまして。姓は董、名は卓、字は仲穎と申します」
「私は姓は高、名は順、字はありません。高順とそのまま呼びく
ださい」

高順は名乗り返し、そして一礼。

董君雅にはわりと軽く接することができたが、そこは母親という
後ろ盾があつてこそ。

いつでもどこでも礼儀正しく……という程に意固地ではないが、わきまえるべき場ではそうすることができる彼女である。

「……いや、もうちょっと緩くいつでも大丈夫よ？」

「えっと……あの……」

母親の言葉にへう、と顔を俯かせる董卓に思わず唾を飲み込む高順。

可愛いのである。

もう部屋に閉じ込めてずっと頬ずりしていたいくらいに可愛いのである。

彼女は自分の選択が間違っていないかったことを確信しつつ、知識として知っている董卓とは180度違うことにある意味安堵とした。どう見ても気弱そうな目の前の少女が洛陽で暴政を振るうとか、腕力に優れているとかとてもではないが思えない。

「そ、その……私の真名は月です」

いきなりの真名に高順は啞然。

母親2人も同じく啞然。

その反応に首を傾げる董卓。

これから一緒に住むなら、と彼女としては当然のことをしたまでだが……どうにも彼女はズレているらしかった。

「あ、えっと……真名は彩です」

「彩ちゃん……綺麗な名前だね」

微笑む彼女に高順は胸が高鳴る。

「月だって綺麗よ」

言ってからハツとする高順。

敬語ではなかったことに慌てて訂正しようと口を開く。

「も、申し訳ありません。敬語ではなく……」

「ううん、大丈夫。あと……その、できればお友達になってくれると嬉しいな」

顔を俯かせて恥ずかしそうにそう言う董卓に高順は董君雅へと視線を向け、説明を求める。

「月は城からあんまり出たことがなくてね。体が弱いつていうわけじゃないんだけど、まあ、私の過保護というかそういうもののな」

高順は董君雅の意図がようやくわかった。

文官として使いたいというのは役人としての董君雅であり、母親としては娘の相手をしてあげて欲しい、というものである、と。

とはいえ、こういう女の子の相手ならば高順としては全く問題がない。

「駄目、ですか……？」

上目遣いで高順を見つめる董卓。
断れる筈がなかった。

「いいわ。今からずっと永遠にお友達よ。ただし、公的な場以外では敬語とかはしないから」

「
うんっ
」

満面の笑みで董卓は頷いたのであった。

彼女の立ち位置（前書き）

独自設定・解釈あり。

彼女の立ち位置

高順が董君雅の下へきて早3ヶ月。

いきなりやれ、と言われて書類仕事をできる程に高順は超人ではない。

彼女はまず書類の書き方や見方を習い、ついで失敗しても問題のないような重要度の低いものをコツコツとやり始めた。

そして、今ではすっかり慣れ、重要な仕事を任されるようになっていた。

彼女は計算の速さを買われ、歳入・歳出に関わる業務全般に関わっていたのだ。

これに対しては助かったと思う文官と新参でかつ子供の癖に、と思う文官とに反応が分かれた。

後者に関しては当然の反応だろう。

どこの馬の骨とも知らぬ異民族の小娘がしゃしゃり出ているのだから。

ともあれ、高順はその傍ら、調練で董君雅の兵に混じり汗を流したり、武官達と模擬戦を行ったり。

こちらは書類仕事程に難関ではなく、彼女は楽しむことができた。また、あるときには警邏として街を巡り、不埒者を引っ捕える。

そして息抜きとして彼女はあることを行っていた。

窓から差し込む穏やかな日差し。

その日差しを受けつつ、高順はゆつくりと盃を取った。

彼女はまず色を楽しみ、ついで香りを楽しみ、最後に味を楽しむべく口をつけ、ゆつくりと飲み干す。

その目を閉じ、しっかりと余韻を味わう。

「美味しい」

暫しの間をおき、高順は告げた。

「よかった」

董卓は安堵したかのように笑みを見せた。

彼女が自ら淹れたお茶を高順は飲んでいた。

暇さえあれば彼女は董卓の世話と称して、お茶会に勤しんでいた。

「今日は1里を馬で誰が1番速く走れるかっていう訓練をしたの。

勿論、私が1番だったわ」

「彩ちゃんはお馬さんと仲がいいもんね。けど、凄いな。大人の人を負かしちゃうなんて」

「馬は私達にとって相棒だって母さんから聞いたけど……本当にその通りだわ。でもでも、乗り心地があまりにも酷かったから、鞍とか鐙とかそういったものを作ったの。鞍があれば股が痛くならないし、鐙があれば馬上から弓を撃つこともそれなりに簡単にできるわ。

あと地味に重要な点として馬の蹄が痛むのを防ぐ為に蹄鉄を作った
りとか……」

うんうん、と董卓は頷く。

彼女からすれば高順の話は何もかもが新鮮であつた。

「蹄鉄なんかはどっかの街の鍛冶屋に依頼して作ってもらつたの。
母さんに頼んで。馬具は私達にとつてとても重要だから、これに関
しては皆真剣に聞いてくれたわ」

「そうなんだ。彩ちゃんは本当に凄いなあ……私なんて勉強で精一
杯」

肩を竦めてみせる董卓に高順は優しく告げる。

「あなたならできるから、大丈夫」

「うん……ありがとう、彩ちゃん」

「でもね、私としてはあなたも少し体を動かした方がいいと思うの」

「そうかな？ でも、母様が……」

「運動不足だと頭が鈍る。いい気分転換になるわ」

「それじゃ……行っちゃおうか？」

「行こう行こう」

そして、2人は城の外に行くことになった。

当然、門番に見られては面倒臭いことになる。

故に馬で強引に突破することに。

やり方は簡単で高順の後ろに董卓を乗せ、彼女に大きな布を被せる。

そして、最初から馬を速く走らせれば門番の前を通るのは一瞬。街の外へ行くなんて危ない真似はせずに街中をてくてくと練り歩くだけなので、危険度は極めて少ない。

そして、董君雅からは外へ行くことに関しては特に何も注意を受けていないので知らなかったで通すことができる。

子供が大事なのは分かるが、あまりにも過保護なのはかえってよろしくない、ということを高順は知っていた。

「行くよ？」

「はい」

門番からは見えないう角に隠れ、董卓に確認の意を込めて問いかけた。

彼女はドキドキしているのか、少し興奮気味だ。

「布、被って」

高順の指示に手早く布を頭からすっぽり被る董卓。

これで高順の後ろにあるものは何がなんだか分からなくなった。足が見えているのはご愛嬌。

高順にしっかりと抱きつき、董卓はそのときを待つ。

「行くぞ」

董卓の返事を待たず、高順は手綱を叩く。
すぐさま彼女の愛馬は反応し、走りだす。

彼女はさらに数回手綱を叩き、最高速へと。
今、城門に門番以外の人影はない。

「お勤めご苦労！」

そう言いつつ、高順は門を突破。

門番は目を白黒させ、彼女を見送ることしかできない。

それから徐々に馬の速さを落とし、十分に城から離れたところで
董卓に布をとるよう指示した。

「今もまだ胸がドキドキしてます」

そう言う董卓に高順はにかつと笑う。

「イケナイ子になっちゃったね。でも、そういう月もいいと思うの」
「えへへ……」

やや上目遣いではにかむ董卓。

可愛い、と抱きしめる高順。

柔らかでほんのり暖かくていい匂い。

そんな董卓に高順はもう頬が緩みっぱなしだった。

それから2人は馬を適当なところに預け、通りを歩くことにした。

董卓は見るもの何もかもが新鮮なようであちこちを見回し、おのぼりさんといった風であった。

お昼ご飯はお茶会前に食べたばかりなので特にお腹は空いていない。

その為、屋台などは見学するだけであった。

また露天商達が簡素な店を構えており、ガラクタから何やらよくわからないものまで様々なものが売られていた。

董卓と高順はそれらの店をじっくりと見物していく。

その中で小奇麗な石を売っている店があった。

高順はともかく、董卓はちよつと背伸びしたいお年頃。

並べられた色とりどりの石を見て、感嘆の息を漏らしている。

それを見た高順はすかさず財布の中身を確認。

財布とはいっても、この時代に紙幣はなく通貨のみなので結構に嵩張る。

故に彼女は１０００銭ずつ袋に入れて持ち歩いていた。

彼女の給料は驚くなかれ。

月に３０００銭貰っている。

これは単純な給料であり、太学などの費用とは別だ。

特に使うこともないので然程減っていないその給料を、彼女は一応デートということで、まるまる持つてきていた。

８０００あれば足りるかな、と思いつつ董卓の様子を窺う高順。彼女はある商品を見つめて動かない。

それは小さな紅玉だ。

小指の先程の大きさであるが、その赤は実に鮮やか。値札には８０００と書いてある。

「即金で買った」

どん、と袋を8つ店主の前に置く高順。
ハツとして彼女を見つめる董卓。

そんな彼女ににかつと笑ってみせる。

「まいど。おまけにこれもつけておこう」

そう言つて店主はその紅玉をちょうどいい台座にはめ、台座に紐を通す。

「首に掛けるよりは頭につけた方がいいぞ」

そう言いつつ、紅玉を高順に手渡した。

礼を言い、受け取つた彼女はそれを董卓の帽子とベールを取り、彼女の頭に掛けた。

董卓は口を数度開くが言葉にならず、顔を赤くして俯いてしまふ。
そんな彼女とは裏腹に高順は満足そうに笑みを浮かべる。

「あなたの髪と白い肌によく似合ってるわ」
「へう……」

りんごよりも真つ赤に染まつた彼女。
うんうん、と満足気に頷く高順。

「さ、行きましょつか」

高順に手を引かれ、董卓は歩き出す。
握られたその手を彼女はぎゅっと握り返した。

一方その頃、城のとある一室に集まっている者達がいた。

彼らは高順により仕事を奪われた元財務関連の文官達。

汚職などは当然しておらず、ただ真面目に努力し、日々務めを果たしてきた。

しかし、高順が現れて1ヶ月ほどしたとき彼らの仕事は無くなってしまった。

高順が彼らよりも優れていたから、というだけで。

今、彼らは雑務の処理をしているが、給料は下がるし、やりがいはないし、と散々であった。

誰しも自分のやることには誇りを持つ。

彼らからすれば自分が誇りを持ってやってきた仕事を横から奪われた形だ。

しかも、相手は太学出のエリートなどではなく、異民族出身の、自分達の子供と同年くらいの娘。

彼らは決して無能ではない。

財務とはあらゆる組織の心臓であり、それを担うことは無能では

できない。

今、領地の財務を牛耳っているのは高順であり、彼らがやっているときよりも正確かつ迅速に処理されている。

財務とは主に金の流れの管理だ。

収入と支出が釣り合うように管理せねばならない。

電卓などは当然なく、人力での計算がどうしても必要となってくる。

効率が上がっていいことではあるのだが、感情的に納得ができない彼ら。

能力主義となったときの弊害だ。

人間は機械ではない。

かといって彼らは高順を暗殺してしまおうとは思っていない。そして、業務の足を引っ張ろうとも思っていない。

どうにかして返り咲いてやろう、と彼らは額を寄せ合って計算問題を解いていた。

過去に処理されてもはや用済みとなっている書類を写し、それを題材にして実際の仕事と同じようにやる。

答えは分かっているから、あとは速さと正確さ。

その為には反復練習が必要となる。

幸いにも題材は数多くある。

故に暇を見つけてはこうして集まって、または集まれないときは個人で計算練習を行っていた。

やられて腐るような連中ばかりではない。

そして、そんな文官達の動きは当然、主である董君雅も知っていた。

というよりも、そうなるよう焚きつけたのが彼女である。

「いい傾向だわ」

董君雅はポツリと呟いた。

財務を全て高順の下に纏めるという英断なのか、それとも無謀な判断なのか、どちらともいえない決断をした彼女。

確かに高順は経験不足ながらも、それを補って余りある計算能力と教養がある。

色々勉強していた、という高廉の言葉は鼻屑などではなかった。

「月との関係も良好だし…… ああ、安心だわ」

数刻前、高順が誰かを馬に乘せて城から街へと出ていったことが報告されている。

誰だかは確認されていないが、状況的に董卓しかありえない。城内どこを探してもいないのだから。

母親としては不安半分、安心半分であった。

「そろそろ一人で仕事させてみようかしら」

高順が働き出してまだ3ヶ月とみるか、もう3ヶ月とみるか。

董君雅は後者とした。

故に彼女は再び決断する。

「賊退治の陳情が届いていたから、その先遣隊として行ってもらいましょう」

対異民族への最前線と言ってもいい董君雅の領地だが、その内実は寒い限り。

文官はともかくとして武官の数が極めて少ない。

基本的に武官・文官は自前で用意しなければならない。

文官は文字の読み書きとそれなりの教養があれば誰でもそれなりにはできるが、武官はそうはいかない。

それなりの將軍となるには多大な努力と経験、もしくは才能のどちらかが、最低でも必要だ。

しかし、大規模な戦がなく、せいぜいが山賊などの討伐でそんな輩が出てくるわけがない。

ましてや、賊の討伐程度であれば楽にできるので調練や座学に身が入るわけもなかった。

さて、そんなところに降って湧いた高順。

文武両道を地で行っている彼女は単純な腕っ節の強さは勿論、用兵も董君雅軍で一番であった。

これもまた董君雅の賭けであるが、過去に一度、自らの武官と彼女に騎兵のみを同数持たせて戦わせたみた。

腕前を披露してもらおう、とそう思った次第。

結果として武官側が彼女の用兵についていけずに崩壊し、董君雅は自分の部下の不甲斐なさに悲しさ半分、友人の娘の凄さに嬉しさ半分であった。

もつとも、高順のやり方はこの時代としては極めて異質であり、董君雅から見てもそれはよくわかった。

やり方としては簡単で、自身は実際の戦闘には出ず、全体を見渡せるところに行き、伝令を多く用意し、四半刻よりももっと短い時間、現代的単位に換算するならば数分単位で状況に応じた指示を矢継ぎ早に出したのだ。

それも複雑な指示ではなく、極めて簡単な指示。

前へ、後へ、右へ、左へ。

出した指示はそれだけである。

このやり方は1000年以上先、ドイツ軍によって実践されることになる電撃戦の初歩の初歩であった。

機動戦という程のものではなく運動戦に分類されるやり方であるが、それでも彼女は真新しい兵器や武器を作ることなく、伝達手段の充実とその速度の優越、そして意思決定速度の優越によって本職を圧倒したのだ。

確かに彼女は未来の知識、それも戦術・戦略的なものを持っているとはいえ、それらは孫子から派生したものだ。

例えヨーロッパなどの遠い異国の戦術・戦略であろうと、それらを調べてみれば孫子に通じるものが多くある。

何にでも応用できる孫子が優れている証拠だ。

彼女ならずとも、孫子を学べばできないことはない。

要は柔軟な発想ができるか否かである。

さて、この結果、元々いた数少ない武官は揃いも揃って自信を喪失してしまった。

彼らにとって高順は異次元の存在であった。

董君雅の軍は総数こそ少ないが、騎兵の割合が多く、実に4割にも達する。

異民族と仲良くすることで良馬を比較的安く手に入れられること、また仮想敵がその異民族であり、彼らを捕捉する為に速さが必要であった。

その分、費用も掛かるが、そこも異民族との交易で補っているのだから、まさにダブルスタンダード。

まあ、そのおかげで董君雅の領地内では異民族はこの部族も略奪を働いてはいない。

代わりに余所の領地で略奪を働いているのだが、そこらは董君雅は知らない振りをしている。

自分の領地に被害が出なければそれでいい、と彼女は割り切っていた。

ともあれ、そんな騎兵が主力の軍に、生まれたときから馬と共にいると言っても過言ではない異民族の高順。

水を得た魚とはこのことだ。

将来的には太学へ行ってしまう、その後は自分で勢力を興すか、どこかの有力諸侯に仕えるであろう彼女を使わない手はない。

今、高順の主は董君雅なのであるから。

「とはいえ、戻ってきたら小言を言っておきましょうか。一応、危険はあるわけだし」

例え街中といえど、何が起こるかわからない世の中である。
故に董君雅の心配ももっともであった。

大器晩成（前書き）

独自設定・解釈あり。

機種依存文字：賈？は賈クのことです。

大器晩成

「……居心地悪いなあ」

高順は思わず呟いた。

彼女は今、董君雅の膝元を離れ、1週間ほど行軍したところにある街にやってきていた。

さすがに膝元と比べれば小規模ではある上に到着した時間が既に夕暮れ時だが、それでも中々に活気がある。

だが、彼女に向けられる視線は良いものではない。

恐怖、怯え、不安……そういったものばかりであった。

董君雅が異民族に対して友好的とはいえ、その領民までもが全員友好的とは限らない。

余所から異民族の略奪に遭って、這々の体で異民族に襲われていない董君雅の領地にやってきた者も多い。

差別というのはどんなに法で規制し、倫理や道徳を説いても根強いものであり、10年、20年といった短い期間で払拭されるものではない。

董君雅もそのことは知っている筈なのだが……知っていてなお、どのような現実であるかを知らしめる為にこういうようなことをしたのかもしれない。

高順や華雄の出身部族……いわゆる羌族はこの一帯では蛇蝎に等しい。

また彼女達の部族は他の異民族——匈奴や鮮卑などとは歴史的に見て極めて仲が悪かったりする。

ともあれ、一見しただけでは区別がつかないが、多くのものは銀色、あるいは灰色髪をし、色白だ。

董卓もまたそのような容姿であるが、髪色はともかく、肌色に関してはただ単に外に出なかった為に色白となったただだ。

例外とすれば高順の母はどこぞの父方の血のおかげで色白であるが黒髪であり、怪訝な顔をされるものの、よろしくない視線を向けられることは少ない。

髪の色と肌の色が異民族のものに合致しなければ差別的視線に晒されることはないとはいえ、高順本人としてはこの容姿がかえって気に入っていた。

「これはもう駄目かもわからんね」

高順はちらり、と後ろをついてくる兵達に視線をやってはそう口に出してしまう。

賊退治に、と董卓に与えられたのは騎兵およそ100。

董卓の膝元では真面目に従っていた彼らであり、また高順の有能さも間近で見ていたのだが……それでも心に根付いたものは簡単には取り除けない。

好意的視線を向けろ、とは言わないが、恐怖とか不安とかそういった視線を向けるのは勘弁して欲しい高順である。

ずつついて回る問題なんだろうなあ、とより暗澹たる気持ちと彼女はなった。

そうこうしているうちに一行は役所にたどり着いた。

兵を待たせ、高順は1人、役所へと入り……やはりよろしくない視線で迎えられた。

ともあれ、そこらはさすがに役人。

上の命令には従うらしく、高順をこの街の顔役のいる執務室へと案内した。

「誰かと思えばどこの蛮族か」

部屋に入るなりいきなりの売り言葉であつた。

目の前にいるのは壮年の男性であつたが、彼の顔は憤怒に染まっている。

それもそうだろう。

敵対者の筈の異民族が兵を率いて、上司の下からやってきたのだから。

これで怒るなという方が逆にどうかしている。

そこらへんは高順も予想していたので彼女はただ事務的に済ますべく、口を開く。

「董君雅様より派遣された者です。私を余所へやりたいのであれば賊についての情報をお教えください」

皮肉とも、相手の精神を気遣った発言ともとれる。

「一つ言っておくが、わしの姪っ子は嫁ぎ先でお前らに殺された。お前らなんぞ消えてなくなればいい」

息を荒らげつつそう言う彼だが、高順は動じない。

彼女は同族とはいえ、顔も知らぬ他人が、同じく他人を殺したと

ところで別段何とも思わない。

自分の周りで起こった、もしくは自分でやったこと以外は遠い出来事なのである。

何も言わない高順に彼は体を震わせるが、それでも仕事は仕事。

「ここ最近、周辺の村が襲われている。最近襲われたのはここより北西へ2日程行った村。まだ襲われていない村はその村より北へ半日程いった場所にある。賊の数は100以上」

聞きたい情報を聞けたので高順は形ばかりの礼を言い、さっさと退室した。

その方がお互いの精神の為に良いのは言うまでもなかった。

高順は1日この街で休息を取り、明朝出発することを兵達に伝え、とそそくさと彼らから離れた。

街中で向けられる視線はやはり変わらず。

この分だと宿も取れないだろう、と彼女は溜息一つ。

アメリカにおける黒人差別さながらであった。

否、むしろ公民権運動が起きそうにない分、余計に性質が悪い。

どちらが先にやったかはわからないが、お互いがお互いを憎み合っていると言っても過言ではないこの状況は八方塞がりだ。

とはいえ、高順はそんな差別を無くそうとは思わない。

確かに不便ではあるが、それも一時のこと。

太学を出、そしてそのまま出世街道を進めば誰も自分に文句は言えない。

勿論、中々うまくはいかないだろうが、それも無視できぬ程に実績を積みばよいのだ。

それに何よりも、高順にとっては力無き人を救おうとかそういう正義感に満ち溢れてはいない。

そもそも、そんな正義感に溢れていたならば当の昔に部族を飛び出し、略奪をする彼らと戦っている。

勿論、道端で困っている人を助けられない程に彼女は薄情ではないが、わざわざ困っている人を探しに行くなどということはない。

彼女にとって何よりも欲するのは自分の力を使える場所、もしくは自分の力を欲し、扱ってくれる者。

その為にこの時代に転生して以来、彼女は努力をしている。

だが、それは転生などなくとも、この時代に生まれ、志を持った者なら誰もがやっていることだ。

彼女の最大の武器は未来における知識であることは言うまでもない。

しかし、重要なところは例え未来の知識があっても扱うのは高順本人であるということ。

知識が必要に応じて勝手に出てくるわけではない。

持っている情報や知識をどのような局面で、どのように扱い、最良の結果を出せるか。

それを為すのは十分に才能といえるのではないだろうか。

そして、それを為す者を軍師というのではないだろうか。

思い描く夢は壮大であり、その為の道は遙か遠くまで続いている。高順に転生した彼女ではあるが、呂布の下にっこうという気はない。

董卓を見る限りでは知識にある呂布とは正反対の可能性もあるが、警戒するに越したことはないだろう。

この世界が史実とも、三国志演義とも大幅に違う世界である以上、何が起きても不思議ではなく、そして高順が何をしても問題はない。

色々と考えていればもはや彼女は自らに向けられるよろしくない視線は全く気にならなくなっていた。

そうこうしているうちに街の中心部から離れてしまった。

治安が悪そう……というわけでもないが、それでも中心と比べれば薄暗く、閑散としている。

人通りはほとんどない。

「ここらでいいかな」

適当な空き地に入り腰を下ろす。

飯は何にしようと思いつつ、売ってくれないだろう、とすぐに思

い直す。

仕方がないので携帯口糧の出番である。

とはいえ、この時代、食料は個人単位で持ち運ぶというよりも、本来は輜重隊が食事に関しては全て賄うのだが、戦といえば携帯口糧という妙な固定観念で高順はお手製の背囊に簡単な応急器具や携帯口糧を詰め込んできていた。

勿論、時間を潰す為に、と本も持ち込んである。

ともあれ、個人で持ち運ばせないのは簡単な理由で食料を渡したらそのままいつの間にかいなくなっていると、そういうことがある得るからだ。

国に仕える職業軍人などではなく、兵士は農民や傭兵に過ぎない。忠誠という概念が無い以上、彼らに食料を渡すことはただの施しに等しい。

「背囊は便利ね。この時代にないなんて……意外」

背囊、すなわちリュックサックはもう少し時代が下ってから、ヨーロッパで作られるものだ。

この時代にないのも仕方がない。

高順は背囊よりまず数枚の紙を取り出し、それを適当に折り、皿のような形とする。

そして、その上に干し肉を数枚載せる。

竹で作った水筒を取り出し、さらにもう一つ、同じものを取り出す。

2つ目の方は水の代わりに白菜や人参などの野菜を塩漬けにしたものを入れてある。

これで今日の晩御飯は完成。
質素ではあるが、中々に美味しそうだ。

箸を取り出し、まずは塩漬けから食べようとした、そのときであった。

通りを2人組が歩いて行く。

片方は中年の男、もう片方は緑髪とメガネが特徴的な少女。

男の方は鼻を伸ばしてだらしく、少女の方は諦めの境地といった表情だ。

どちらも役人なのか、整った身なりをしている。

そして、男の方が何やら小声で少女に言っている。

耳を済ませ、高順は溜息を吐きたくなった。

「お前のような者を置いてやっているのだから……分かってるな？」

少女は無言で僅かに頷く。
微かに体を震わせながら。

「ようやく仕事も一段落……誰かのおかげでこんなにも時間が掛かるとは……」

嫌味ったらしい表情でそう言う男。

「今までは口だけであつたが、これからは体にもたつぷりと教えてやらんな」

高順は深く溜息を吐いた。

自分は呪われてでもいるんじゃないだろうか、と。

こんな分かりやすい悪役と悲劇的な少女。
大方、助けた後に何かあるんだろう、と。

ともあれ、助けないという選択肢もないのである。
そこまで彼女は薄情ではない。

しかし、力で解決するというのがもまた問題だ。

後先考えずにやればとても楽ではあるが、後々極めて面倒くさい
事態が起こりうる。

得てしてこういう輩は権力を盾に色々とねちっこくやってくるの
だ。

そういうわけで高順は一計を案じることとした。

彼女はそのまま立ち上がり、2人組へと近づいていく。
そしておもむろに男に後ろから抱きついた。

驚き振り返る彼に高順はにっこりと微笑む。

「ねえ、役人さん。そんな小娘よりも、私と良い事しない？ タダ
でいいから……」

高順は今、12歳である。

だが、母親譲りの長身からとてもそうには見えない。

また発育も良く、胸も大人顔負けだ。

「お、おお……」

鼻の下をこれ以上なくくらいに伸ばしつつ、男は高順の顔をじっ
くりと見、あることに気がついた。

「お、お前……異民族か……」

そう言いつつもやっぱり鼻の下を伸ばしている男。
正直なものである。

そうつわけで高順はトドメを刺すことにした。

「駄目？　どんなに激しくてもいいから……」

そつ耳元で囁き、彼の耳を甘噛み。

ぞくぞくつときた彼はもはや陥落した。

「文和、少々用事ができた。今日はさつさと帰れ」

そう言われた少女は高順に軽く頭を下げるとそそくさと去っていった。

「さて……どのような体か、楽しむとしよう」

好色な笑みを浮かべ、そんなことを呟く彼に高順は楽しそうに告げる。

「普通の女とは違うのは確かよ。ええ、普通とはね」

そして2人は適当な宿へと入っていった。

それから30分後、その宿から絶叫が響き渡り、男が素っ裸で通りを疾走するという珍事があった。

これにより彼は現代でいう、猥褻物陳列罪によりすぐに捕らえられ、牢屋にぶち込まれることとなった。

彼は女が実は男だった、と主張したが、取り調べをした役人は何をバカなことを、と全く取り合わなかったのは言うまでもない。

合法的で、そして絶対に反撃を受けないやり方であった。

明けて翌日早朝。

高順は出発すべく、兵達の様子を見ていた。

誰も彼も疲労の色はない。

そして、彼女がやってきたのはそんなときであった。

「き、昨日はありがとう」

高順と会うなり、緑髪の少女はそう告げた。

気恥ずかしいのか、その視線はあっちこっちを彷徨っている。

「別にいいけど……それだけ？」

「ボクがお目付け役としてついていくことになった」

なるほど、と高順は頷く。

昨日、男が飛び出す前に彼女は色々と言から少女について聞き出していた。

それによれば無能だとか何とか。

話が本当ならば体の良い厄介払いなのだろう。

とはいえ、さすがに本人に向かって無能なのかどうか聞くわけにもいかない。

「一応、自己紹介しておきましょうか。私は姓は高、名は順。字はないから、高順と呼んで頂戴」

「ボクは姓は賈、名は？、字は文和」

思わず高順は固まった。

その様子に少女——賈？は首を傾げる。

高順は深呼吸一つ、マジマジと賈？を見つめる。

「……えっと、失礼だけど、その名は本名？」

「そうだけど？」

何でそんなことを、という表情の賈？。

対する高順はそういえば、と思い出していた。

若い頃、賈？は中々周囲から認められず、最終的に役人をやめて郷里に帰ってしまうのだ、と。

そんなことを考えていたが故に高順の口から言葉が洩れ出る。

半ば無意識的な、素直な気持ちだ。

「あなたの周りにいる連中は皆、目玉の代わりにガラス玉が詰まっているのね」

賈？は数秒掛けてその言葉の意図を理解する。

遠回しに褒められたことに彼女の頬は徐々に赤くなっていく。

「あ、あんた何なのよ！ 急にそんなこと言って！」

怒っているような口調であるが、その顔から恥ずかしさを隠そうとしているのが見え見えである。

対する高順は涼しい顔で告げる。

もしボロを出してしまったとき、誤魔化す為のそれっぽい言い訳を。

「夢で見たのよ」

「夢？」

オウム返しの問い掛けに高順は頷き、賈？の両肩に手を置き、じつとその瞳を見据える。

「賈？っていう人が軍師として大陸中に名を轟かす夢をね」

「ボクが……軍師……？」

「そう。それも稀代の名軍師として」

「で、でも所詮は夢でしょ！」

そう告げる賈？に高順は静かに、だが力強く告げる。

「大丈夫、あなたならできる」

高順の瞳を賣？はじつと見つめる。

目は口ほどに物を言う。

賣？は高順の言葉が嘘偽りのないことを悟った。

「……この仕事が終わったら、実家に帰ろうかって思ってたけど」

そこで一旦言葉を切り、数秒の間をおいて彼女は告げる。

「ボク、あなたについてく。その言葉が本当ならボクにとっては良し、もし嘘ならあなたの首を取る」

「その前に私があなたの首を取ることは？」

「その結果がいつ出るのか、あなたには分かるの？　ボクには分からない。是非、教えてほしい」

賣？の切り返しに高順は一瞬、呆け、ついでクスクスと笑う。

神ならぬ身、いつどこで嘘か真か判断できるか誰にも分からない。つまるところ、賣？にとっては嘘であっても真であっても害はないのだ。

高順は気を取り直し、告げた。

「さて、出発しよう」

こうして一行は村を目指し、出発したのであった。

勝手にやって勝手に帰ります(前書き)

独自設定・解釈あり。
微グロあり。

勝手にやって勝手に帰ります

「どういうことですか！」

バン、と賈？は机を叩いた。

彼女の前には村の長とその補佐役達。

彼らは役人ではなく、この村の住民だ。

「しかしですね、そのような異民族の者に……」

そう言い募る村長に賈？は再び声を大にして告げる。

「彼女は董君雅様の下から派遣された者です！ 異民族かどうかは関係ありません！」

「しかし、いつ彼女がこちらを襲ってくるか……」

「ですから！ そんなことをするつもりならわざわざ董君雅様の部下になったりはしません！」

昨日、村に着いた高順一行。

だが、高順がいるが故に村長をはじめとした住民達は村へ入れることを拒否。

仕方がないのでとりあえず村の外で一泊した後、こうして賈？が抗議に赴いていたのであった。

高順も責任者ということであつていきっていた。

ただし、武器は当然取り上げられ、周囲を彼女が連れてきた兵士達に囲まれ、さながら凶悪犯罪者の移送さながらに。

これについても賈？が猛抗議したが、高順は好きにやらせていた。

話し合いは半刻程続いているが、平行線を辿っている。

このままでは埒があかない、と齒を噛み締める賈？。

彼女が再び口を開こうとしたとき、それを手で制する者がいた。

「高順……」

どういつつも、と言いたげな彼女に高順は不敵な笑みを浮かべ、
村長達に言い放つ。

「私の顔が見たくないならば、賊退治に協力してもらえませんか？
事が済めば私はさっさと帰ります。その方がうだうだ言っている
よりも余程お互いにとって良いでしょう」

「だが、あなたのことは信用できない。いくら董君雅様の下から来
たとはいえ……それに、もしかしたらあなたは賊と通じているのか
もしれない」

村長の言葉にそれもそうだなあ、と高順は自分のことながら頷い
てしまう。

どれだけ異民族が嫌われているかはもう体験済みだ。

村人の気持ちも考えると、勝手にやって勝手に帰るしかなさそう
だ、と彼女は考えた。

だが、それで済むのは彼女だけであって、お目付け役の彼女は我
慢の限界であった。

「いい加減にしろっ！」

思いつきり賣？が机を叩いた。

その顔は怒りにより真っ赤に染まっており、息は荒い。

村長以下の村人達は少女とは思えぬ気迫に気圧されている。

「いくら何でも疑い過ぎよ！ あんた達、董君雅様に陳情して、それでいざやってきた討伐軍の大将がたかが異民族だから、協力もできないなんてバカじゃないの！？ 董君雅様が異民族とそれなりに親しくしているのは周知の筈よ！」

「だが、異民族に苦しめられた者も多い。それに彼女がこちらに刃向けてくることも……」

「あのねえ……異民族は高順だけで兵士は違うわ。もしそんなことになったら兵士がさっさと取り押さえるでしょう！」

ふーふー、と先ほどよりはやや落ち着いたものの、それでも息荒い賣？。

そんな彼女に村人の1人が問いかけた。

「お役人様、なぜそこまで彼女を信じるのですか？ 異民族を信じるなんぞ到底できないと思いますか？」

「いや、逆に何でそこまで疑うことができるのか聞きたいわ……」

賣？はすぐさまそう切り返し、うまくはぐらかす。

実際のところ、彼女にも信じる明確な証拠は無かったりする。

高順が間諜なのか、それとも別の目的があつて董君雅の下にいるのか。

さすがに一緒にいた時間が短すぎるが故に情報が少なく判断できない。

賣？は高順を悪い輩ではない、と判断してはいるが、いい人であ

るという演技をする輩も多い。

「まあ、わかりました。そちらは何もやらなくて結構。こっちで勝手にやって勝手に帰ります」

高順はそう言い、賈？の手を握る。

いきなりすることに彼女は驚くが、高順はさっさと部屋から出て行ってしまった。

「……いいの？」

村長宅から出、しばらく歩いたときに賈？は問いかけた。
その手は高順の手を握り返している。

「いいわ。あと賈？、あなたに兵士達、預けるから」
「……え？」

まさかの発言に彼女は目が点になる。

そして高順は賈？が何か言う前にかっと笑って告げる。

「どうせ彼らは私の言うことなんぞ聞いちゃくれないでしょう。董君雅様の下では彼らは猫をかぶっていたけど、目が届かないところじゃ彼らも住民達と同じような風にやってもおかしくはない」

賈？は立ち止まり、その手を離し、高順の両肩を掴む。

「相手は100人を下らない数なのよ？ たった1人で何て無茶よ！？」

「有能な敵より無能な味方の方が厄介よ。敵は倒せばいいけど、味方を倒すのは簡単にはできないから」

「だけど……」

なおも食い下がろうとする賈？に高順は告げる。

「今ここで私にとって本当の味方はあなただけ。だから、彼らが私に襲いかかってこないように頼めるかしら？」

賈？はじーっと高順を見つめていたが、やがて溜息を吐いた。

「あなたと付き合った時間は短いけど、とりあえず無茶をする人だっというのはよくわかった」

そう言い、再び溜息。

「わかったわ。そっちは私が何とかする。で、100人以上の賊相手にどうやるの？」

問う彼女に高順は不敵な笑みを浮かべ、告げる。

「戦において真正面から戦うのは愚の骨頂。というわけで根拠地を焼き払う、もしくは毒でもって攻めるのがいい」

「いや、それは理になっっているけど……敵の根拠地がどこにあるか分かるの？」

「この近くに山が幾つかあったから、大方その山中にある洞穴か、

ちつばけな砦でも築いているんでしょう」

ふむ、と賈？は顎に手を当てる。

彼女には高順が異民族である、ということに偏見はない。少なくとも、そこらの腐敗官吏よりはよっぽどマトモだ。

また、助けてもらったときのやり口から、そこらの役人よりも頭が回る。

そして今の発言。

賊の根拠地は確かにその2通りしかない

口ぶりからして、そこに単身乗り込むらしい彼女。

並の度胸では到底できまい。

「それじゃ、そういうわけで行ってくるから」

手をひらひらさせて高順はその場を後にしたのだった。

その彼女を見送り、賈？はぽつりと呟いた。

「……とんでもないヤツみたいね……って、武器を持ってないじゃない！？」

賈？は高順の武器が取り上げられていたことにようやく気がついた。

しかし、高順にとっては武器は必要なく、背中にある背囊だけで十分であった。

賈？の前で自信満々に言ったのはいいものの、高順は大事なことを忘れていた。

それは彼女がまだ人を殺したことがないということだ。

とはいえ、高順本人としては誰かを殺すということに別段何も思えない。

彼女は人間が人を殺すことを禁忌としていないことを知っている。人類の歴史は戦争の歴史。

ならばこそ、その一員である自分が人を殺せないわけがない。

トラウマにはなるかもしれないが、そこは後で考えればいい。

何かに後悔するのは死ぬ時で十分。

生きているうちは好きなようにやれば良い。

「さて……始めるとしましょうか」

そう呟き、高順は適当に視線を巡らせ、山々を一つずつ見ていく。見るとはいっても、大雑把に全体を見る程度だ。

そして、空を見上げれば太陽は高い位置にある。

そろそろ昼時。

ならばこそ、と彼女は炊煙を見つけるべく、再び山々に視線を向け、目を凝らす。

するとどうだろう。

高順の位置から最も近い山から微かに白い煙が立ち上っている。

「あつちね」

まだこの時代にはない、第九を口ずさみながら彼女は歩き始めた。

歩いて1刻程で高順は山中へと入った。

木々が邪魔するものの、その都度、木の上に登り方角を確認。

また途中でお昼休憩も取りつつ、日が傾き始めたときには賊の根拠地を視認。

根拠地は砦ではなく洞穴であった。

洞穴前には柵などはなく、見張りが2人。

高順は火攻めで窒息死させようと思い至り、深夜まで待つこととした。

2人の見張りを倒せないわけではないが、それでもこんなところで危機に陥るのも馬鹿らしい。

万全を期す為にも寝静まり、見張りの集中力も乱れる時間帯を狙うべきであった。

その為の高順は少し離れたところで仮眠をとることとした。

数刻後、すっかり夜の帳が降り、満天の星空の下、高順は活動を開始した。

彼女はまず背囊を置き、胸元をはだけさせる。

そして、深呼吸を数度して息を整えるとゆっくりと洞穴前へと歩み出る。

すかさず賊2人が彼女に気づくが、女と気づくや否や、武器を放り出して近づいてきた。

「こんなところでどうしたんだ？」

「そんな格好で……誘ってんのか？」

相手が異民族と見分けがつかないのか、それとも気づいているが、女だから問題ない、と思っているのか。

不用意にも近づいてきた2人に高順はにっこりと笑った。

そして、素早く2人の股間を蹴り、性器を粉碎。

彼らは白目を剥き、口からは泡を吹いて声を発することなくゆっくりと後ろへ倒れた。

まだ彼らは死んではない。

だが、死んだ方がいい痛みを味わったことだろう。

敵の無力化に成功した高順は素早く背囊を取りに戻り、それを背負って再び洞穴前へとやってくる。

彼女は背囊を下ろし、そこから松明をつける為に持ってきていた

油の入った手のひらサイズの壺を取り出した。

それを横に置き、近くにある枯れ木や草などを洞穴の少し中へと入ったところに積み上げていく。

それなりの量が積み上がったところで、そこに油を撒き、火打石で火をつけた。

たちまちのうちに勢い良く燃え上がるが、火は洞穴の通路を塞ぐだけだ。

だが、ここからが肝心。

少しでも煙が中へ入るよう、背囊から手ぬぐいを取り出し、それを適当に折り扇ぎ始めた。

団扇や扇子などと比べて疲れるが、そういったものを持っていないが故の代用品。

贅沢は言えない。

また彼女は復活されても面倒なので気絶させた賊2人の足の骨を折る。

嫌な音に彼女は眉を顰めるが、我慢した。

そして、彼女は適度に火に燃料を供給しつつ、また適度な休憩も取りつつ、扇ぎ続けた。

夜が明けて、高順はようやくその手を止めた。

特に時間制限があるわけもなし、燃料が無くなって火が消えるまで彼女は待ってから、見張りをしていた賊の槍をいただき、また布で鼻と口を覆い、洞穴へと入る。

洞穴は一本道であり、特に抜け道とかはないらしい。

やがて彼女は広い空間にでた。

そこに倒れ伏す無数の賊達。

誰もが皆、苦しげな顔で生き絶えているようだ。

生き残りはいない筈であるが、高順は念の為、と倒れ伏す体に槍を突き刺していく。

ぐちより、という独特の感覚に彼女は眉を顰める。

やがて全員に突き刺し終えた彼女は意気揚々とその場を後にした。

そして、村へ戻った高順はすぐさま賈？に会い、事の顛末を話す。話を聞いた彼女は呆れ顔でその場に連れて行くよう高順に言ったのであった。

覆水盆に返らず（前書き）

独自設定・解釈あり。

覆水盆に返らず

「高順、此度の討伐、ご苦労様」

董君雅の前に高順、そして賈？はいた。

臣下の礼を取る2人に顔を上げるよう董君雅は言い、ついで尋ねる。

「どうだった？」

その問いに賈？が抗議すべく口を開こうとしたが、それを高順は手で制す。

信じられないといった表情で彼女は高順を見るが、そんな賈？に悪戯を思いついた子供のような笑みを披露する。

「はい、誠に兵も住民も役人も誰もが皆、協力的で私の苦労は最小でありました」

賈？は思わず吹き出しそうになった。

事実を知る者からすればこれほどに痛烈な皮肉は堪えるのも一苦労であつた。

「……そう、それはよかったわ」

董君雅は暫しの間をおいて、そう告げた。
その表情は若干不思議そうである。

「ええ、特に襲われている村の住民達は大歓声と共に私を迎えてくれて、とても手厚くもてなしてくれました」

ちなみにだが大歓声ではなく、大罵声である。

賈？は笑いを堪えるのに苦しそうに顔を伏せている。

「董君雅様の統治の手腕が良く見れましたし、あなたは臣下の扱いがとてもお上手だと思います」

「え、ええ、それはどうもありがとうございます」

「自分としても見聞を広め、見えなかったものを見ることができましたので、此度の一件はよく勉強になりました」

そこまで言って高順は言葉を切った。

自分から言うことはもはや何もない、と。

「そ、それで……そちらの賈文和という者は……？」

何かがおかしいと感じつつも、董君雅は賈？へと話を振った。

賈？は咳払い一つして調子を整えると口を開く。

「私はお目付け役として派遣された者です。今回の件で私としても高順殿と同じく、広く世の中を知ることができました」

「そ、そう……それはよかったわ」

「はい。ですが私としてはもっと見聞を広めたい、と思った次第。故にこれを……」

賈？は懷から封筒を取り出し、それを董君雅へと手渡した。

そこに書かれていた文字に彼女は仰天した。

「じ、辞表……？」

「知識として知っていることと実際に体験してみるのでは違います。その為に私はもっと勉強したい、見聞を広めたい、とそう思う次第でございます」

「そ、そう……で、でも辞めることはないんじゃないかしら？」

慢性的な人材不足の董君雅としては地方の一官吏といえども手放したくはない。

とはいえ、賈？としても色々な意味でもうコリコリであった。

「はい、自分もそう思います……ですので、私は高順殿の配下として使って頂きたい」

その言葉に今度は高順が驚く番であった。

彼女は賈？をマジマジと見つめる。

そんな彼女に賈？は不敵に笑ってみせる。

董君雅は問いかける。

「それだと実態は変わらないんじゃないかしら？」

「いえ、全く違います。聞けば高順殿は羌族。儒教に囚われぬ発想や行動など学ぶべきところは多々あります」

理路整然とそう答える賈？にむむむ、と董君雅は言葉に詰まる。

こんな有為な人材を手放すことが彼女は惜しくなる。

実態は変わらないとはいえ、高順が出ていくときに彼女もついていくだろう。

そして、そのままおそらくは帰ってこない。

だが、董君雅は賈？を引き止める言葉を持たない。

同時に彼女はよろしくないことがあった、と確信する。

そろそろ一人で仕事をさせてみよう、と思い高順を派遣したのだ

が、そこには世間からどう思われているか、ということを知ってほしいという気持ちもまたあった。

例え不快な思いをしても、知ることは大事だ、と。

その結果が有能な人材を2人も失う結果となって返ってきた。

そう、2人だ。

賈？は勿論、高順ももはや自分を信用も信頼もしないだろう、と董君雅には感じた。

出発前に一言言っておけばまた違った結果となっただろうが、時間はない。

故に董君雅は最後のお願いをすることとした。

「月は……董卓とはこれからも仲良くして欲しい」

そう言い、頭を下げる董君雅に高順は了承したのであった。

謁見の間から出た後、高順は賈？を自室に誘った。

「色々言いたいけど……あなた、一人称を私にできるのね」

「ボクだって場を弁えてそれくらいするよ。ていうか、一番に聞くことがそれ？」

「わりと重要なことよ。で、私の配下になるって言うてたけど？」

そう問いかける高順に賈？は頷き、口を開く。

「董君雅様には初めてあつたけど、良くも悪くも平凡だと思った」

この時代で異民族と仲良くするというのは中々できないことだが、それも比べる相手が賈？となれば大抵の輩が平凡となってしまうだろう。

その点を指摘すべく、高順は告げる。

「あなたがもし私の夢の通りになるなら、大抵の人物は平凡な輩となってしまうのだけど？」

「そう？ でも、ボクなら領民や配下の者にも異民族についてもっと理解を深めるようにする。宴会を開いて大騒ぎすれば仲良くなれると思う。そして、徐々に異民族を街に溶けこませる」

高順は身を乗り出す。

ただ理解を深めさせるだけなら宴会や話し合いで事足りる。

だが、それからがあつた。

「溶けこませ、より日常生活に密着させて異民族がいても違和感がないようにする。勿論、年単位で時間が掛かるし、法律の整備とか調整とかも色々しなきゃいけないから大変だけど、やってできないことはないと思う」

「異民族の略奪については？ 金策にちょうどいいのだけど」

「それなら兵士となってもらえばいい。それが嫌なら傭兵として働

いてもらえばいい」

傭兵や兵士が略奪を行う、というのはこの時代において当たり前のこと。

なるほど、これなら漢民族でもやっていることであり違和感が全くない。

高順は感激の余りに身を震わせる。

紛れもなく目の前にいるのは稀代の軍師である、と。

そして、そんな人物が自分の配下となってくれる。

これほどまでに嬉しいことはあるだろうか、いや、ない。

高順は賈？の手を自分の両手で握る。

突然のことに彼女は目を白黒させるが、そんなことはお構いなしに高順は告げる。

「ありがとう。これからよろしく」

そう言い、高順は深々と頭を下げる。

その本心からの態度を見、賈？は思う。

ああ、彼女こそが自分の仕えるべき主だ、と。
故に賈？は告げる。

「詠って呼んで。ボクの真名」

ハッとして高順は顔を上げる。

彼女の視界に入ってきた賈？の顔は羞恥の為か赤い。

「私は彩。詠、よろしくね」

「……うん、よろしく」

こうして高順は賈？を得た……のだが、まだ終わりではなかった。そう、肝心のあの人が高順の帰還を聞いて黙っている筈がない。

叩かれる扉。

高順が許可を出せば入ってきた少女。

「彩ちゃん！」

その少女は高順に飛びついた。
賈？は巻き添えを食らわぬよう素早く高順から離れていた。難を逃れる。

おっとと、とよめくものの少女を受け止めた高順。

「月、久しぶりね」

「うん、久しぶり！ お帰り彩ちゃん！」

ぐりぐりと高順の胸に顔を埋める董卓。

そんな董卓を見て、賈？が最初に思ったことは唯一つ。

広いオデコだなあ……であつた。

中々に失礼であるが、そこらは賈？だから仕方がない。

彼女の度胸も半端ではないのだ。

ともあれ、董卓は賈？に気づき、自分のやったことに恥ずかしそうに顔を赤くし、高順から離れた。

「えっと、私は姓は董、名は卓、字は仲穎です」

「ボクは姓は賈、名は？、字は文和。彩、この子、董君雅殿の娘さん？」

もはや様付けではなく殿と呼ぶ賈？。

彼女は切り替えも速いらしい。

「そうよ。月、こっちの子は今日から私の部下となった子なの。よろしくね」

「あ、えつと、よろしくお願いします！ 真名は月です！」

賈？は目が点になった。

高順は予想できていたのか、またか、とそういう顔であった。そして董卓は反応がない賈？の様子を恐る恐る窺う。

「……ねえ、彩。こう言つては失礼なんだけど……」

そう前置きし、賈？はコメカミに手を当てて、尋ねる。

「この子、馬鹿なの？」

「へう……」

しょんぼりとする董卓をよしよし、と頭を撫でる高順。

「この子はちょーっと優しすぎるといつか、純粹といつか、そういうこと。大方、私の部下の人なら真名を教えてもいいって判断したんでしょう」

「ああ、何となく分かったわ……つまり、政には向いていないのね」「わ、私だって勉強頑張ってます！」

そう主張する董卓だが、賈？はバツサリと切り捨てる。

「知識と実体験は別物よ。それに、その性格だと切り捨てないと全てが台無しになる場面で決断できないでしょう？」

「へう……」

俯いてしまう董卓。

彼女としても知識としては知っているし、予想もできていた。政治とはそういう場面の連続であり、やらねばならないと思いつながらも、きっと自分は決断できないだろう、と。

「それにあなたが董君雅殿の領地を継ぐというなら、異民族との折衝とか異民族と領民の軋轢とか面倒くさいものが多大にある」
「い、異民族の人はいい人ばかりです！ 彩ちゃんだって！ それに街の人も！」

顔を上げ、そう言う董卓に賈？は容赦なく告げる。

「それはあなたが知っている範囲だけでしょう？ 世界の全部を知れとは言わないけど、余りにもそれは狭すぎるわ」

董卓は再び顔を俯かせてしまう。

賈？の言っていることはこれ以上ない程に正論であった。
反論する術を彼女は持たない。

「……凄い今更なんだけども、何でこんな話になってるの？ 普通に自己紹介して仲良くしましょうねでいいじゃないの……」

溜息を吐きたい高順であった。

彼女としても賈？が遠回しに董卓の成長を促すというか、彼女の為を思つての助言であることは理解できる。

だが、いきなりこれはさすがにないだろう、と。

「それもそうね。ごめんなさい、言い過ぎたわ」

賈？は素直に頭を下げる。

対する董卓は何事か考えているのか、俯いたままだ。

何か、高順は嫌な予感がした。

そして、そういう予感は必ず当たると相場が決まっていることも彼女は実体験として知っていた。

董卓が顔を上げた。

彼女は情けない顔などではなく、毅然とした表情だ。

「いえ、賈文和さんの仰ることも最もです。そこで彩ちゃん」

「あ、凄く嫌な予感。凄く聞きたくない」

そう言う高順だったが、董卓はにっこりと笑う。

「私を外に連れて行つて。もっと外を知りたい」

「……それは命令？」

最後の抵抗に、と高順は尋ねる。

だが、董卓は首を横に振り、胸元でぎゅっと両手を握る。

そして彼女は上目遣いで高順を見つめつつ、告げる。

「お願い……」

高順は董卓の大攻勢に賈？に助言を求める。

しかし、賈？は首を左右に振り、そして降参とばかりに両手を上

げる。

名軍師をも匙を投げるとは……董卓、恐ろしや。

そんなことを思いつつも高順は盛大に溜息を吐く。

「わかったわよ……ただし、どんな嫌なことがあっても知らないからね」

「覚悟はできてます」

そう言う董卓であったが、彼女が現実に耐え切れるかどうか、高順は不安であった。

危機一髪（前書き）

独自設定・解釈あり。

危機一髪

「どうしてこういうことをするんですか！」

董卓は珍しく怒っていた。

今、彼女は高順、賈？をお共に董君雅の膝元から離れた街にやってきていた。

その街に入ろうとするや否や、高順が門番に取り囲まれ、連行されてしまったのだ。

抵抗して面倒事になるのを嫌った高順は当然抵抗なんぞしていない。

そもそも董君雅の兵士を引き連れているときはそれなりの地位にある、と見られるが、そうでないときはお膝元の街でない限り、こういう扱いであるのは至極当然。

「だが、アレは異民族の者だろう？」

食って掛かる董卓に困惑する門番。

彼からすればそれは当然の認識であった。

「何もやってないのに……相手のことを知りもせず！」

「知りもせずにつて……異民族の略奪に遭って逃げてきた者も多いんだが……」

「でも！」

なおも食い下がる董卓に賈？は彼女の肩に手を置く。

「董仲穎、これが現実だよ。ともかく、行こう。ここでもうしても意味が無い」

董卓は悔しげに顔を俯かせる。

そんな彼女の手を引いて、賈？は街へと入っていった。

賈？はとりあえず董卓を落ち着かせるべく、酒家に入った。

そこでお団子とお茶を食し、一息つく。

危機に陥ったときこそ冷静さを保つ為にこういうのは必要であると彼女は知っていた。

ともあれ、彼女にとっての課題は目の前で思いつきり落ち込んでいる董卓をどうにかすることであった。

「私のせいで……私が外に行きたいなんて言っただから……」

どんよりとした空気を纏う董卓に賈？は溜息一つ。

「落ち込むよりも彩を助けたすことを考えないと」

「それなら、私が董仲穎だと明かせば……」

「証明できるもの、あるの？」

賈？の言葉に董卓はハツとし、力なく首を左右に振る。

「うーん……」

賈？は腕を組み、虚空を睨みつつ思考を巡らせる。

力づくでやる、というのは論外。

何とかして穏便に、役人も民衆も納得できる形で事を収めねばならない。

また、おちおちしていると今日中に斬首とか縛り首という可能性が高い。

そうなってしまうてはせっかく見つけた主をすぐに失うという阿呆らしい事態になる。

そもそも、高順が何もしなかったのは自分が何とかしてくれる、と確信していたからだろう。

その期待に応えねばなるまい。

「……仲穎、君、泣くのは得意？」

賈？はそう董卓に問いかけた。

彼女は不思議な顔をしつつも頷く。

「で、でも泣いても状況は変わらないよ？　泣いて変わるなら幾らでも泣くけど……」

そう言う董卓に賈？は不敵な笑みを浮かべる。

「埒が明かないなら思うように埒を明ければいい。押して駄目なら引いてみるんだ」

そう言い、賈？は1つの策を董卓に話したのであった。

「……意外と待遇は悪くないわね」

牢の中で高順は呟いた。

それこそ厩舎にでも縛られて転がされるのかと思いきや、一応は人間として扱ってもらえていた。

ただし、担当の役人が異民族に酷い目に遭わされたらしく、高順は全裸に剥かれ、壁に手枷足枷で磔にされてしまった。

そこで彼女の股間にある本来ならばない筈のものに仰天し、その役人はどこかへと走り去っていつてしまった。

「いい加減、風邪を引くから服を着せて欲しいものだけど……」

そんな彼女の呟きに答える者がいた。

「中々肝が座つとるようやのう」

そんな言葉と共に現れたのは紫髪を一纏めにし、袴にサラシ姿という何とも日本風な出で立ちの少女。

歳は14、5あたりだろうか。

「悪いけど、私は何も悪いことしてないの。まだ何も」

「まだっちゅーことは将来的にはするんかいな？」

「未来は誰にも分からない。須臾の先ですらもね」

「それもそうや」

そう言いつつ、少女は牢の中へと入り、高順の股間をマジマジと見つめる。

「両性具有っちゅーやつか。お伽話やと思うとっただが……」

「というか、あなた誰よ」

その言葉に少女は視線を高順の顔へと向ける。

「ウチは姓は張、名は遼、字は文遠や」

「私は姓は高、名は順よ。字はないから高順と呼んで頂戴」

高順はあの張遼とこんな形で会うことに運命を感じずにはいられない。
「ない。」

とはいえ、手足を封じられてはどうにもできない。

「そかそか……で、高順。悪いけどあんさんの処刑、決まったわ」

「……何もなしに捕らえていきなりそれはさすがに引くわ……」

「いや、担当しとった役人が両性具有のこと知らんみたいでな。あれは妖魔の類に違いないとか何とかっちゅーて、強引に押し切ったんや」

「あなたが反対すればいいじゃない」

「いやー、ウチは入ったばかりの下っ端やからな。異民族に襲撃を受けたことがないっちゅーことで、最近こっちに來たばかりで……どんな統治しとるか氣になったんや」

やけども、と張遼は続ける。

「来てみれば何や、普通やな。民草の間には異民族への怨嗟の声しかあらへん。これじゃ、上が仲良うしとっても意味あらへん」

うんうんと頷く張遼。

「あなたは私が異民族っていうことに何か思うところはないの？」
「いや、別に思わへんよ。異民族は確かに色々やっとなるけどな、それは漢人も同じやろ。ウチはここに来るまでそれなりに旅をしとったけど、酷いもんやで？ 賊が蔓延っても官軍は何もできへん」
「じゃ、私を逃してくれないかしら？」
「悪いけど、それはできへん。ウチが首斬られてまうし、それにまだ給料もらってへん」

その言葉に肩を落とす高順であつたが、張遼は一計を案じた。

「やけど、あんさん見たとこ腕がそれなりに立つようやし、妖魔の類なら人間が止められへんくても仕方がないやろ？」

そう言いにかつと笑う張遼に高順は感謝し、頭を下げる。

「ありがとう、張文遠」

「えーって。ウチも今回ののはさすがにアレやと思っし」

手をひらひら振る張遼。

彼女は高順の枷を外していく。

これで一件落着かと思いきや、慌ただしく伝令が走ってきた。見られたらマズい、と張遼は高順を牢の隅に追いやり、毛布を被せる。

そして彼女は何事も無かったかのように牢から出て応対する。

「どうしたんや？」

「住民達が高順を解放しろ、とこちらに押し寄せています。先頭に高順に助けられたという少女が……」

「はあ……？」

張遼が首を傾げるが、高順は誰だか見当がついていた。

董卓と賈？であることは間違いなかった。

時間は少々遡る。

董卓は賈？と共に酒家を出て、大通りの道端に佇んでいた。賈？が目配せすれば董卓は僅かに頷き、そして彼女は思い出す。高順が連れていかれたときの情景を。

するとみるみるうちにその目に涙が溜まっていき、やがて溢れ出

す。

大声を上げて泣き始めた董卓に何だ何だと人が集まってくる。すかさず賈？が大げさな口調で告げる。

「この子は先ほど、街の外で暴漢に襲われ、そこに颯爽と登場した高順なる者！」

その声に誘われてか、どんどん人が集まってくる。

賈？は狙い通りに言っていることに気を良くしつつ、話を続ける。

「バツタバツタと暴漢を薙ぎ倒し、街まで送ろうと言った剛の者、高順！　だが、彼女は異民族であるからという理由で門番に捕らえられ、連行されてしまった！」

集まった人々はほう、と感心したような顔や門番の行いに眉を顰める者。

中にはそのときの光景を目撃していた者もいるようで、傍にいる見物人にしたり顔で話している。

「このような行い、許して良いのか！　確かに彼女は異民族。だが、彼女が行ったことは悪であつたのか！」

口々に否定の声が上がる。

「しかし、如何に悪ではない、とわかっていたとしても、今、彼女は牢にいる！　私とこの子だけではどうにもできない！　皆さんの力をお借りしたい！」

そう言い、賈？は頭を下げた。

董卓もまた泣きながら頭を下げた。

ざわめきが民衆に広がり、やがてそれは一つの波となった。
すなわち、高順を解放せよ、と。

「皆さんで役所に押しかけましょう！　そうすればきっと道は開かれます！」

頃合いよし、とみた賈？の一言に民衆は動いた。

「……あんさん慕われとるなあ」

呆れ顔の張遼。

その横にいる高順もまた呆れていた。

とりあえず民衆を宥める為に、と高順を連れてくるよう言われた張遼は手枷だけはめ直して、高順を民衆達の前へと連れてきていた。役所は壁に囲まれており、唯一の出入口は門。

そこの外である民衆の前へ。

そこには高順と張遼しかいない。

本来なら指示を出すべき上司は張遼に一任する、と言ってきた。

張遼が斬れば民衆になぶり殺しにされる上、彼女の上司は部下の暴走で処理し、かといって解放すれば上司から文句を言われ、よろしくないことになるのは間違いない。

八方塞がりの張遼はもはや笑うしかなかった。

そしてその指示は全て本人ではなく伝令が伝えてきたものだ。伝令に怒ったところで意味はない。

そういうわけで張遼は覚悟を決め、自らの荷物を纏めて持ってきた。

当然、高順の荷物もまた彼女に返されている。

「妙なところで権力者は知恵が回るのよね」

「ほんまその通りや」

うんうんと頷く張遼。

そんな彼女には民衆から罵詈雑言が飛んできている。しかし、それらは意に介さない。

董卓と賈？は最前列で不安げな表情で高順と張遼を見ている。

「もう辞めや」

そう言い、彼女は高順の手枷を外し、そして役所の門に飾られてあった役所名が書かれた看板を己の偃月刀でもって斜めに斬った。その行動にどよめきが民衆の間に広がる。

ここだ、と見た高順は一步前に出て凜とした声で告げる。

「この張文遠は此度の一件に納得がいかず、独断で私を助けようと牢から出そうとしてくれた！ この人を傷つけてはならない！」

その言葉に張遼は高順を見つめ、目を数度瞬かせる。

「さっきのお礼よ。あなたがこんなところで民衆に殺されるのも、役人の捨て駒にされるのも、どっちもつまらないでしょ」

そう言い、笑ってみせる高順。

「中々面白いやつだな。恩に着るで。またな」

彼女は荷物を持ってそそくさと走り去っていった。
それを見、董卓が高順に駆け寄り、抱きついた。

「彩ちゃんごめんね……ごめんね……」

再び泣き始める董卓によしよし、とその頭を撫でる高順。
民衆達は喝采を叫んだ。
賈？もまた胸を撫で下ろし、安堵の息を吐いたのだった。

それから半刻後、高順、董卓、賈？の3人は酒家にいた。
入ってすぐ高順は賈？と董卓に感謝したが、董卓がまた自分のせ

いだ、と泣きそうになるのを宥めることとなる。

董卓が落ち着いた後、このあとどうしようか、という話になったそのときであった。

「お、ここにおったんか。探したで」

そう言いながら、席に座るのは張遼。

「……いや、ここで登場する？ 普通」

「いやー、ウチも路銀が無くてなあ……これも何かの縁と……」

ちらつと高順の顔を見る。

彼女は張遼の言いたいことがわかってしまったので溜息を盛大に吐く。

「雇って欲しいの？」

「話が早い。ウチはそれなりにやり手やで？」

「いや、それはそうだけど、貸し借りはもうさっきので無しよ？」

「分かってるって。衣食住保障してくればそれでええよ。給金は月に１０００でどや？」

張遼という人物の凄さを知っている高順としては破格の安さに思える。

故に彼女は即決した。

「それでいいわ。ああ、ところで私、今、董君雅様のところでお世話になっているの。ちなみにその武官兼文官で財務を主にやっているわ」

「……は？ いやいや、董君雅つちゅーたらこの辺の太守やないかい？　なんでそんなところに仕えて、それで捕まってるん！？」

張遼もまさかそんな大物だとは思いつかなかった次第。

「いや、私、異民族だから偏見も強くて……」

高順の言葉を継ぐように賈？が口を開く。

「このことを董君雅殿に伝えればあそこの役所にいる役人は全員、消えると思うけど……」

「私、絶対お母様に伝えます」

ぎゅつと握り拳を作って言う董卓に張遼はまさか、と思いつつ問いかける。

「えっと……そっちの子、もしかして……」

「あ、申し遅れました。私、姓は董、名は卓、字は仲穎と申します」
「そ、そか……ウチ、抜けて正解やったな……」

あのまま役所に留まっていたら牢にぶち込まれるのは自分だった、と寒気がしてきた張遼。

そんな彼女にクスクスと笑いつつ、高順と賈？は告げる。

「改めて名乗るけども、私は姓は高、名は順。高順と呼んで頂戴」
「ボクは姓は賈、名は？、字は文和だよ」

名乗られ、張遼もまた名乗り返す。

「ウチは姓は張、名は遼、字は文遠や。よろしゅうな」

こうして張遼が高順の配下となったのであった。

それぞれの方針（前書き）

独自設定・解釈あり。

それぞれの方針

董君雅は頭を悩ませていた。

先の高順の賊退治についていった兵士達を問い詰めてみれば埃が出るわ出るわで呆れてしまった。

そして、とどめは先日、戻ってきた董卓からの報告だ。

彼女が高順や賈？をお供に外を見に行く、と言ったときは心配ながらも許可を出したが、持ち帰ってきた報告は非常に苦いものであった。

領民に根付いた異民族への恐怖と憎悪。

それらを払拭するのは並大抵ではない、と董君雅は改めて思い知らされた。

懸念はまだある。

高順が配下をまた増やしたことだ。

それだけならば別に問題はないが、これまで散々な目に遭った彼女がこちらに反旗を翻さない保障はどこにもない。

友人の娘だから大丈夫だろう……というのはもはや何の根拠にもなりえなかった。

そして、その友人も娘にされたことを知ったなら激怒するだろう。

もつとも、当の高順は董君雅の都合など知らぬといった顔で自分の部下だから、と董君雅に賈？を手伝わせると言ってきた。

給金はいらない、と断ってきたことから経験を積ませる為だということはずぐに予想がついた。

今は僅か3人だが、この分だと董卓が高順についていくことはありえる事態。

そして、董君雅には彼女らを説得する言葉を持たない。かといって、暗殺なんぞすればそれこそ大事だ。

どんなに誤魔化そうとしても問答無用で彼女の母――晴が部族を率いて襲いかかってくることは間違いない。

否、そもそも暗殺しようにもそれが成功するかどうかも怪しいものだ。

高順はもとより、新たに彼女の配下となった張遼も若いながら相当な武を誇っており、また賈？はこちらの心情を見透かしているかのような気もする。

何よりも董卓が四六時中張り付いていることが問題だ。

そこまで考え、董君雅はゆっくりと息を吐き、手元にあつた茶を啜る。

そして一息ついたところで考えを変える。

「懐柔した方がいい、か……」

そうすれば反旗を翻されても少なくとも悪い方には……自分が殺されたりするようなことはないだろう、と彼女は思った。

だが、領民に危害が及ぶ可能性がある。

高順は聡明だ。

そのような短慮なことはしないだろうが、それでもよろしくない事態が起こる可能性は高い。

「……いえ、何も嫌われているここで興そうとは思えない。もつと南か東の、異民族など対岸の火事と思っっているようなところで勢力を興すとすれば……」

早めに太学へ追いやった方がいいか、と彼女は考える。

「とりあえず給金を増やしましょう」

台所事情は苦しいが、それでも反乱を起こされるよりは余程マシであつた。

また実際に仕事もキチンと行い、それで結果も出していることからある意味これは妥当な処置であつた。

「彩、ちよつと聞きたいんだけど」

賈？は高順と2人きりとなつた時を見計らい、声を掛けた。

これから聞くのは董卓に、あるいは董君雅に知られると拙いことだ。

高順とてそれが分かつたのか、真面目な顔となり、賈？を自室へと誘つた。

部屋に入るなり賈？は尋ねる。

「これからどうするの？ まさかずっとここにいるわけじゃないでしょ？」

「私個人としては太学に行こうと思ってる」

賈？はまさかの言葉に啞然とした。

異民族の高順が漢族のエリート養成の太学に入る……そういうことが到底できるとは思えなかった。

「だけでも」

高順は続ける。

「どうも私が想像していたよりも差別というか、恐怖というか、そういうものが酷いことが分かったわ。きっと生半可な後ろ盾じゃ、駄目でしょうね」

「あくまで太学に行くことは諦めない、と？」

賈？が鋭い視線で問い詰めた。

「そうよ。だって、異民族の癖に太学卒業したとなれば大抵の輩の度肝を抜けるでしょう？ 太学卒業してないなんて……という感じに笑うことができるし」

「いや、それはそうだけど……っていうか、ボクも太学は行ってないんだけど……」

行きたくもないし、と告げる賈？。

「ま、そこらは個人によると思う。それに学歴というものがあると色々融通が利くものよ」

「でも、どうやって？ 董君雅殿じゃ、最低限の保障にしかならないよ」

「私は自分の体を稀有な才能であると思っているの」

「体……？」

はて、と賣？は首を傾げる。

異民族生まれである、ということが稀有な才能なのだろうか、と。

そんな様子の賣？に高順はそういえば、と気がついた。

彼女には自分の特異体質のことを話していなかったということに。

「んと、詠。あなたのことを信じてこれは話す……っていうか、見せるんだけど……」

高順はそう言い、ゆっくりと自らの衣服を脱いでいく。

まさかの事態に賣？は顔を真っ赤にし、両手で覆いながらもその指の隙間からしっかりと高順の体を覗き見ている。

美しい、シミ一つない白い肌。

それなりに豊満な胸。

賣？は思わず唾を飲み込みつつ、ゆっくりと視線を下へとやり……あるモノに気がついた。

「……両性具有」

ポツリ、と賣？は呟いた。

そして、彼女はしっかりと事実を受け止めるべく自らの手を顔か

らどけた。

生まれたままの姿となっている高順を上から下までしっかりと見る。

「私は自分の体の価値について正確に理解しているつもりよ。今をときめく大將軍何進に自分を売り込めば膨大な金と共に太学でも誰も文句は言えない強力な後ろ盾となる」

「確かにそうだね。それにうまいことして、太学卒業後は太守は無理でも県令にしてもらえれば……」

賈？の言葉に高順は頷く。

「でも心配事もあるわ」

「心配事？」

「うん。仲穎の件」

「このままだとしてくるよねえ……」

賈？は溜息一つ。

彼女は……というよりか、城にいる全ての者が董卓が高順に依存ともいえる程に懐いていることを知っている。

張遼は城に来てからの董卓の振る舞いに高順に恋人かどうか聞いてきた程だ。

「董君雅様がどうするか否か……そこにかかってくる」

「ここを離れるときはどうするの？ 置いていくの？」

高順の策通りに何進の後ろ盾で太学に行ったら、そのままこちらにはもう戻ってこないだろう。

そのとき董卓がついてくることは容易に予想がつく。

「私個人としては連れていきたいと思う。精神的な癒しを得ることができるし」

「それは分かるけど……董君雅殿はどうやって説得するの？ 跡継ぎがどこかへ行くとなれば猛反対すると思うんだけど」

「そこが問題なのよね……」

うーんと悩む高順であつたが、彼女は閃いた。

「それなら彼女も太学に行かせればいいんじゃない？」

「……その発想はなかった。確かに彩が誘えば彼女は頑張ると思うし、そのままお願いすれば政……は無理だとしても、それでも任せられる部分は任せることができる」

妙案だ、とうんうんと頷く賈？。

そして、彼女は何進に取り入ったときになるだろう事態について、
敢えて問うことにした。

「でも、何進に抱かれるんでしょう？ いいの？」

「いいわ。気持ちいいことは嫌いじゃないもの」

何進の肖像画というのを高順は見かけたことがある。

中々に美人であつた。

そんな美人に初めてを奪ってもらえるなら悪くはない……どこるかむしろ良い。

高順は肉体関係において愛など無くても気持ち良ければそれでいい、とする人物であつた。

高順の答えに賈？は胸の奥に針が刺さったかのような、微かな痛みを覚えた。

その痛みに不思議に思いながらも、彼女は告げる。

「それならいいわ。でも、あんまり深入りして情が移ったりしないようにして。最近だと宦官との仲が悪いって噂を聞くし、面倒な政争に巻き込まれるのは御免よ」

「でも、何進は使えると思う。政争に敗れた後の何進を保護し、再び朝廷で力をつけさせるのはどうかしら？」

「言うは易し、行うは難しの典型ね。宦官だって馬鹿じゃないよ。そうなる前にこっちを逆賊として討つよう諸侯に命じる筈」

「ならば宦官を排除してしまえば？」

「それができるならきつと何進から褒賞を貰えるわね」

「策はあるけど、兵力が足りないわ。しばらくは力を蓄える……臥薪嘗胆ね」

「そういうこと。で、ボクは2人が太学に行くことになったら、文遠と一緒に情報収集や人材登用の為にあちこち回ってみる。勿論、高順が異民族についていうことを明かした上でやるよ」

その言葉に頷きつつ、高順は口を開く。

「あと、要注意人物がいるわ。曹孟徳、孫文台、袁本初、彼女らには気をつけるべき」

「後者2人はともかくとして、曹孟徳？」

はてな、と首を傾げる賈？。

そんな彼女に重々しく頷き、高順は告げる。

「彼女は私よりも君主として一回りも二回りも優れている。何より彼女の下には有為な人材が集まりやすい」

「……もしかして彩、曹孟徳に仕えたいとかそんなこと思ってる？」

ジト目で見つめる賈？に高順は肩を竦めてみせる。

「私は武官が政治に手を出すべきではないと思う。あくまで戦は政治の延長線上にあり、手段であるべき。それ自体が目的となつてはならない」

賈？は思わず感嘆する。

それを分かつていないが為に数多の国が滅んだことを彼女は書物で知っていた。

「私は政の真似事はできるだろうけど、あくまで真似事に過ぎない。あなたとて万能ではない。最終的にどこかの勢力に呑み込まれてしまう可能性がある」

高順は自らの限界を素直に賈？に吐露した。

未来の知識とて万能ではない。

確かにこの時代から見れば優れているものは多いが、こと、政治に限っては余り進歩していないのが現実だ。

民主主義などは古代ローマ、ギリシア、インド時代に成立したものである。

現代において多少の形は変わっているとはいえ、その本質は変わらない。

あくまで行政というシステムが洗練化されているのであり、結局のところどうするかを決めるのは人間だ。

その意思決定システムは独裁か、それとも少数の者が決定するか、結局のところそこに尽きる。

民主主義として実際に政策を決定するのは民衆に選ばれた少数の間なのである。

本来、上司は部下に弱いところを見せてはならない。
見せてしまえば部下にまでその不安は伝達されてしまう。
だが、高順は賈？を信用し、信賴するが故に敢えて吐露した。

賈？はやや顔を俯かせ何も言わない。

高順はこれは拙いか、と思いつつ、彼女の言葉を待つ。

やがて彼女は顔を上げ、まっすぐに高順を見つめた。

「あなたは聡明な人だ。ボクはそこまで多くの人を見てきたわけじゃない。だけど、あなたはきつとそうだと思う」

そう言い、彼女は片膝をつき、臣下の礼をとった。
弱みを承知した上でなお、賈？は従うことを選んだ。

「……ありがとう、詠」

その言葉に詠は恥ずかしいのか、顔を赤らめつつも告げる。

「言っておくけど、最終的にそうなるのは容認できるわ。でも、初めから負け犬根性で行くのは許さないから」

そう言う彼女に高順は不敵に笑う。

「こちらから低姿勢となるのは面白くない。曹孟徳の軍勢を幾度も打ち破ってもうやめてくれと泣きついたときに軍門に降ってやろう。私とあなた、そして張文遠がいれば間違いなくそれができる」

詠はその言葉につられて笑ってしまふのであった。
そんな彼女を見つつ、高順はいそいそと服を着る。

「ともあれ、文遠の説得もしないかね。まあ、彼女は何とかなるで
しょう」

高順の言葉に頷く詠。

その顔はまだ赤い。

ともあれ、こうして大雑把な方針が決まったのであった。

彼女達の気持ち（前書き）

独自設定・解釈あり。

彼女達の気持ち

張遼と高順はお互いに盤面を見つめていた。

そこにあるのは囲碁ではなく、高順が作成した盤面上での戦争ゲーム。

いわゆる兵棋演習といわれるものだ。

諸々の判定に複数のサイコロを使い、戦場の状況、互いの兵力・兵種、兵糧量、勝利条件及び敗北条件を明記し、大きな方眼上の地図の上でお互いに駒を動かすという最低限のものであった。

この時代で本格的に再現できるわけもないが故に致し方ない。

なお、審判役は賈？であるが、彼女もまた興味深げに地図の上を行き来する駒を眺めている。

今回の戦は互いに1000の騎兵を用いてお互いの総大将がいる本陣を如何にして叩くか、とそういう演習であった。

「かあ負けた！」

そう言い天を仰ぐ張遼。

高順はホッと一息。

お互いに緩急をつけた波状攻撃や後方・側面からの少数による急襲を加え、かろうじて敵陣を突破した高順の騎兵が張遼の本陣を潰した。

「しかし、こんなもんよう思いついたなあ……やって楽しいわ」
感心するように張遼に高順が告げる。

「発想の転換よ。これならどんな状況にも対応できるし、暇潰しにもなる。まあ、戦術的なものだけど、ないよりは余程マシ」
「確かにいいけど、実際は想定外のこともしこりうるから、あくまで参考程度に留めておいたほうがいいね。あと、やるときの規則ももっと細分化しないと……」

賈？の言に高順も張遼も同意と頷く。
兵棋演習ばかりやって実戦で負けました、では喜劇にしかない。

「で、や。ウチはまあ、高順を主と定めておるんやけど……方針については異論あらへん。戦えればそれで満足やし、給金いいし……」
「何か不満があるっていうの？」

ジト目で賈？が問いかける。
その様子に張遼はそっぽを向き、わざとらしく言う。

「ウチばかり仲間外れやんかー、真名で呼び合ってー」

賈？と高順はお互いに顔を見合わせる。

「いや……言つとくけど、いいの？　それで」
「ええやんかー、寂しいやんかー」

頬を膨らませる張遼。
どうやら疎外感みたいなものを感じていたらしい。

「どうする？」

賈？が高順に問いかける。

問いかけられた方はうーん、と難しそうな表情だ。

「文遠は戦えて、給金が良ければそれでいいのよね？ 内応する可能性が高いじゃないの」

張遼は高順に言われて初めて気がついた。

高順のところよりももっと金持ちでもっと戦をやらかすところから言われればホイホイついていく可能性はある。

とはいえ、そういう引き抜きを張遼は好かない。

戦場で捕らえられて……というならまだ諦めもつくが、戦わずして敵と通じるなど言語道断。

しかし、と張遼は考える。

高順の言うことももっともである、と。

何より自分自身でそういう風に言ってしまったている。

そんなことをしない、と証明するには相応の働きが必要である……

…そう彼女は結論づけた。

「もっともや……んで、そうやないちゅうことを証明する為には言葉よりも行動……せやな？」

張遼の言葉に2人は頷く。

「何が欲しい？ 言うてみ。この張文遠、忠誠の証としてどんなこともするで？」

賈？は何も言わず、高順をちらりと見る。
その視線を受けつつ、彼女は口を開いた。

「今はまだ時期ではない。けども、私が何進の後ろ盾を得た後に異民族である私に従う兵隊が欲しい」

「……自分で言うというて何やけど、難しい注文やな。匈奴、鮮卑、烏丸、氏……そして羌。ここら程ではないけども、南の方でもあんまりええ感情はあらへん。募兵したところで集まってくるのは余程の馬鹿か食い詰め者くらいやろ」
「理想でも掲げてみる？」

高順が冗談めかして問う。
すると張遼はそれを鼻で笑う。

「まずは行動やろ。行動の結果、そうするなら人はついてくる。綺麗な言葉を並べるだけじゃ、誰でもできる」

「そうよね……太守は無理でも、県令くらいにはならないと……その為は何進に取り入る必要がある。で、その何進は宦官をよろしく思っていない」

賈？がそう言い張遼は呆れた顔となった。

「宦官とやりあうんかいな……そりゃ剛氣やな」

そんな彼女に高順は挑発するかのように問う。

「臆したの？」

「まさか。面白いやないか。それくらい波乱万丈な方がちょうどええ」

不適な笑みを浮かべ、そう言う張遼に高順は満足そうに頷く。

「彩、前に策はあるって言ってたけど、どんな策なの？ マトモな方法じゃ、宦官は排除できないよ」

「まず用意するものは剣術に秀でた兵を2000名。それらを少数の班に分け、日をずらして洛陽に送り込む。夜更け、合図と共に一斉に主要な場所を襲撃。これで終わる」

「……そんなに簡単にいくの？」

ジト目で見つめる賈？に高順は自信満々に頷く。

「連中は外にばかり気を取られて、足元が見えていない。連中が持っているのは所詮、形なき力。本来なら駄目なだけで、病巣を取る為の荒療治も必要……そうするには司隸校尉になることだけ……さすがにそれは無理ね」

「何進がどれだけ彩を高く買うかによると思う。売官がまかり通っていると聞くし……うまく何進を焚きつけて金を出させるか、靈帝に取り次いでもらい、官職を得るか……」

賈？の言葉にともあれ、と高順は言葉を紡ぐ。

「もはや漢は虫の息。ならばこそ、緩慢な、真綿で首を締められるような死よりも素早く泰山府君の下へ送り届けてやるのが人情」

「帝もついでにやるんか？」

張遼の問いにハツとした表情となる高順。

彼女は首を左右に振り、咳払い一つ。

「帝の周囲に蔓延る奸賊討つべし」

彼女はそう言い、おもむろに一筆したためた。
書いた言葉はとても単純。

だが、これ以上ない程にぴったりのものであった。
それは「尊皇討奸」という四文字。

帝の為にその周囲にいる私利私欲を行う者を討つ、という意味だが、その帝……霊帝もお世辞にも名君とは言い難い。
というより、誰が見ても暗君であろう。

「とりあえず大義名分はそれでいいわ。それなら民衆もついてくるでしょうし、宦官を嫌っている袁家にも受けがいいし……あとは実行の為に……」

賈？は言葉を切り、視線を高順へと向ける。

その視線を受け、彼女は僅かに頷く。

「何進にはどうやって？」

「董君雅様に私が書く文を届けてもらう。辺境の太守とはいえ、異民族とそれなりにうまくやっているのだから、無視はできない筈」
「それがいいね」

話し合う2人に張遼は告げる。

「そっこののはそっちがやってくれな。ウチは戦場で戦うの専門や。やけど、きっちり勝利を献上するから心配せんぞな」

「……自信満々みたいだけど、やったことあるの？」

再びジト目で問いかける賈？に張遼は自信あり気な顔。

「ウチな、ここらに流れてくるまで、賊退治の為に農民率いたりと

か色々やつてるんや」

「……それなりに使えそうね。穀潰しかと思つてたけど」

「そりゃ酷いなあ……ま、仮初だとしても平和なんはいいことや」

そう言い、張遼は椅子から立ち上がった。

賈？が問うよりも早く、遊んでくる、と言つて彼女は部屋から出ていった。

「随分と自由人ね」

「あれくらい奔放なら返つて裏切らない……と思つ」

賈？の言葉にそう言つ高順であつた。

董卓は机に向かつて勉学に励んでいた。

彼女の生活は最近になつて一変している。

それは全て高順によるものだ。

彼女から一緒に太学に行かないか、と誘われた董卓は一も二もな

く賛成し、母親にそう伝えるところでこれまで以上に勉強し始めた。

「彩ちゃんの為に頑張らないと……」

そんな言葉が彼女の口からこぼれ出る。

そして、彼女は自らの頭に掛けてある紅玉に手を触れる。

「えへへ……」

あのことのことは今でも鮮明に覚えており、思わず笑みが浮かんでくる。

ついで、色んな場面が彼女の脳裏を過ぎる。

彩と一緒にお茶を飲んだり、たわいもないことを話したり……

やがて、その思いが口からこぼれ出る。

「……大好きだよ」

小さく、呟いた。

董卓はきやー、と声を上げて両手で顔を覆い、机に突っ伏す。彼女の初めての友達はいつの間にか初恋の人に変わっていた。

女同士であるということを彼女は気にしない。

女同士で、というのはこの世界ではおかしいことではない。

微笑ましいものであるが、彼女の処遇について母親や高順が頭を

悩ませたことを彼女本人は知らない。
彼女は純粹であつた。

その頃、高順は賈？に幾つかの本を貸し出していた。

それらは全て高順がこちらにきてから書き、纏めたもの。
頭にある未来知識をわかりやすく纏めたり、またこの時代と未来
を比較して気づいた点などを纏めてある。

彼女は貂蟬による転生となつたとき、一回覚えたものは忘れない、
という特典をつけてもらった。

そして、それが適用されるのはこちらに転生してからだと彼女は
思っていた。

しかし、実際には前世で覚えたことも忘れていない。

貂蟬が何かしてくれただろうことは容易に予想がついたが、そこ
は素直に高順は感謝していた。

「……あんだ、本当に何者？」

賈？は調練手引書を5分の1程を流し読みし、探るような視線を高順に向けつつ問いかけた。

彼女が読んだものは発想の転換でどうこうなる範囲を逸している。膨大な戦訓と経験により裏打ちされた体系的かつ効率的なやり方はとてもではないが、1人でどうこうできるものではない。

「夢で見た。夢で私はここより1000年以上先の住民だった」

「また夢か……俄に信じがたいけど、信じざるを得ないわ。この調練手引書なんて、どの諸侯も喉から手が出る程に欲しがらるわ」

賈？はそう言い、ガシツと高順の肩を掴む。

「これならいける。あんた、天下とりなさい」

「優秀な将と忠誠を誓う兵、そして異民族である私を偏見の目で見ない民。それらが必要ね」

遠回しにそれらを用意できるか、と高順は賈？に告げた。

「この分だとボクはあんたの言う通りになるらしい。でも、ボクは慢心せずにやってみせる」

胸を叩き、力強く頷いてみせる賈？。

「私は私的な場では月が、それ以外の場ではあなたがいないと駄目みたいね」

「あんたはボクがいないと駄目なのよ……だから、ずっと一緒にいてあげる」

賈？の言葉に高順は目を見開いた。

そんな彼女に賈？は当然、と言いたげな表情だ。

「悲劇に遭っているのはあんただけじゃないけど、これまで色々見てきたわ。で、そんなあんたは例え夢の中の未来で知っていたとはいえ、ボクを認め、必要とし、全てをさらけ出してくれた。ボクは個人としても、軍師としてもあんたの期待に応えたい」

高順はその言葉を理解するのに数秒の時間を要した。
そして、彼女は結論を出す。

「つまり……愛の告白？」

「……あんたには仲頼がいるでしょ」

暫しの間をおき、賈？はそう返す。

胸の奥に僅かな痛みを感じるが、それを無視して。

「そりやそうよね。詠と逢引したりしたわけでもないし……」

「……そうね。でも、あんた、上司なんだから部下に食事を奢るくらいはしてもいいんじゃないの？　っていうか、あんたから給金もらってないんだけど？」

衣食住は董君雅持ちであるが、給金は高順持ちである。

高順は冷や汗が出てくるのを感じた。

給金未払いで軍師が出ていった、なんてことになったら笑えない。
そんな彼女にすかさず妥協案を賈？は出す。

「これから毎日、昼か夜、ボクにご飯を奢って。で、そのときは街の視察もしたいから、外で食べたい。それでいい」
「わかったわ。そうする」

高順は即答だった。

全面的に彼女が悪いので彼女の選択肢は従う以外にありえない。

「さて、ボクはこの反則の産物を全部読み込んでくるから」

賈？は書物を手に、気持ち嬉しそうに手をひらひらと振り、部屋から出ていった。

残された高順はいつもとは若干様子が違うように見える賈？に首を傾げるばかりであった。

急変する事態（前書き）

独自設定・解釈あり。

急変する事態

季節は巡り、高順が尊皇討奸の目標を掲げて早3ヶ月が経過した。彼女はこの間、ただひたすらに仕事を真面目にこなしつつ、賈?と策を練り、張遼と武を競いあつた。

また何進への文は太学へ行くときに出せばちょうどいい、と高順は判断し、まだ書いていなかった。

そして、董卓とも喧嘩をすることなく良好な関係を維持していた。無論、告白とかそういう事態にはなっていないが、彼女の高順への態度などを見れば誰でも分かるような具合であつた。

高順としても好かれて悪い気はしないが、董君雅としては気が気ではない。

こうなつたのは偏に董君雅の教育方針にある。

董卓にとって高順は初めての友達であり、その友情が高順に色々されているうちに愛情へと転じるのはある意味当然だ。

董卓にとって高順はつまるところ初めての対等な存在であつた。

もし董君雅がもっと董卓を外に出し、友達を作らせていたならば、彼女は友情を友情として捉え、それが愛情へ転化するなどということとはなかっただろう。

早い話が免疫がないところに一気に突っ込んだ為に過剰反応を起こしたのだ。

ともあれ、そうなつてしまつては致し方なく、董君雅としても下手に娘に嫌われるよりは、と黙認せざるを得なかつた。

しかし、事態は急変することとなる。

「……拙いわ」

董君雅は1人、呟いた。

つい先日、そしてつい先程、相次いでやってきた使者が彼女を悩ませる原因だ。

それらは朝廷からの使者と懇意にしている羌族からの使者だ。

前者は簡単で今回、反乱を起こしている羌族を鎮圧すべく、馬騰を中心とした討伐軍を結成するが故に参加せよ、とそういうもの。対する後者は羌族の為に戦うもしくは中立を維持して欲しい、というもの。

相反する命令と要請に董君雅はほとんど困り果てていた。

残念ながら彼女には軍師というべきものはおらず、ほとんど1人で決めてきた。

これまでも、そしておそらくはこれからも。

「何よりも……」

董君雅はそこまで言い、溜息を吐く。

高順の存在だ。

聞けばやってきた使者は高順とは旧友だと言っていた。自分への要請だけが目的ではなく、高順を引き戻す為の任も受け

ていることは容易く想像がつく。

その使者である彼女に聞けば部族の長達が満場一致で高順が必要である、と判断したらしい。

彼女は腫れ物扱いされていたが、彼女がしていたこともまた部族で知れ渡っていた。

彼女の出身部族の者が変わり者がいる、と広めていたのだ。

誰も読まぬ、否、読めない兵法書を読みあさり、部族の戦術に対して口を出そうとしたり……

そのことがようやくになって評価されたことは当の本人にとっていいことなのか、悪いことなのか。

確かに、不安の種である高順を手元から遠くへやれるのならばそれはそれで董君雅にとつては良い。

だが、董卓もくつついてく可能性は極めて高い。

それはさすがに許容できない。

かといって、董卓を無理に高順と引き離そうとすればその思いはますます募るばかり……

打つ手無しであった。

「涼州各地の諸侯は参加するようね……その総兵力は10万を超えている。対して、羌族は頑張っても2万そこそこ……」

今回の大将である馬騰は羌族との混血だ。

しかし若い頃、彼女は官軍に志願して入り、そこで功績を上げ、今の地位に就いている。

故に立場を弁え、羌族とは付かず離れずという関係であった。

公然の秘密として異民族と仲良くしているのは涼州では今のところ董君雅くらいであった。

「中立維持……いや、ここは参加した方が得策か……？」

董君雅は異民族に対して友好的である。

だが、彼女も、そして異民族側も場合によっては敵対することを知っていた。

呵責はあるものの、それも無視できる程度のものだ。

「月はどうでしょうか……」

参加すれば娘とは絶望的な関係になるだろう。

参加しなければ将来的に朝廷に滅ぼされるだろう。

衰えたりとはいえ、まだ諸侯を動員するだけの権威が朝廷にはある。

「苦渋の選択だわ……どちらも苦すぎる……」

苦虫を噛み潰したかのような表情で彼女は呟いた。

しかし、彼女に迷っている時間はない。

既に馬騰らは動員を開始している。

対する羌族もまた各地の部族を集結させている。

対決は避けられない。

「……高順を部下にしていた、と分かればどちらにせよ難癖をつけられる。だが、民はついてこない」

董君雅は息を大きく吸い、そして吐いた。

「民の意志、私の命、そして月の命……優先すべきは……」

彼女は決断を下した。

すぐさま適当な者を数人呼び、朝廷へ、そして馬騰への文を書き、それを彼らに渡した。

そして、董君雅は羌族からの使者を呼び、伝えた。

朝廷側に立つて参戦する。だから、高順と、そして娘を連れて行って欲しい、と。

どちらにせよ難癖つけて殺されるなら、娘は生き残る可能性が僅かなりともある野へ放つべきだ、と。

そして、高順ならばきっと娘を安全圏へ避難させた上で戦に望むだろう、と。

ここで少々時間は遡り、董君雅がまだ悩んでいた頃。

羌族からの使者は久しぶりの旧友に会うべく、その部屋を訪ねていた。

彼女は入ってその部屋にいる予想外の第三者に驚くが、それも一瞬のこと。

「……見ない間に女を連れ込んだか」

笑みを浮かべつつ、そう言う彼女に誰よりも早く高順は反応した。

「嵐！」

高順は名を呼び、嵐——華雄に抱きついた。
そして、ぎゅっと抱きしめつつ、その感触や匂いを堪能する。

「久しぶりだな、彩」

対する華雄もまた高順の背に片手を回し、その頭を撫でる。
急な展開に部屋にいた賈？は啞然となった。

「って、誰なの！ そいつ！」

我に返った賈？が叫んだ。

そんな彼女に華雄は高順の頭を撫でながら答える。

「私は華雄。彩とは古い友人でな。今回、少々厄介事が起きたので
彩を連れ戻しにきた」

高順はそれだけで事態を悟り、確認の意を込めて問いかける。

「官軍とやるのね？」

「ああ。既に各地から同胞が続々と集結している。だが、敵は馬騰
を筆頭とした官軍10万。どうにかする為にお前の力が欲しい、と
部族の長達がな……」

高順は押し黙った。

彼女には自分の部族と官軍が戦うという予想はできていたが、こ
こまで早いとは思ってもよらなかった。

「駄目よ」

黙った高順の代わりに賈？が口を開いた。

「何故、お前が答える？」

華雄の最もな指摘に賈？は胸を張って答える。

「彩の軍師よ。ともあれ、今、そっちに行くとは色々な予定が狂うわ。董君雅殿がどういう判断を下すかにもよるけど、どちらにせよ私達はここから出ていかなければならない」

だけど、と賈？は続ける。

「ただこの地を離れた、というのと官軍と戦う為に離れた、というのでは意味合いが全く違ってくるわ。前者ならまだどうにかなるけど、後者なら極めて拙い」

「だが、彩は我々の同胞だ。そして、彼女の母親もまたそうだ。お前は彩に母を見捨てろ、と言うのか？」

賈？は押し黙る。

利害では確かに彼女の言うことは最もであるが、人間はそれだけで動くものではない。

「彩、お前の力が必要だ。こちらの兵力は2万しかない。官軍を打ち破らねば羌に未来はない」

そう言う華雄であつたが、高順はすぐには答えず、抱きついていた彼女から離れる。

そして、水差しから湯呑みに水を注ぎ、ゆっくりと飲み干す。

「……詠」

高順は最も信頼する軍師の名を呼ぶ。

「官軍と戦い、その武勇あるいは智謀が認められ、敵であるが讃えられる……そういうことはあり得るかしら？」

「あるわ。だけど、そんなにうまくいかないからそう讃えられるのよ？」

「うまくいくように何とかするのが人間よ。詠、あなたは226計画の前倒しを。文遠と共に各地を流浪し、人材確保に努めなさい」

「……あなたが死んだら、全てが終わることを肝に命じて」

その言葉は棘々しくも賈？なりの高順を気遣つての言葉。

意図を読み取り、高順は優しく微笑み、告げる。

「大丈夫、問題ないわ。詠も気をつけて」

そして優しく賈？を抱きしめた。

まさかの行動に彼女は目を白黒させ、何も言うことができずにいるうちに高順は離れる。

「嵐、何人かに挨拶をしたいから、暫し時間はあるかしら？」

「問題ない。私も董君雅殿の返事待ちだ……しかし、私個人としてはお前との関係を強化したいのだが？」

そう言い、華雄は高順を抱き寄せる。

その際、賈？に不敵な笑みを見せるのも忘れない。

「2年以上、会わなかっただろう？ 積もる話も多々ある……何より、もはや私はあの頃の私ではないぞ？ 読み書き計算何でもござれだ」

「猪じゃないなんて……頑張ったじゃないの」

「そつだとも。もうお前に負ける要素は何一つないぞ」

そう言い、華雄は高順の顎を僅かに上げる。

柔らかそうな彼女の唇、僅かに潤んだその瞳に華雄は胸の高鳴りを感じた。

「やめなよ。好き合ってもいないのにそういうこと……」

賈？は2人から視線を逸らしながら言った。

「私は彩のことが好きだぞ？ 好敵手として、友として、何より女として」

「……私とあなたが一緒にいたのって2週間くらいじゃなかったわけ……」

それでそこまで言っちゃうなんて、とさすがの高順もどん引きであつた。

「いや、私ももう13。性の発散の為に部族で色んな女を抱いたのだが、どうも駄目だ。何か足らん、と思って色々考え、彩の顔が浮かんできた。ほら、問題ないだろう？」

「いいからとつと行きなさい！ どっちもやることがあるでしょ！」

賈？はそうまくし立て、2人を引き剥がすと高順の手を引いて、部屋から出て行ってしまった。

残された華雄は顎に手を当てて考え込む。

「やはり彩の女であつたか……」

やれやれ、と溜息一つ吐く華雄であった。

そして、彼女はどこか適当なところで時間を潰すか、と部屋を後にする。

これから一刻後、城内をぶらついていた彼女の下に董君雅から使いがやってきたのだった。

董君雅は華雄に伝えた後、董卓を呼んだ。

「母様……」

董卓は董君雅から事のあらましを聞き、困惑した顔であった。急に呼び出され、やってきてみれば自分のあずかり知らぬところで何やら大変な事態になっているが故にそれも致し方ない。

「月、高順に私は大変なことをしでかしたわ。私の力が及ばないばかりに……」

そう言う母に董卓は首を横に振る。

そんな彼女の頭に董君雅は優しく手を置き、ゆっくりと撫でる。

「母様も一緒に……」

「駄目よ。私にはやらねばならない責務がある。それに逃げ出したところで私に対して朝廷からの追手が掛かるわ」

「でも……でも……」

董卓の瞳に涙が溜まっていく。
今生の別れではないか、とそういう予感が彼女にはあった。

「月、高順のことが好きなんですよ？」

唐突な問い。

その言葉を理解するのに数秒の時間を董卓は要した。
そして、理解した瞬間に顔が真っ赤に染まった。

そんな娘に董君雅はくすくすと笑う。

「高順は何だかんだで優しい子だと思うわ。でなければ短期間で2人も集まったりしないもの」

「うん……でも、寂しいよ……」

しょんぼりと顔を俯かせる董卓を董君雅は抱きしめる。

「大丈夫、大丈夫だからね……月のこと、ずっと私は見守っている。
泣いてもいいわ。ただ、泣きながらも前に進みなさい」

董卓は嗚咽を洩らし始めた。

董君雅は娘を優しく抱きしめ続け、泣き止むまで待った。

半刻程経ったところで董卓は泣き止み、母親をしっかりと抱きしめる。

母のぬくもりを忘れぬように、強く。

「あなたには勉強ばかりさせてきたけど、これからは自分の身は自分で護らないといけない。誰かを殺さねばならないときもある。もしものときは高順を頼りなさい。怖かったら泣きついていい。乗り越えるためには泣くのも必要よ」

董卓は僅かに頷く。

董君雅は強く彼女を抱きしめ、その名を呼ぶ。

対する董卓もまた呼び、そして無言で抱きしめ合う。

これが母娘にとって永遠の別れとなるのであった。

戦雲（前書き）

独自設定・解釈あり。

戦雲

出発する際、高順は賈？にいくつもの書状と自らが持つ全ての書物及び金銭を渡していた。

書状についてだが、これは賈？の観察眼を疑うわけではないものの、それでも念の為に、とこの言葉……というよりも詩に共感できる人物を確保せよ、と。

更には未来知識という反則により、最優先で確保すべき人物をリストに纏めていた。

大まかな出身地と名前のみであるが、あるとないとは全く違う。高順は磨けば光る原石を知っていて無視する程に馬鹿でも愚かでもない。

また彼女は張遼に次に会ったとき、真名を預けると伝えた。

董卓に関してはまさか戦場に連れて行くわけにもいかないのに、賈？に預けることとなる。

董君雅の予想がずばりの中した形である。

また賈？も高順に拙い状況に陥ったら読むように、と書状を一通、渡していた。

そして、やることをやり終えた彼女達は別れた。

董君雅の下から数日掛けて、高順は華雄と共に部族が集結しているという平原にやってきていた。

そこに来てみれば無数の天幕が視界一杯に立ち並び、中々に壮観であつた。

ところどころで馬達のいななきが聞こえたり、調練でもしているのか、掛け声が聞こえる。

それらを見て高順はふむ、と考えこむ。

「……駄目ね」

「は？」

急な駄目出しに華雄は思わず問い返す。

「こんなただつ広い平原じゃ持ちこたえることは到底できない。馬を扱えない歩兵部隊を丘陵などに配置し、騎兵はただちにもっと下がるべき。敵が侵攻し、歩兵部隊が敵先頭を足止めしている間に騎馬でもって敵の両側面を突くと同時に歩兵部隊も敵突出面に対して総攻撃開始」

高順は5倍の敵を打ち破るには機動防御しかないと考えていた。

彼女が望むのは華々しい騎兵突撃による玉碎覚悟の決戦などではなく、後手からの致命的な一撃。

彼女は芸術的な機動防御を行ったマンシュタインにならねばならかつた。

また、高順は敵の士気は極めて高いこと、そして下手をすれば10万を超えることも予想している。

それも当然だ。

異民族は漢族にとって蛇蝎に等しい。

その異民族を駆逐する為に戦うとなれば敵の兵力が10倍以上に膨れ上がった、何らおかしいことではない。

無論、兵站上の理由からそこまでの大軍とはならないが、それでも当初の10万よりも多くなりこそすれ、減ることはあり得ない。

対する華雄は高順の言葉に頷いていた。

一昔前の彼女ならば己の武勇でもって蹴散らすとか何とか言っていただろうが、読み書き計算だけではなく、彼女も頑張って孫子を読んだ結果、如何に個人が優れていようと大軍には勝てない、と結論づけていた。

尽きることのない体力、欠けることなき得物、僅かな傷もつけられない俊敏さ。

それらがあれば話は別だが、到底人間には無理であった。

「部族の長達はこっちだ。全てお前に委ねると言っているから大したことにはならないだろう」

「そうでなければ私は母とあなたとあなたの母を連れて逃げるところだわ」

高順の言葉に華雄は笑った。

そして、2人は一際大きな天幕へと向かったのだった。

天幕に入って早々、まとめ役である老婆が口を開いた。

「高順、主のことについてはよう聞いとる。此度の戦、どうにかしてくれないか？」

単刀直入である。

だが、高順としてはそちらの方がむしろ好ましかった。
アレコレ言われるよりも遙かに。

「確認ですが……全て私がやってよい、と？」

「構わん。上から下まで全て意志は統一してある」

「何をもって勝利としますか？ 敵を全て殺せ、というのはさすがに無理なので勘弁願いたい」

高順の問いに老婆は暫しの間をおき、答える。

「敵が退けばそれでよし」

「了解しました。戦える者しかここにおりませんか？ 敵は今どこに？」

問いに老婆は頷き、そして答える。

「時間の猶予はまだ若干だがある。敵はまだ兵を集めている真つ最中であり、各地を出立するのは2週間、集結し、ここに来るまでさらに2週間といったところだ」

ならば、と高順はただちに告げる。

「ここを放棄し、ただちに丘陵のあるところに移動しましょう。一刻も早く」

「ここで戦っては駄目なのか？」

問われた高順はすかさず答える。

「全滅し、余勢を駆る敵軍に一族全てを根絶やしにされたいのであればここで戦います」

「……すぐにここを払おう」

高順に全て任せると言った以上、愚問であったな、と思いつつ老婆はそう指示を出したのであった。

それから羌族は高順の指示通り3日程南へと行き、丘陵の多いところにとどり着いた。

そして丘陵の上に小規模な砦を幾つか構築する。

2万人余りが総出で近くの森から木を切り出し、それを高順の指示通りに柵や城壁、櫓を組み立てていく。

弓の射程はだいたい300m程度。

高順は砦の相互距離をおよそ3町程、メートル法に直せば327m程度に設定し、砦と砦による連携が期待できるようした。

また柵は多ければ多いほどいい、と高順は考え、丘陵の麓からできる限り多く設けることとした。

柵による足止めをしている中、矢を射掛ければ大打撃が期待できる。

また、その場合は上から撃ち下ろす形になるので通常よりも射程距離が伸びる。

そして、十重二十重の柵は騎兵による突撃を阻止する。

こちらも騎兵は得意だが、相手もまた得意。

しかし、こちらは皆に籠るのは歩兵のみ。

ならばこそ、相手の得意を封じるのは良策であった。

はつきりと高順はその脳裏に作戦を組み上げていた。

華雄に語った作戦をより大胆に、そして精密に……

砦を落とそうと躍起になっている敵軍の側面を突けば一瞬で事が終わるだろう、と。

無論、こちらも無傷で済むとは思っていないが、それでも敵には膨大な出血を強いることができる。

そうなれば敵として諦めざるを得ない。

「……夜襲を考えてみるか」

指示を出す傍ら、指揮所とした天幕にて高順はふと思いついた。敵が集結し終わった後に攻撃を開始しなくてはならない、という決まりがあるわけでもない。

律儀に待つ義理はなく、騎馬民族の利点……その機動性を最大限に活かすべきである。

高順はただちに華雄を呼び、自身の考えを話した。

「面白そうだな」

華雄はただそう返す。

そんな彼女に高順は更に言葉を続ける。

「ただ問題は敵が怒ってもつと兵隊を動員してきたことだけ……まあ、10万が100万になっても変わりはないわね」

「そうなった場合、戦力比は1：50か。面白い戦になりそうだな」

むしろそうなれ、と言いたげな獰猛な笑みを華雄は浮かべる。

猪ではなくなったとはいえ、勇猛であることは間違いない。

そして、彼女が率いる部隊は部族の中でも一、二を争う程の腕前だと高順は聞いていた。

「やれるかしら？」

問いに猛将は不敵な笑みを浮かべる。

「お前がやれ、というならやってみせよう……それに連中はもう勝ったつもりでいるだろう？」

「ならば、教育してあげましょうか」

ここに夜襲が決まる。

数刻後、華雄は手勢を率いて出陣していった。

その総数僅か600弱。

だが、彼女らは狩られるのを待つ獲物にあらず。

狩人をも食い殺す獰猛な虎であった。

高順が準備を進める中、彼女と別れた賈？達は気が気ではなかったが、それでもどうにか落ち着いていた。

とりあえず一行は東へと歩みを進め、涼州を出、隣の雍州へとやってきていた。

手近な街で宿を取り、今後、どう進もうかと彼女達……というよりか、賈？は1人、考えていた。

しかしながら、その彼女は苛立っていた。

張遼、董卓とも路銀の節約の為に同室である。

そこは全く問題ないが、董卓の態度に問題があった。

賈？は気づかれぬよう董卓に視線を向ける。

彼女は寝台の上で溜息を吐いたり、時折高順の真名を呼んだりしていた。

賈？のことは全く眼中にないようだ。

はつきり言つて鬱陶しい。

張遼がいれば彼女に押し付けるところだが、彼女は買い出しに行っている。

賈？は溜息一つ、再び高順からもらった書状を読み返す。

書状は登用すべき人材などを纏めたものと彼女が覚えていた現在の漢の状況にぴったりの詩などの他、賈？個人へ宛てたものもあった。

それには信頼の証を詩とした小っ恥ずかしいものが書かれていた。読んでいて賈？の性格では赤面してしまうようなものだ。

とはいえ……ここまでされては賈？のやる気は十分どころか天を突く勢い。

数十名にも及ぶリストの人物。

その全ては無理だとしても確実に1人ずつ、確保しなければならぬ、と気持ちを新たにす。

「しかし……あの詩、本当にぴったりだわ……今を憂う者なら心揺さぶられる事間違いない」

賈？は自分宛のものではなく、今の漢の状況を示した詩を思い出す。

あれは間違いなく生真面目な輩に受ける、と確信する。

「汨羅の淵に波騒ぎ、か……」

賈？が窓から外を見ればそこには綺麗な夕日があった。
瞬間、賈？は想像する。

没する日は漢、その周囲にある赤い光は血。
没した後に来たる夜は戦乱。

「……どんな時代が来ようと、ボクは彩に全てを捧げる。ボクをこ
こまで信頼してくれる彼女を見捨てるわけにはいかない」

相互理解の重要性（前書き）

独自設定・解釈あり。

相互理解の重要性

「戦術的勝利を幾ら重ねようと戦略的敗北は覆らない」

華雄隊が出陣して早数日。

高順は部族の長達、そして部隊を率いる者達を集め、講義を開いていた。

とはいえ、それは講義というよりか抗議に近い。

元々彼女も略奪を容認していたようなものだが、事このような事態になつては自分のことは棚に上げて言う必要があつた。

というよりか、まさか漢がここまで本腰を入れてくるとは思ひもよらなかつたというのが本音だ。

高順は居並ぶ面々の顔を見回し、そして誰も自らの言葉の意味を解していないことに溜息を吐く。

ちなみにだが、その居並ぶ面々の中には彼女の母もいたりする。

「凄く簡単に言うと、敵を野戦で撃破しました。だけど、敵はほとんど兵を繰り出してきました。こちらは勝利を重ねるけど、最終的に兵隊がいなくなつて負けました」

高順の言葉に面々はわかつたらしく、なるほど頷いている。

「今回、こうなつたのは我々が漢に対して反乱みたいなことをしていたから。つまり、こうならないようにする為には元々そういうことをやらないか、やつたとしても漢のご機嫌をとっておけばよかつた」

「いや、だけどなあ……」

そんな声を出す母の高廉。

他の者達も似たような反応だ。

「まあ、私が略奪を止めるよう言わなかったこともあるし……いや、言ったとしても止められるかどうか怪しいし、そもそも私が生まれた時点でもうそうなつてたし……」

これみよがしに溜息を吐いてみせる。

変えよう、と頑張ったところで当時の腫れ物扱いを考えればどうにもならない。

ともあれ、高順本人としても略奪には興味があったのは確か。その興味が今の様なのである。

この場に高順を若輩者が、と怒るような者はいない。

そもそも高順の知恵を頼っているのだ。

若輩者どうこう言うような面倒くさい輩がいるなら、さっさと彼女はこのから母を連れて逃げ出すだろう。

「ともあれ、もう略奪なんて終わりにして交易と適当に山賊でも退治して過ごせば万事うまくいく。そもそもただの小遣い稼ぎで一族全てを危険にするようなことを誰も気づけなかったのか……」

これ以上ない程の正論に誰も彼もが黙って俯いてしまう。

昨今の漢の駄目っぷりを見ればそんな本腰入れてこないだろう、という予想があったのだろう。

高順としても漢の本気は予想外であったのでそこは責められないが……それでももうちょっと頭を使ってもいいんじゃないだろうか、と思う。

「とにかく、終わったことは仕方がない。私は10万だが100万だか知らないけど、敵を打ち破る。その為には私の指示をしっかりと聞いてもらう」

そう前置きし、高順は暇を見つけて作ったお手製の大地図を広げた。

正確な測量なんぞできやしないので大雑把なものだが、およその位置関係くらいは把握できる。

その地図を見ようと大勢の者がその身を乗り出す。

「ここが砦。ここには歩兵のみを籠らせ、絶対に抜かせないし、別命あるまでは砦から出さない」

これまた適当な木の枝で作ったお手製の指示棒で中心にある砦群を指し示す。

「本命の騎馬隊はここより後方」

すーっと指示棒を砦群の下へと持っていく。

丘陵地帯を抜けたその先の平原で彼女は指示棒を止める。

「この辺りに待機し、敵軍が砦へと押し寄せ、落とそうと躍起になっている間、その素早さでもって……」

砦を迂回し、弧を描くように敵の布陣するだろう場所へと指示棒を持っていく。

「これにより前面の砦に気を取られていた敵軍は側面からの奇襲攻勢に対応できずに瓦解。勿論、連中も馬鹿じゃないから、これは1回しか通用しない。この一戦で敵兵力を大きく削るか、敵の大將首

を討ち取らねばならない」

おお、とざわめきの声が起きる。

「これは防御だけど攻撃よ。そして、恐ろしく早く戦闘は推移する。急流のように。伝令は数多く用意し、半刻よりもっと速く命を下すわ。疑問に思わずただ言われた通りにやりなさい。そうすれば勝利は勝手に転がり込んでくる」

そう言いつつ、ふむ、と高順は顎に手を当てる。

「……華雄は今、600の手勢で夜襲に出ているんだけど、主力8000の騎兵でもって夜襲は可能かしら？」

高順の問いは彼女自身でも無謀だと分かっていた。

歩兵による夜襲ならばいざ知らず、騎兵による夜襲は危険過ぎる。華雄はやれる、と言っていたものの、それは人員少なく、また彼女の部隊の練度が極めて高いからだ。

夜となれば視界悪く障害物などがあれば危険であり、かつ人馬共に多大なストレスが掛かる。

それが8000という大兵力ならばなおさらで、行軍するだけでお互いに衝突し、いらぬ損害を受ける可能性は高い。

だが、同時にそれを成し得れば敵の最大の間隙を突くことができる。騎兵による夜襲なんぞ華雄隊が成し遂げればそれが最初の事例となるだろう。

その結果は数日中には判明する。

対して、大規模な騎兵による夜襲は未だかつてない。

高順が知る未来においても、歩兵による夜襲は数多くあれ、騎兵

のみの大規模な夜襲は無い。

故に高順は尋ねてみた。

虎の子の騎馬隊を消耗覚悟で使うか否か。

そもそも、機動防御だけでもどうにかできるだろうし、そうなるように策を巡らす。

だが、それだけで敵の士気を挫けるかどうかは怪しいものだ。

寡兵でもって大軍を相手にする場合、思いも寄らぬ方法でなければ中々に厳しい。

「……舐めてもらっては困る」

今まで静かに聞いていたまとめ役の老婆が口を開いた。

高順が母から聞いたところによれば若い頃はそれはもう大変な暴れん坊だったという。

「我ら一族、馬と共に生き、馬と共に死ぬ。ならばこそ人馬一体、その程度こなせずして何が羌か……」

静かだが、力強いその声に賛同するかのような他の者は頷く。

その答えに高順はならば、と続ける。

「蹂躪しましょう。連中に我々の恐怖を刻み付けてやりましょう」

その為には、と高順はすぐさま提案を行う。

「みつちりと訓練を行う必要がある。早速今日から夜間訓練を。華雄が敵を攪乱し、時間を稼いでいる間に……」

高順には確信めいたものがあつた。
華雄はただ馬鹿正直に夜襲を掛けるだけでは終わらない、と。

そして、それは正しかった。

「ただ夜襲を掛けるだけでは面白くも何ともない」

夜襲へと出かけた華雄隊。

彼女達は今、休息をとっていた。

その際、華雄は配下の者を集めてそう言った。
色々と学んだ彼女は自らの武を誇ることをやめ、何よりもまず他人を驚かせることを好むようになった。

武は誇るものではなく、勝手についてくるもの、とそういう考え

方に変わったのだ。

ならば、他に何か楽しみはないか、と考えた彼女が見出したのが他人を驚かせること。

相手の吃驚した顔は何よりも面白いものである。

とはいえ、華雄はやりすぎて痛い目に遭う程に愚かでもない。

「だが、まずは馬鹿正直に夜襲をし、ついでに敵の兵糧やら何やらを燃やそう」

そう言いつつ、彼女は続け懐から小壺を取り出した。

部下達が何だ、と不思議がる中、華雄は悪戯を思いついた子供のような笑みを浮かべる。

彼女の持つ壺には染料が入っていた。

「これで髪色を黒くし、義勇軍として諸侯の中に潜り込もうではないか」

何とも単純な手だが、華雄は成功を確信していた。

数が多ければ多い程にその詳細は把握し難くなる。

木を隠すなら森の中とはよく言ったものだ。

その決定に不服がある者がいるどころか、面白い、とばかりに笑みを浮かべる者しかない。

それもそうだろう。

何しろ、獅子人中の虫となることで、大将である馬騰をはじめとした諸侯を刈り取り放題なのだから。

「彩、お前には悪いが、美味しいところは頂いていくぞ」

眩いた華雄は夜空に親友の膨れっ面が見えたような気がした。

一方その頃、張遼は賈？を問い詰めていた。

何か、致命的な事態となったわけではないが、それでもそれになりうる懸念を張遼は見つけたのだ。

つまり、宦官を倒した先にどうするか、ということ。

ただ地位や名誉が欲しいならば普通に賊退治やら何やらを行えば地味だが、確実に、安全に、そして合法的にそれなりのものが手に入る。

だが、高順はそうはせずに宦官を倒そうとしている。

諸刃の剣もいいところだ。

賈？も張遼の言い分は最もだと思う。

何よりも、彼女自身も高順本人から宦官を倒した先にどうするか、とは聞いていない。

そして致命的矛盾を賈？は見つけてしまった。

武官が政治に手を出すべからず。 例外の荒療治と高順は言っていたが、それでも宦官を倒した後、政治から抜けることができるようには到底思えない。

つまり、政治的な宦官を倒すということは倒した者も結局政治に関わるということ。

賈？は悩む。

張遼は彼女の返答を待つべく、地面にどっかりと座っている。

対する董卓は眉間に皺を寄せ、思索していた。

彼女とて暗愚ではない。

確かに普段は恋する乙女なのであるが、その頭脳は確かなものだ。

「……何進の後ろ盾を得た後、より手っ取り早く重要な地位に就く為？」

中々に物騒な話であるが、周囲がだだっ広い草原であり、野宿しているという現状なら誰かに聞かれるという心配はない。

そして、董卓にもとうの昔に賈？達は旅の目的を話していたので問題は無い。

賈？は自ら口に出した言葉を直ちに否定する。

「思っんやけど、前提からして間違っとなるんやないか？　こう言っのもあれやけど……何で異民族の高順が漢に手出ししてくるんや？」

張遼の言葉に続き、董卓が口を開く。

「彩ちゃんは街で嫌われ者だった。自分を嫌ってくる人の為を思っ
て、勅命を使い、色々と悪さをしている宦官を倒そうなどとは思わ
ない……」

高順が底抜けのお人好しであるならばそうなるかもしれないが、董卓から見たところ、とてもそんな風には見えない。

董卓の言葉を聞き、賈？は自分が何か忘れていることに気がついた。

それが何か、と懸命に記憶を探る。

「しかしあれやな……今でも別れたときの高順の顔を思い出すんやけど、ありや死に行く顔やあらへん。勝ちに行く顔や。10万を超える官軍相手に。これでほんまに勝つてもうたら、高順の名は大陸全土に響き渡るやろうな」

「勝ってくれなきゃ困ります！」

負けたら死ぬ可能性が高いだけに董卓は頬を膨らませて張遼を睨む。

董卓としては本気で怒っているのだが、迫力は全く無く、張遼はただ微笑むだけであった。

そして賈？は張遼の言葉に忘れていたものを探り当てた。

そう、高順は曹孟徳を高く評価し、仕えてもいい、と言った。

それに対し、自分は負け犬根性は許さない、と返した。

高順の答えは曹孟徳の軍勢を幾度も打ち破り、やめてくれと泣いた段階で軍門に降ってやる、というものの。

それらのやり取りから賈？は高順の目的が見え……そして背筋が震えた。

「彩は……自分を諸侯に売り込む為に宦官を倒すつもりよ……」

震える声で賈？は告げた。

張遼と董卓はたつぷり数十秒の時間を掛け、その言葉の意味を理解する。

「ちよう待てや。そんなことの為だけに？ 下手をすれば逆賊として殺されるんに？」

「信じられないけど、その可能性が高いわ。少なくとも、高順は自分を嫌っている連中を助ける為に宦官を倒すようなお人好しではない。彼女は少数で都の中枢を襲い、奸賊を討ち果たしたという煌びやかな功績を諸侯に見せつけ、そして諸侯がどれだけ自分に高い値をつけるか試すつもりなのよ……」

高順が宦官を討ち取ると言ったとき、賈？はその表情をはつきりと覚えている。

自信に満ち溢れ、万に一つの失敗もあり得ない、とそういう顔であつた。

「もう言ってしまうけど、ボクは高順に天下をとって欲しい。彼女の知識は凄い。少なくとも、漢王朝よりは遥かに多くの人に衣食住を与えることができる」

賈？が何よりも感銘を受けたのは医療。

特に様々な病の原因が目に見えない程に小さな菌によるものだということは医者でない彼女をして納得がいつてしまった。

そして、それを治す為には主に抗生物質が必要である、と。

アオカビから作られるペニシリンというものだという事まで書かれていた。

彼女が夢の中でいた1000年以上先の未来では今、大陸にある病気のほぼ全てを治してしまえる、とも書いてあつた。

だが、それは今の時代ではどうあつても治せない、という証明で

もある。

「だけど、高順は天下を取りたいとは思っていない」

賈？はそう言葉に出し、ああ、そうか、と納得した。

かつて彼女は高順に天下をとれ、と言い、そしてつい数秒前も自らの意志として言った。

如何に知識が凄いいとはいえ、その王になるまでの道のりが半端ではなく険しいのだ。

そもそも異民族である高順に好き好んで従うような民は存在しない。

つまり、最初の取っ掛かりすら掴めないのだ。

異民族というだけで。

そして、高順の性格上、そんな自分を嫌っている連中の為に働くとは思わない。

なら、せいぜい利用してやろう——そこまで賈？は思い至った。

彼女は「ああ」とまるで熱に冒されたような声を出した。

そんな声にどうしたんか、と張遼は目を白黒させ、董卓は心配そうに湯呑みに水を注いで渡す。

賈？は董卓の気遣いに感謝しつつ、それを一気に飲み干し、告げた。

「ボクの主はとんでもない」

彼女はそう前置きし、自らの考えを一気に捲くし立てる。

張遼も董卓も一言も聞き漏らすまい、と耳に神経を集中させる。

数分後、賈？は全てを語り終えたとばかりに口を閉じた。
その顔は恍惚としている。

「……偏見は強いからなあ」

張遼はしみじみと呟いた。

彼女は高順にされた仕打ちを間近で見ているだけに、その気持ちが痛いほどに理解できた。

問答無用であんなことをされたら誰だって怒るだろう。

張遼は高順と過ごし、少なくとも一般的な異民族への印象は間違
いであることを知っている。

確かに略奪などをしているのは彼女の部族であるのだろうが、そ
れでも彼女は違う。

そう言い切れるだけの情報を持っている。

対する董卓は張遼とは違い、一歩進んだところへと切り込んだ。
それは賈？が気づきながらも、敢えて触れなかったことであり、
彼女がとんでもない、と称した肝心の部分である。

董卓はそれが張遼にとって不快なことだろうと気づきながら敢え
て話題に出した。

「文和さん、ということとは彩ちゃんはこの大陸に住む漢民族全てを
己の為に切り捨てることもできる……そういうわけですね？」

その発言に対する両者の反応は分かれた。

張遼はハッとし、賈？をマジマジと見つめ、対する賈？は……

「よくそこに気づいたわね、仲頼。必要とあらば彩は切り捨てるで

しょうね。彼女にとって顔も知らない上に自分を嫌う漢民族などうでもいい存在に過ぎない」

その言葉に張遼は口から出そうになる怒声をどうにか飲み込み、ゆっくりと深呼吸する。

そんな彼女が何かを言う前に賈？はただ一言告げる。

「文遠、あなたの瞳に高順はどう映ったの？」

張遼は賈？の一言により、自らの高ぶった感情が冷水を掛けられたかのように、急激に冷えるのを感じた。

「そうやな……少なくとも、欲に塗れた俗物のように嫌われているからといって民を食いものにするような輩やない」

「それが答えよ。ま、余程のことが無い限り、高順はそんなことはない」

それに、と賈？は張遼の緑の瞳をまっすぐに見据え、告げる。

「ボクが、この賈文和が主と定めた相手にそんなことをさせると思っているの？」

絶対の自信。

並の者ならただの虚勢にしか聞こえないその言葉も賈？が言うならば事実となる。

つまり、異民族である高順を異民族嫌いな漢族に受け入れさせてしまうような、そんな策があるのだ、と張遼は悟った。

「……ウチもまだまだやなあ」

しみじみと張遼は言った。

感情を抑えてこそ冷静な判断が下せるといふもの。
情に流されては真実を見失うといふのは至言であった。

一方、董卓は悔しげに顔を俯かせていた。

彼女は今、高順と賈？の絆の強さとも言うべきものを見せつけられたような気がしたのだ。

賈？が様々なものを高順から託されたのに対し、董卓は高順から何も受け取ってはいない。

それだけ自分は信頼されていないのか、彩を思ふ気持ちは誰にも負けないのに……

どんどん悪い方へと転がる気持ち。

1人であつたならこのまま悪化の一途であつたのだろう。

だが、ここにいるのは彼女だけではない。

「詠よ」

素っ気なく賈？は言った。

その単語に董卓は顔を上げる。

彼女が見たものは何やら恥ずかしそうな賈？の顔。

その視線は彼女にしては珍しくあちらこちらを彷徨っている。

「その……あんたはそのまだまだなヤツが気づかなかつたことに気づいたから、見込みはあると思う。だから、その、えーと……」

どんどん尻すぼみになる言葉。

まだまだなヤツと言われた張遼は苦笑い。

やがて賈？は意を決したのか、董卓の瞳をまっすぐに見据えて言った。

「私の真名、預けるわ。はっきり言っけど、うちは人材不足なの。だから猫の手も借りるし、世間知らずな頭でつかちの手も借りたいわ」

「へう……」

合っているが、そこまではっきり言わなくても、と思う董卓である。

だが、不思議と不快な気分にはならない。

「つまり、あんたは私が育てて政略も軍略もどっちもできるようにする。いいわね？」

問いかけはただの確認に過ぎず、董卓の意志はそこにはない。だが、高順の為ならそれは望むところ。

彼女は賈？の視線に怯むことなく、凜とした表情で僅かに頷く。

「……詠ちゃん、今、思ったのですが」

「詠ちゃん……いや、まあいいわ……あと敬語でなくていいから……で、何？ 月」

何の気なしに董卓はたった今、思いついたことを告げる。

「彩ちゃんが嫌われているなら、私を旗印に、彩ちゃんは表向きに私の臣下ということにすれば丸く収まるんじゃないかな？」

賈？は思わず笑ってしまった。

天下を取るのを嫌がる高順に天下を取らせるには地方とはいえ、太守の娘である董卓を旗印にするしかない……賈？が策の一つとして思い描いていたことを、目の前の世間知らずな頭でっかちが言うてのけた。

自分は傀儡になる、と宣言したようなものだ。

マトモな神経では到底できない。

さすがの張遼もこれには驚いた顔をしている。

しかし、賈？は承知していた。

高順に依存している董卓なら、彼女に言われたならばどんな汚れ仕事もするだろう、と。

「悪いけど月、私はあなたの旗ではなく、彩の旗がいいの。それにあなたの母親が仕出かした失態は旗揚げした際に隙となり得る」

「へう……」

「まあ、彩も董君雅殿も運が悪かったのよ。もし涼州が連合して羌族と戦うなんて事態になっていなければその案でいったかもしれない。いざとなったら旗なんて彩に決めてもらえばいいし」

「母様の失態って彩ちゃんを部下にしちゃったこと？」

董卓の問いに賈？は頷き、口を開く。

「連合に参加しようがしまいが、どちらにせよ董君雅殿は難癖つけられるわ。敵である異民族を配下とするとは何事か、と」

辺境とはいえ太守となりたい者は多くいる。

その者達が見逃すわけがないのだ。

「羌族と戦うってことさえなければこんな事態には陥っていないで

しょうね。で、続けるけど、難癖つけられた董君雅殿の娘もまた異民族に味方する云々と難癖をつけてくるでしょう」

「へう……」

思った以上に厳しい現実には董卓はしょんぼりと肩を落としてしまふ。

そして、そんな董卓の肩を張遼が叩く。

「そのとんでも軍師さんの頭ん中にはとんでもない策が詰まってるんやろ。ほなら、見習いは先生のお手伝いしつつ、その技をゆつくり盗んでいけばええんや」

張遼の元気づけに董卓は小さく頷く。

「で、文遠。もうあんたも真名を教えなさい。ここまできたら途中で引き抜かれることも、自分の意志で抜けることも許さない」

そう言う賈？に張遼は待ってました、と言わんばかりの表情。

「ウチの真名は霞や。気軽に神速の霞ちゃんって呼んでーな」

そう言い、ウィンクする彼女に賈？はコメカミを抑えて告げる。

「……極寒の霞と呼んであげるわ」

「きついなー」

笑う張遼に賈？は咳払い一つ。

「ボクの真名は詠。よろしく、霞」

「おうおう、よろしゅうなー」

そんなやり取りに董卓は微笑みつつ、自らも口を開く。

「私の真名は月です。よろしく願います」

「はい、よろしゅう。いやーやっ仲間に加わった感じがするでえ」

うんうんと満足気に頷く張遼。

そんな彼女に処置なし、と肩を竦める賈？。

「詠ちゃん、それでどうするの？ 彩ちゃんを認めさせるには」

董卓の言葉に賈？は申し訳なさそうな顔をする。

その顔にはてな、と首を傾げる張遼と董卓。

「いや、何も奇を衒った策っていうわけじゃないわ。ただ単純に異民族の中にもいいヤツはいるってそう喧伝するだけよ。宦官を倒したのは民の貧困の喘ぎに見て見ぬ振りはできぬ、と義憤にかられてとか何とか……」

そもそも賈？がもらった高順からの書状にもそんなことが書いてある。

故に何ら問題はない。

高順が心からそう思っているかは別として。

「……いや、こういうのはアレやけど、何だかんだで詠も宦官を倒すつちゅうのは既定事項なんやな」

「当然じゃない。その為に今、ボク達は旅をしているのよ？」

何を今更、と言いたげな賈？に張遼は溜息を吐く。

「常人を超えたところにあるんやな……いや、ウチとしては何だかんだでウチの名も上がるだろうから大歓迎やで？ でもな、もうちょっと色々失敗したときのこととか……」

「逃げ道なんて幾らでもあるじゃない。四方を海に囲まれているわけじゃあるまいし」

「いやもうその考え方から斜め上やわ……」

涙目になる張遼と不機嫌そうな表情となる賈？をまあまあ、と宥める董卓。

何だかんだでバランスの良い3人であった。

知将華雄（前書き）

独自設定・解釈あり。

知将華雄

「……これで本当に大丈夫なのか？」

不安げな表情で1人、呟いたのは茶色髪の少女。

見た目から推測すれば15、6歳程度にしか見えない彼女はれっきとした子持ちである。

そして、彼女は軍勢の総大将であった。

「思った以上に兵の数が……参加する諸侯の数が多すぎた結果がこの様か……」

勝ち馬に乗りたい、という諸侯は致し方ないにしても、ちよつと募兵しただけで予定人数の数十倍の数が集まるとはさすがの彼女も思ってもみなかった。

それだけに異民族への嫌悪や憎悪が民の間で激しいことに嘆息する。

そして、予定人数に達したから、と彼らを宥めることも難しかった。

暴徒の一步手前となった民衆相手にいらぬ損害は出したくない。

それ故に希望者は全員連れて行くことになったのだが……兵糧に難が出てきた。

朝廷からはただ討伐しろ、という命令しか来ていない。

つまり、必要なものは自分で調達しろとそういうことだ。

他の諸侯も似たり寄つたりであり、当初の10万から20万程度にまで兵数は増えていた。

そう、最初は20万であった。

そんな大量の志願兵を調練するだけでも一苦勞だ。

当初の予定では1ヶ月弱で全て終わると考えられていたが、ある程度の準備を整えて出発するだけで1ヶ月もの時間が掛かっている。これにより敵に時間を与えてしまった。

ただ敵は遊牧民族。

城塞を築いているわけでもなく、大まかな位置は予想がつくが、実際にその予想位置にいるかはわからない。

無論斥候は出しているが、それでも中々に時間が掛かった。

そのとき、彼女の天幕にある人物が入ってきた。
その少女もまた茶色髪。

「翠、どうだった？」

問いかけに少女は肩を竦める。

「駄目だ。全然駄目だ。連中はもう使い物にならない」

「……そうか、ご苦労」

「いや、いいって。正直、私もちょっとくらい人が減ってくれた方がいいって思ってたし」

うんうんと頷く少女。

「馬騰ともあろうものが、こんなにも翻弄されるなど……」

そう言い、少女——馬騰は天を仰いだ。

ケチのつき始めは2週間前、兵を纏め、集結地点へ向かうべく移動していたとある諸侯が襲われたこと。

彼女は夜、野営地で敵の騎兵に襲われ、あっという間に討ち取られてしまい、ついでに所持していた兵糧まで焼き払われてしまった。本来ならあり得ぬ騎兵による夜襲にその知らせを聞いた諸侯はどよめいた。

如何に精強な騎馬隊で知られる涼州の諸侯といえど、そんな真似ができる兵を有している輩はいない。

訓練すればできるだろうが、それでも膨大な時間が掛かるし、何よりも普通に昼間戦った方が良い。

その諸侯が襲われたただけならいいのだが、その後も敵騎馬隊は忌々しいことに八面六臂の働きを見せ、徹底的にこちらの輜重隊と伝令を狙っていた。

行軍速度を上げる為に基本、輜重隊は護衛と共に本隊とは切り離す。

そこを物の見事に突かれたのだ。

敵は時には官軍の振りをし、時には旅人の振りをし、またあるときには大胆にも馬騰から密命を受けたとして輜重隊の護衛は自分達が引き受けるとまで言ったりしていた。

そして、焼き払われるならまだしも、自分達の兵糧をそっくり奪われたりしている。

これは拙いとただちに馬騰は護衛の人数を大幅に増やすと同時に伝令の証として、自分の印を押した証書を持った者以外は敵とせよと命を出した。

そうしたら今度はその伝令を狙われ、証書を奪われてしまい、結局輜重隊が襲われた。

護衛の人数を増やそうとも、敵の騎兵は怯まず輜重隊に疾風の如く駆け寄り、事を成したら疾風の如く去っていく。

あまりにも鮮やかな手口に馬騰も感心してしまう程であった。

おかげで輜重隊の護衛と伝令の護衛にまで兵を取られてしまい、おまけにやはり異民族は怖いと恐慌状態に陥った志願兵達が脱走し始めてしまったり。

踏んだり蹴ったりであった。

最近では護衛の人数を当初の3倍に増やしたことで輜重隊は襲われなくなったものの、伝令を徹底的に狙われていた。

伝令如きに100や200も護衛をつけるわけにもいかないが、命令が行き届かなければどうしようもないのでそれだけの数を護衛としてつけている。

最近、その敵騎馬隊が出現しなくなったとはいえ、油断はできない。

そして、集結地点に到達しているのは参戦してきた23名の諸侯のうち、12名しかない。

23名のうち1名は既に討ち取られ、残る10名は敵騎兵による攪乱により、混乱状態だ。

馬騰のところですら兵糧が心許ないのに、参加している諸侯は彼女よりも経済基盤が小さいところがほとんどだ。

それだけ兵糧の確保には苦労したことだろう。

そして、その兵糧があつという間に消えて無くなつてしまえばもはや士気は最低。

馬騰は娘の翠——馬超に使者として戦えるか否かを見定めに行かせていたのだ。

そして、その10名は脱落が確定した。

「失礼する」

そんな声と共に彼女が入ってきた。

彼女を見るなり、馬騰の顔が気持ち晴れやかになる。

「おお、葉雄殿」

「寿成殿、何やらお悩みのようで」

そう言う彼女——葉雄は黒髪を短く切りそろえた色白の肌であった。

彼女は討ち取られた諸侯に義勇軍として参加していたが、事実上、壊滅してしまい、他の諸侯へ参加しようとしたが兵糧不足を理由に断られ、彷徨った挙句にここにたどり着いたと馬騰は聞いていた。

そして、彼女は葉雄が率いる騎馬隊の腕を一目で見抜き、心底惚れ込んでしまったのだ。

「例の銀隊ですか？」

葉雄の言う銀隊とは散々に苦しめられた敵の騎馬隊の通称だ。その騎馬隊は全員が銀髪だと言うことからきていた。

「いや、それではない。連中はここ最近姿を見せていなくてな。斥候を四方八方に出しているが、見つかっていない。おそらくもうこの近辺にはいないだろう」

馬騰はそう答え、それに、と続ける。

「人数が少なくなつて動きが軽くなつたところだ」

「20万が今じゃ8万だぜ？ 信じられるか？ 葉雄」

歳が近いということで馬超は気安く話しかける。

葉雄はそれに嫌悪など示さず、むしろ歓迎した。

「敵は戦をよく分かつているらしい。こちらの兵糧と連絡の寸断に來たことからそれは明白」

葉雄の言葉に馬騰と馬超は頷く。

「輜重隊や伝令の護衛と兵の脱走、兵糧不足で士気はよろしくありません。しかし、数の差で敵を覆滅できることでしよう」

「だいたい4倍の兵力差だからな。それに私や母様、お前もいる」

うんうん、と頷く馬超に葉雄は笑みを浮かべる。

その笑みは頼もしいという感情から出たものか、それとも嘲りか。

「ならばこそ、長期戦など望まずに一気に呵成に片をつけるべきです。たとえ、敵が城塞を築いていたとしても力押しで勝利は確実。名高い馬一族の武を私に見せて頂きたい」

葉雄の言葉に不敵な笑みを浮かべ、頷く馬騰と馬超であった。

「うーん……予想以上だわ」

高順は思わず呟いた。

何が予想以上かというと華雄である。

彼女はとんでもない知将に化けてしまったようだ。

華雄隊から伝令としてやってきた者によれば華雄は大軍故の弱点を正確に見抜き、そこを徹底的に叩いた。

その結果が当初の予想を下回る敵軍8万、しかも士気は低いという最高のものとなって返ってきていた。

華雄の報告を高順はまだ誰にも話していない。

決死の覚悟をもってくれた方が戦いを有利に進められると判断したからだ。

そして、華雄隊の損耗はわずか80名弱であり、全体からみれば極めて低い損害だ。

彼女はたった600人で12万もの大軍を打ち破ってしまったことになる。

華雄1人いれば私じゃないんじゃないか、とってしまった高順であるが、その考えを追いやり、思案する。

華雄の報告によれば髪を染めて馬騰の本隊に義勇軍として紛れ込むというもの。

逃げてくる連中がいないことからおそらくそれは成功した、と高順は判断する。

彼女は笑ってしまう。

華雄の考えが手に取るように分かってしまった。

華雄は側面からの攻撃を受け、混乱している最中に馬騰をはじめとした馬一族を討ち取るつもりだ、と。

単純な武では華雄は馬騰どころか……ひょっとすれば馬超にも劣るだろう。

だが、混乱している最中であればその前提は覆る。

そして夜襲はやらなくてもいいのではないか、と高順は考える。

華雄は夜襲を成功させ、敵将を討ち取ったと聞く。
ならばこそ、馬騰が対策をしないわけがない。

そこに如何に精強とはいえ、兵を突っ込ませるのは馬鹿のすることだ、と。

師団規模の夜間突撃は燃えるものがあるが、個人的な欲で兵を動かしてはならない、と彼女は肝に銘じる。

「焚きつけた手前、説得するのは気が重いけど……いたずらに死なせるよりは遥かにいい」

そう弦き、高順は指揮所を後にした。

こうして夜襲により消耗する筈であつた虎の子の騎馬隊は1騎も欠けることなく、高順の一時的な不名誉と引換えに温存された。

手ぐすね引いて待ち受ける屈強な彼らを、今の状態の諸侯が防げるかどうかは極めて怪しかった。

頑張る女の子達（前書き）

独自設定・解釈あり。
微工口あり。

頑張る女の子達

「ふん……満足のいく政治体制は存在しない。絶対の権力は絶対に腐敗する」

賈？は敢えて聞こえるようにそう言った。

その声を聞きつけたのは自分の理想を語っていた官吏達。

彼らは気持ち良く話をしていたところに水を差され、むっとした顔を賈？へと向けた。

ここは河内郡温県。

賈？達はとある人物を登用する為にやってきていた。

最優先で確保すべき、大陸で一、二の切れ者と高順はその人物の備考欄に書き記していた。

そして、賈？には分かっていた。

並のやり方ではその目的とする人物は会ってもくれない、と。故にわざわざ董卓と張遼を連れずに街に繰り出していたのだ。

そして、わざわざ官吏に喧嘩を売るような面倒くさい真似をしている。

高順は馬鹿ではない。

最優先で確保すべきとしたその人物は切れ者であり、かつ、それだけの価値がある、と賈？は信じた。

「何者か？」

「名乗る名なんてないわ。で、あんた達、夢を語るのは結構だけど、現役の官吏がそんな甘い見通しでいいのかしら？」

何だと、と息巻く男は制され、他の男達は続けるよう頷く。

「皇帝を頂点に据え、国を運営する。その為に働いて出世する。大いに結構。だけど、私の言葉は否定できない筈よ」

きわどいところを賣？は攻めた。

その表現は曖昧であるが、ずばり今の漢を指している。
皇帝への不敬罪とされるかどうか、ぎりぎりのところだ。

そして、周囲には予定通りに野次馬が集まってきている。

「ではお前に案があるのか？」

かかった、と賣？は内心ほくそ笑む。

相手はこれで勝ったと思っていることだろう。

何しろ、まともに答えれば即刻反乱分子とされてしまうからだ。

ならば、答えは一つ。

まともに答えなければいい。

「何でボクがあなたに教えなくちゃいけないの？ 現役の御役人様はそんなことも分らないのかしら？」

そう言い、彼女は嘲笑を向ける。

官吏達は反撃に一瞬で冷静さを失った。

頭に一気に血が昇り、マトモな思考は失われる。

「言わせておけば小娘が！」

「その小娘に口で勝てないから、と力で無理矢理やるのかしら？
まるで強姦魔ね」

賈？はひるまない。

それも当然だ。

彼女は既に味方を得ている。

野次馬という味方を。

彼らはもし官吏が飛びかかれればその官吏を悪とするだろう。

野次馬の目には少女に口で負けている情け無い官吏にしか見えていない。

「言っておくけど、そもそも私はあんた達を探していたんじゃないくて、もっと頭が切れる輩を探していたのよ。あんた達が私の言葉に勝手に怒って勝手に私を捕まえるよう手を回しても、奮起して大出世を果たしても知ったことじゃないわ」

相手を煽っておいていけしゃあしゃあとそんなことをのたまう賈？。

このくらい図太い神経でなければ軍師なんぞやってられない。

「やれやれだわ」

これ見よがしにわざとらしく溜息を吐き、彼女はその後にした。

宿に戻った賈？は張遼と董卓に出迎えられた。

張遼はニヤニヤと笑い、董卓は困惑した顔であるのが対照的だ。

2人は賈？と官吏のやり取りを宿の窓から覗いていた。

「あんなことして大丈夫なの？」

董卓の問いに賈？は勿論、と頷く。

「ボクは何も悪いことはしてないわ。目撃者もたくさんいるし、もし何かしてきたらこの街の役所の評判が最低になるだけよ」

最低になるように広めるのだろっ、と董卓は分かったが何も言わずに頷いた。

頼もしくも怖い先生なのである。

「そのちっこい口からあんな毒を吐くとは……いやーウチびっくりしたでえ」

「うるさいわね……ともかく、これで撒き餌は終わったわ。あとは寄ってくるのを待つばかり」

「ほんまに釣れるんか？」

「釣れるかどうかじゃないの。釣るのよ」

断定された言葉に張遼はおっかない、と自分の身を抱いてみせる。

「ただ問題は彼女は彩を凡百の人間と見るでしょう。そうなった場合、最後の最後で裏切るでしょうね」

「それは拙いんとちゃう？」

「拙いわね。でも、致命的ではない。最初からそうなると分かっていたら幾らでもどうにでもできるもの」

出方さえ分かれば格上だろうと葬り去る、という賈？の宣言に張遼は今度こそ寒気が走った。

戦場で武を誇る武人とは根本的に違う。

戦場で対峙すれば相手を打ち負かした後、逃すかどうかを決めることができる。

だが、軍師と軍師の戦争は違う。

武人のそれよりももっと冷徹で情の入る余地は全くない、冷たい戦争。

それを張遼は感じたのだ。

「まあ、正直言つて彩の武は素人のボクから見ても中々よ。頭も悪くない。でも、並よりも少しだけ上程度。はつきり言つて個人的な武も、用兵術も霞には及ばないし、頭は下手をすれば月にも及ばない」

「そんなことないよ。彩ちゃんは凄いよ」

うんうん、と頷く董卓。

「いいえ、そうではないのよ。知っているか知らないか。彼女は知っているからこそ格上を倒しうる。もし、彼女が知っていることをあなたが知ればあつという間に彼女を追い越せるわ」

「何や何や……その口ぶりからすると詠は何か知ってるんか？」

じーっと見つめる霞。

董卓も同じくじーっと詠を見つめる。

「知ってるけど、今は言えないわ。言えるのは彩が死んだ後」

断固とした決意でもって放たれた言葉。

張遼も董卓もそれほどまでにとんでもない情報なのだ、と察した。

「ボクは前、彩がどれだけ高く諸侯に自分を売りつけるか、と言ったよね？」

問いかけに2人は頷く。

「あれから改めて考えなおしたら、彩の考えが分かった」

「ほう……？ それは教えてもらえるのか？」

勿論、と賈？は頷き、言葉を紡ぐ。

「彩はきつと夢を見たいんだと思う。苦しいことも、辛いこともあるけど、それでも素敵な夢を。自分が英雄達にどれだけ評価されるか、そしてあわよくば英雄達と肩を並べたい……」

賈？は重要な要素を前は見落としていた。

それはとても重要だが、漢民族を見捨てるという選択肢ができることに霞んでしまっていたこと。

高順はたとえ夢であつたとしても、未来にいた。

故に彼女は英雄達を知っている。

歴史によって英雄であることを証明された彼女達に自分はどれだけ評価されるか、そして肩を並べられるかどうか。

それは高順が自らを非凡ではない、と自覚しているからこそできる判断。

故に賈？は夢を見たいのだ、とそう評した。

そして、きつと高順は自分にも、霞にも、月にも認められたいのだ、と賈？は気がついていた。

そうでなければ幾ら旧友の頼みだから、母がいるから、と負ける可能性が高い戦に勝ちに行く顔と張遼が称した顔をするのか。

負け戦をひっくり返してこそその英雄。

そういう風に考えれば全てがうまく繋がる。繋がってしまつ。

「だけど、彼女は気がついていない。英雄達が高評価を下すとき、それは彼女も英雄となったとき。英雄はなろうと思つてなれるものではない」

賈？の言葉を引き継ぐように董卓が呟くように言つ。

「大勢の人の命を奪い、大勢の人の命を背負う。その手は真っ赤」

張遼は彼女に似合わない難しい顔で告げる。

「高順は夢見がちな馬鹿つちゆうことか……一番性質の悪いやつやな。ほんで、軍師さんとしてはそこらへんどうよ？」

高順の願いを叶えるのかどうか。

その意味が隠されていた。

「ボクはたとえ彩にどういう意図があろうと、彼女はボクを心の底から信頼し、信用してくれている」

そこで賈？は言葉を切り、少し恥ずかしそうに頬を僅かに染める。

「それはとても……嬉しいし、応えたいと思う」

だけど、と彼女は続ける。

瞬間、冷徹な軍師の顔となった。

「彼女の夢はあくまで自分だけの夢。彼女が描く夢にいるのは自分と英雄のみ。この世の多くを占める庶民はそこにいない」

「こういうのもアレやけど、そうなるのも無理はあらへんと思う」

一応擁護しておく張遼に賈？は分かっている、と頷いてみせる。

「月、臣下は主君の為に何をする？」

唐突に話題を振られ、目を白黒させるものの、それでも董卓はどうにか思考を巡らせる。

賈？が問いかけてきた言葉だけではなく、今までの流れから最適な解答を導き出さねばならない。

やがて董卓は正解に辿り着いた。

それと同時に安堵した。

詠ちゃんは彩ちゃんを見捨てない、と。

董卓は胸を張り、答えを告げる。

「主君の短所を補うこと」

その答えに賈？は満足そうに頷く。

それを見、張遼は不敵な笑みを浮かべる。

彼女にもわかったのだ。

そして、その答え合わせをするかのように賈？は告げる。

「彩の夢に庶民もねじ込む。嫌われたから彼女の夢から庶民が外れたと思う。なら、嫌われ者じゃなくなればいいのよ。元々、他の英雄達は民を救済したいとかそういう願いから戦に望むから不自然ではないわ」

「嫌われ者でなくした後、彩ちゃんが民を好きになるような出来事があれば……」

「一気に問題解決。高順も満足、民も満足、ウチらも満足や」

明るい空気となる一同。

「で、問題はやっぱり高順はどっかの県令にならないと駄目なのよね。庶民の人気を得るのに手っ取り早いのが賊退治や荒廃した街や村を復興させ、繁栄させることだし」

賈？の言葉に2人は頷く。

「まあ、例の件がうまくいけば民衆から支持されるんだけど、雲の上よりも身近なところで実際にやったほうがいいし……そうすると人脈が必要ね」

もはや2人の事は眼中にない、と独白し始める賈？。

会話から唐突に考えこみ、思考の海に入り込むという職業病みたいな癖が彼女にはあったので董卓も張遼も気にしない。

「次の目的地は決まったわ。ここでの登用がどうなろうと袁家に行く」

ハッキリと賈？は告げた。

それは高順には言われていないこと、すなわち賈？の独断。
しかし、それは最適であった。

高順は生きて帰ってくるだろうが、その功績をもつてしても果たしてきつかけが掴めるかは怪しい。
故の独断であった。

そして、まるで狙ったかのようなタイミングで扉が叩かれたのはそのときであった。

すぐさま張遼が誰何すれば、何と目的の人物からの使いだと言う。その使者は扉を開けずにいつでも来るように、と伝え、さつさと帰っていった。

「だ、そうやけど？」

張遼の問いに賈？はすぐさま答える。

「袁家に行きましょう」

打てば響くような答えにそうかそうか、と張遼は頷き、数秒後目を剥いた。

董卓も驚いた顔だ。

そんな2人に賈？は告げる。

「いい？ いつでも来いって言うてきたというのは字面だけとれば、今すぐ行ってもいいってことになるわ」

「そりやそうやろ」

うんうんと頷く張遼と董卓。

「でも、わざわざそんなことを言いに来る？」

あ、と董卓と張遼は気がついた。

少なくとも家柄でみるならば相手の方が圧倒的に上なのだ。

何故、わざわざ低い身分の自分達にそんなことを言いに来るのか。

「つまり、今の使者……本当にそうなのか怪しいけど、きっとボク達にこう言ってる。自分を登用したいなら使いつ走りじゃなく、主を連れてこい。それまで待ってやる……てね」

「先に誰かに登用されるとちやうか？ そんなことしとつたら」
「そのときはそのときよ。ともあれ、今ここで行くのは自分達はバカですって宣伝しに行くようなものだわ。さつさと次に行きましょう」

恐ろしい、と身を震わせる張遼であった。

これなら命のやり取りしてる方がまだ楽や……精神的に。

そう彼女が思ってしまうのも無理はない。

対する董卓は感心したように頷いている。

そんな2人に対し、賈？はあっさりと告げる。

「ま、こんなのは序の口でしょうね」

ぬるいぬるい、と言いたげな賈？に張遼は軍師には絶対逆らわない、と心に決めたのであった。

一方その頃、どうしたもののか、と高順は考えていた。

問題といえは問題であるが、そこまで大きな問題というわけでもない。

だが、どうするかで士気に関わることであった。

敵の斥候が既に数日前から現れており、近いうちに会戦となることは間違いない。

そこに出てきた母親からの疑問。

すなわち、高順はどこにいるか、というもの。

皆に籠るのか、それとも自分達と一緒に敵の側面を突くのか。

高順的にはその2択ではなく、3番目の選択肢、すなわち伝令と少数の護衛と共に全体を見渡せる位置に陣取り、指示を出す、というのをやりたかったりする。

そもそも高順からすれば將軍が敵陣真っ只中に突っ込むことが非常識なのである。

大將がいなくなれば負けるといふのはこの時代でも変わらない。

なのにその大將は敵陣に突っ込んだりする。

勿論、彼女自身の偏見もあるし、この時代、個人の武を示す為にはそういうことをしないといけないのもわかる。

だが、指揮官が死ねばそれで終わりであるというのに変わりはない。

高順には理解できないところであつた。

そして、それこそが賣？が読み違った点。

高順は彼女の言う通り、意識的か無意識的かわからないにせよ、

英雄になりたがっている。

それは自分が凡人であるということから出た劣等感に由来することとは間違いない。

多くの人間はそういった特別なものになりたがる。

それは自分が特別ではない、と無意識的に自覚しているから。

だが、高順は無理をしない。

自分の身を弁えているのだ。

もし彼女が愚かな英雄志望者であるならばただちに死亡者となるだろう。

つまり、戦への準備を万端整えた後、いざ会戦となったときに一も二もなく前線に立つと言うだろう。

そして、一見勇敢な、しかし第三者が冷静に見れば無謀であると判断する突撃を行うことだろう。

彼女はそれをすれば気分がいいだろうことは分かっている。
だが、それこそが甘い罠であるということも知っていた。

ふう、と彼女は息を吐き出した。

思考をやめ、虚空を見つめる。

「……嵐に謝らないと」

高順はぼつり、と呟いた。

言われた彼女は困惑するだろうか、それとも怒り出すだろうか、
笑って一発殴られるだろうか。

彼女は溜息を吐いた。

様々な小説に描かれるように未来から過去に行った人間は、自分がまるで全知全能の神にでもなったかのような錯覚に陥ってしまう。意識的に、あるいは無意識的に過去の人物を馬鹿にし、得意げな顔で自分の知識をひけらかす。

実際のところ、大学で進みたい分野の基礎を学び、そこから関連する職業に就き、更に仕事の傍ら向上心高く勉学に励めば……あるいはその分野で一角の人物となれるかもしれない。

だが、そこまでやる人物なら過去に行ったらまず絶望する。

自分の今までの苦労が全て水の泡と化すからだ。

彼らは強い人間に分類されるだろう。過去に行く、というイレギュラーな事態がなければ万事順調にいていたのだから。

その点、高順は弱い人間であつた。

イレギュラーな事態を歓迎し、こうしてここにいるのだから。

彼女はそこに至るまでの過程をどうしてそうなるのか、自ら導き出すことはできないが、前提と結果のみを知っている。

高順にとって、過去、華雄にやらかしたことは最大の汚点。本来ならもつと早くに気がつかなければならなかったこと。

彼女は華雄と再会し、昔を懐かしんでいるときにそれを思い出したのだ。

それは得意げな顔で未来の知識をひけらかしたこと。

勿論、当時の彼女はただ華雄をからかってやるう、とそういう気持ちであつた。

だが、それがいけない。

からかい方にも色々なやり方があり、彼女がやったことはからかいで足りない。

高順が華雄にやったことは無知であることを散々にまくし立て、自分は何でも知っている、と馬鹿にしたに過ぎないのだ。

それは相手を侮辱することに他ならない。

そして、その行いは反骨心を招き、華雄はいい方に化けた。だが、もし悪い方に化けていれば……悲惨な事態となっただろう。

「知識は独占するものに非ず、共有するもの……それを過去の私は忘れていた」

驕っていたのだ、と高順は後悔する。

勿論、見ず知らずの相手にはいはい知識を渡すわけにもいかない。危険視されて暗殺されるのはさすがに嫌である。

そして、あのときのもっとも良い手はあんなことはしないのは当然として、さり気なく会話に混ぜるべきであった。

まあ、結果だけ見れば華雄はいい方向に成長したことは間違いないのだが、それはそれ、これはこれである。

高順は今とは違う、と気を入れなおす。

驕り高ぶった瞬間に蹴り飛ばしてくれる頼りになる軍師がついている。

本当に彼女に会えたのは幸運であった、と高順は思う。

「邪魔するよ」

そのとき、そんな声と共に指揮所に入ってきた者がいた。

高順は声色から誰かを推測しつつ、そちらを向けば予想通りの人物がいた。

入ってきたのは母であつた。

「彩、どうするんだ？」

「私個人としては全体の指揮を取りたいから、先の選択肢のどちらでもないものを選びたい」

「だろうな。だが、それは……」

母親の言葉を遮るように、高順は頷く。

「臆病者呼ばわりされるでしょうね。私が死んだら代わりに指揮できる輩がいるのって言いたいわ」

「……耳が痛い話だ」

そう言い、彼女は地図が広がっている大机に腰掛ける。

指揮所にあるのは大机と幾つかの調度品、そして高順の寢床。

彼女はここに寝泊まりし、考えつく限りの敵の攻撃方法を思い描いていた。

どんな攻撃がきてもすぐさま対応できるように。

そんな熱心な娘に母——高廉は何気なく尋ねた。

「お前、何を隠している？」

その問いに高順は不思議と動揺しなかった。

先ほど、未来知識についてあれこれ考えていたせいかもしれない。

「私は未来を生き、過去に生まれた」

ただ一言。

それだけで高廉は何となく分かった。

「昔、西から来たヤツが仏教だの、転生がどうたらこうたらだのって言ってたが、それか？」

「それよ」

そうか、と高廉は答え、ついで尋ねた。

「未来はどうだった？」

「今の時代の病気はほとんど治る。でも、貧富の差は相変わらず激しく、問題は山積み」

「……あんまり変わらんのか」

安心したような、それでいて残念そうであった。

「人間が不完全である以上、誰もが満足のいく答えは存在しない。どれが妥当であるかを考え、お互いに妥協することによって社会を回さなければならぬ、と当たり前前の答えが出ているわ」

「……もつと夢を見させてくれてもいいんじゃないか？」

ジト目でそう言ってくる母親に高順は肩を竦めてみせる。

「夢物語を言うよりも、未来も今も変わらないって教えた方が何で今生まれたのか、と後悔せずに済むでしょう？」

それもそうだ、と高廉はうんうんと頷く。

「ま、お前自身の件と指揮の件は分かった。指揮については私から説得しておいてやろう」

そう言い、彼女は立ち上がり、ゆっくりと高順に近づき、そして抱きついた。

それは母が娘にする抱擁ではなく、女が男にするもの。

「ん……汗の匂い……いいわ……」

高順の首筋に顔を埋め、高廉はその匂いを嗅ぎ、舌でぺろぺろと舐め始める。

彼女は高順の背中に回していた両手のうち、右手を自身と高順の体の間に滑りこませ、その股間へと持っていく。

そして、そこにあるものを撫で回す。

「いい男、いい女になったわ。食べ頃ね」

耳元でそう囁いた。

対する高順はジト目で、だが、その顔は期待に染まりつつ答える。

「そうなるようにしたんでしょう？ 自分の娘なのに」

「自分の娘だからこそ、母親が食べたいと思うのよ」

そう答え、さらに高廉は続けた。

「女を、教えてあげるわ……」

終わりの始まり（前書き）

独自設定・解釈あり。

終わりの始まり

「予定通り、か」

万事順調とばかりに高順は呟いた。

砦に籠るではなく、かといって騎馬隊と共にというわけでもない。彼女は少数の護衛とそして大量の伝令と共に戦場全体が見渡せる丘陵の一角に陣取っていた。

無論、いつでも逃げ出せるよう高順も護衛も伝令も全員が馬に乗っている。

母、高廉の説得によりそれが実現していた。

あれから数日が経過しているが、あれ以降、母と肌を重ねたことはない。

たぶん、終わったらたつぷり搾り取られるんだろうなあ、とそんな思いが高順にはあるが、それよりも目の前の戦である。

遊牧民族は視力がとても良い。

これは漁師などにも言えることであるが、利点であった。

故に戦場の細部……とまではいえないが、それでも必要な情報を目視で得ることが十分に可能だ。

「敵さんは定石通りね」

高順の視界には敵は歩兵を全面に押し出し、その後方に弓兵を配置。

援護射撃の下、柵を突破し、砦に張り付く……そういう教科書通りのやり方だろう。

馬騰は野戦の経験こそ豊富なものの、攻城戦の経験は少ない、と聞く。

異民族討伐や賊退治くらいしか今のところ諸侯の軍事的仕事は存在しないので、それも致し方ない。

手堅くいくのは間違いではないが、この場合は間違いだ。

砦に全兵力が籠っているとは限らない。

高順は無言で護衛の1人を見る。

すると彼女は頷き、1つの旗を振る。

青色の旗だ。

砦の櫓からは高順達の様子がよく見える。

櫓にいる者達もまた視力は良い。

すぐさま彼らも同じように青色の旗を振り始めた。

予定通りに行動すべし……そういう合図であった。

砦群は全て柵で囲まれ、抜け道はない。

故に全て旗でもって命を下すのだ。

「敵騎兵は後方で待機中……ふむ」

さすがに騎兵も一緒に突っ込ませるような馬鹿な真似はしてくれないらしい。

そうこうしているうちに聞こえてくる波のような幾つもの声。

恐怖を吹き飛ばす為に叫びながら突撃してくる敵兵のものであり、

万は余裕で超えている。

一番最初の柵に取り付くまではただの徒競走。

だが、取り付いた直後からが地獄の幕開け。

鉄条網こそないが、それでも華雄が稼いだ時間で作られたそれな

りに頑丈な柵は簡単には乗り越えられない。

敵兵の先頭集団が柵に辿り着いた。
瞬間、砦群から放たれる無数の矢。
敵弓兵の援護射撃は残念ながら砦に届かず、途中で失速して丘陵の真ん中辺りに落ちてしまう。

高順はそれを見てほくそ笑む。

経験的に矢を高いところから低いところへ射てば遠くへ飛び、威力もまた上がることが分かるだろう。

そして、柵を突破する為には引っこ抜くか、無理矢理押し倒す、そしてこの時代にあるならば爆弾なりで吹き飛ばす、あるいは燃やす。

これらのどれかをしないとしないということもまたわかるだろう。

弓と柵、その2つが重なるところなる、という見本であった。

この手の陣地は日露戦争でロシア側が使い、その有効性が立証され、戦車が登場するまで甚大な損害を攻撃側にもたらしたやり方だ。機関銃こそないが、それは弓で何とか補える。

バタバタと倒れていく敵兵達。
それを高順は笑みを浮かべ、眺めている。

敵とはいえ人が死んでいる、ということに彼女は忘れているようだ。

まるでゲームのようにしか思えない。

とはいえ、そう思うことで精神の安定を保っているのかもしれない。

そして、それを見た護衛や伝令達は体を震わせた。

勇猛である、ということは彼女達にとって最も良いとされることだ。

対して目の前の少女はこの惨劇を作り出し、なお笑っている。

彼女達は高順を臆病者ではないか、と高廉の説得で感じながらも従った。

だが、全く違った。

臆病者どころなどではない。

彼女達が感じたのは畏怖。

自分達を手足の如く動かし、最も楽に多くの敵を殺していく。

そんなことをする存在を彼女達は知らなかった。

そうこうしているうちに第一線の柵を乗り越えた兵達が出始める。戦友の屍を盾にして。

だが、絶望はそこからだ

1つ突破した後も無数ともいえる柵。

それらを全て突破せねば砦群に辿り着けない。

弓兵の援護は役に立たず、かといって柵を燃やそうとすれば初期ならともかく、味方兵がひしめいていることから危なくて使えない。

馬騰の攻城戦に対する経験不足が如実に現れていた。

「高順殿、一つお聞きしてもよろしいですか？」

唐突に護衛の兵の1人が問いかけた。

高順と同じくらいの背丈だが、歳は2つは違うだろう。

「何か？」

「アレは敵が使った場合、どうやって突破すれば？」

純粹な疑問なのだろう。

高順はその答えに微笑み、答える。

「油を小さな壺に入れて持っていき、柵に掛けて燃やせばいい。もちろん、夜間にね」

いとも簡単な突破法に聞いた方は思わず啞然。

回りの兵達もそんな簡単なのか、と拍子抜けしたようだ。

「あら、馬騰もこのままじゃ拙いと思ったみたいね」

高順の視界には予備隊としてとっておいただろう、歩兵隊が弓兵隊と共に前進するのが見えた。

屍山血河を築いている柵を突破するには大兵力の投入しかない、と馬騰は判断したらしい。

彼女の気持ちはきつと焦りや不安、そして怒りに満ちていることが高順には容易に分かった。

遊牧民族の癖にこんなときだけ騎兵を使わないとは何事か……そんな怒鳴り声が聞こえてきそうだ。

「少しは考えたみたいね」

予備隊のうち、少なくとも数の歩兵達が前面を迂回し、両側面へと移動しているのが見えた。

飛んでくる矢を分散させよう、という魂胆だろう。

とても正しい攻め方だ。

だが、もう遅い。

予備隊の士気は先鋒隊の死に様を見、最低辺にまで落ちていることだろう。

そんな連中が突破できる筈もない。

「……底抜けの馬鹿か、余程の大物か……」

高順は予備隊から視線を戻し、馬騰の本陣へと視線を戻したときに思わず呟いた。

騎兵が集結し始めていた。

鋒矢の陣を幾つもこしらえている。

おそらくその先頭に馬一族がいるのだろう。

「ただちに後方の騎馬隊へ連絡。予定通りに両側面を突け」

そう言いつつ、高順は思う。

伝令はもっと減らしてもよかったかしら、と。

その頃、馬騰は……笑っていた。

騎兵の群の先頭で。

「機嫌が良いようで何より」

そう言うのは葉雄。

彼女率いる500余りの騎兵は馬騰の本隊と共に突撃することになったのだ。

皆目掛けて。

「ああ、そうさ。ここまで無様を晒したのは人生で初めてだ。笑うしかない」

「しかし、柵目掛けて突撃とは……」

口には出さず、その目で無謀だ、と馬騰に告げた。

「我ら涼州騎兵は柵なんぞ飛び越えてみせる。先に展開した兵は死体でないなら横に退くだろう」

そう言い、もっとも、と馬騰は続ける。

「あそこの地獄で生き残っている兵がいるならな」

彼女が指したのは皆群正面。

予備隊を両側面に回したことで多少は降り注ぐ矢の数が減ったものの、それでも多くが降り注ぎ、今この瞬間にも死体を作り出している。

このままやっても、いずれ突破できるだろう。
だが、その代価は数万にも及ぶ兵の命。

葉雄はそれに答えず、馬騰は死にたがっていると直感した。経験不足だから、というのは戦場では通用しない。

上の命令を信じ、真っ先に死ぬのは下っ端だ。

それを彼女が分からない筈がない。

故に定石通りに攻めた結果がこれだ。

彼女は自分の無能さに打ちひしがれている。

葉雄は同情を抱いた。

馬騰は決して無能などではない。

その武は高みにあり、またその指揮能力は天下逸品。

だが、らしくない。

幾ら負け戦になろうとも、馬騰は決してこんな無謀なことはいらないだろう。

少しやりすぎたかな、と葉雄は思わずにいられない。

彼女達が徹底的に後方を叩いた結果が馬騰への精神的重しとなっ

たのは言うまでもない。

全て普通の会戦でケリをつけてきた馬騰にとって、後方部隊だけを叩かれるというのは初めての体験なのだろう。

それが正常な思考を奪い去り、今の様となっている。

「母様……」

そんな母親に何か言いたげな馬超。

だが、言葉は出ない。

葉雄は今ここで殺してやるべきか、と逡巡する。

少なくともそうすれば被害は両軍共に最小限に食い止められるだろう。

勝って当たり前と思われていた20万という兵を動員した異民族相手の戦。

不安要素はあったものの、輜重隊や伝令を徹底的に叩かれ、兵力が激減するまでは馬騰以下全ての諸侯が勝利を疑わなかっただろう。それが今、敗北となって終わろうとしている。

責任やら何やら、朝廷から色々問われることになるだろうが、馬騰はそんなことよりも、いたずらに兵を失ったこと、その一点に押し潰されようとしている。

葉雄は先ほどの殺すか否かという考えを撤回し、思った。

こんなところで失うには余りにも惜しい、と。

「馬寿成殿、1つ約束して頂きたい」

葉雄の言葉に馬騰は首を僅かに傾げる。

「この戦が終わったら、ある人物に会って頂きたい。その為にあなたは死ぬべきではない」

その言葉に馬騰は力無く笑みを浮かべる。

「ああ……私が生きていたら会ってやろう」

ならば安心です、と返しつつ葉雄はすかさず馬騰の鳩尾に拳を叩き込んだ。

普段の馬騰ならいざ知らず、彼女は弱り切った状態であったのでそれをまともに受け、昏倒してしまった。

まさかの凶行に馬超は何も反応できない。
そこへ葉雄は畳み掛ける。

「孟起、寿成殿は疲労により倒れてしまった。今、この瞬間に全軍の指揮権はお前に移った。さあ、どうする？」

その言葉にハツとし、半ば反射的に馬超は叫んだ。

「攻撃中止！ 攻撃中止！ 白旗を持たせた使者を送る！ 今回の戦、我々の負けだ！」

兵達も諸侯達も敗北を感じ取っていたのだろう。

抗議の声はどこからも上がらない。

馬超の叫びを聞いた伝令達は大慌てで、柵を突破しようとしている歩兵隊や弓兵隊へ走っていく。

あの地獄から一刻も早く救い出してやらねばならない。

そういう使命感を彼らは帯びていた。

「降伏宣言、確かに受け取った」

そして、葉雄はそう言った。

馬超は思わず間の抜けた声を出す。

そんな彼女に葉雄は不敵に微笑み、竹の水筒を取り出し、その栓を抜いて頭に掛けた。

みるみる落ちていく黒色。

代わりに現れたのは銀色。

「え、えええ!？」

幽霊でも見たかのように叫んだ馬超。

それは彼女だけに留まらず、周囲にいた兵達も同じこと。

「我が名は華雄。そちらの使者と共に私が行こう。血気盛んな連中が多いからな」

そう言い、ウィンクしてみせる華雄であった。

官軍と羌族との戦いは幕を閉じた。

10倍以上の数を誇った官軍の、まさかの敗北によって。

馬騰は馬超と共に羌族との和平会議に臨み、そこで高順と出会うことになる。

2人は高順が後方に騎兵を温存し、両側面を突くよう指示していたことを知った時、顔を青くした。

あのまま突撃していたら、全滅は免れなかった、と。

そして、2人の名がそれぞれの功績と共に大陸全土に轟くことと

なつた。

1人は華雄。

僅かな手勢と共に官軍を撃破する直接的要因となつた知勇兼備の将。

もう1人は高順。

羌族の指揮を取り、膨大な損害を官軍に強いた防御戦の名手。

また、この戦により力関係の変化が幾つもあった。

それは異民族を撃退できなかったことによる、漢王朝の権威の大幅な低下。

和平でもって羌族は漢に手出ししない、と約束したものの、それは敗者がそう言ったのか、勝者がそう言ったのかで全く意味が違ってくる。

今回の場合、いつでも叩き潰せるが、敢えて手出しをしない、とそういう意味であつた。

対して、羌族勝利の報を知り、烏丸や鮮卑、匈奴といった他の異民族が活気づいた。

ますます彼らによる侵略は激しさを増していく。

異民族達はお互いに険悪な関係にあるが、それでも今回の勝利は喜ばしいものであつた。

ちなみに、彼らですらも華雄と高順は好意的に受け止められ、戦勝祝いに、と馬などが羌族に贈られた。

そして、漢王朝の権威低下はその配下である諸侯にも影響が及び、力ある諸侯達は来るべき戦乱に備え、人材確保や経済基盤の安定に奔走し始めたのだつた。

暗躍（前書き）

独自設定・解釈あり。
微工口あり。

暗躍

「未だに信じられへんけど……勝ってもうたな」

「みたいね」

呆れた張遼に対し、だから何、と言いたげな賈？。

実に対照的な2人である。

「勝ちに行く顔ちゆうたけど、いや、まさか……」

「それ、前も言ってたわね」

「仕方ないやろ。にしても、もう2週間も経ってるっちゅうのに街はお通夜やな」

「そりゃそうでしょうね。勝ったのは官軍でなく、異民族だし」

そう言う2人の視界に広がるのは暗い顔で歩く人々。

時々、ひそひそと会話している者達もいるが、その内容は聞くだけで溜息を吐きたくなるものばかり。

異民族に滅ぼされるとか華雄や高順が殺しに来る、とか。

被害妄想甚だしい。

ここは冀州、袁紹の膝元の街。

張遼、賈？、そして董卓の3人は袁家に客将として仕えていた。

客将で、しかも必要なことをやったらさっさと抜けることにしているのも、本気で業務に励むわけにもいかない。

もっとも余りにも酷すぎたので賈？は並程度に戻してやろうとそれなりに頑張っていたりする。

勿論、それは自分にとってちょうどいい経験となる為、というものもある。

さて、賈？にとっては袁紹を手玉に取るのは朝飯前のこと。

田豊や沮授といった元々袁家に仕え、それなりに使える連中が冷遇され、また郭図などの腰巾着連中が耳障りの良いことしか言わないのに対し、賈？はズバズバと自分の意見を言い、それを袁紹に受け入れさせていた。

そこがただの軍師と賈？の差である。

本物はどんな上司であろうと、自分の進言を受け入れさせる。

勿論、信頼され、信用されるのが最上であることは言うまでもない。

「詠さん、こんなところにいらしたんですの！」

特徴的な高笑いと共に聞こえてきたそんな声。

万年花畑、と陰口を叩く輩も多いが、それでもどこか憎めない。

それが袁本初であつた。

そして、賈？が見た人間の中でその憎めなさとどんなときでも笑ってみせる馬鹿っばさにより中々に好ましい部類に入る。

それも真名を呼び合う程に。

「麗羽殿、そのこんなところに2馬鹿もつけずに何か？」

2馬鹿と言っているが、それは貶しているような声色ではなく、親しみを込めたものである。

2馬鹿とは言うまでもなく顔良と文醜。

賈？にとって愛すべき袁家の2馬鹿なのであつた。

色々な意味で肝がでかい賈？にさしもの張遼も肩を竦めるばかり。

「斗詩さんと猪々子さんはあなたのお使いであつちこつち行ってい

るんじゃないありませんこと?」

「ああ、そういえばそうでした」

烏丸への使者として送り出したんだっけ、と賈?は思い出した。何分、袁家が衰退しようが繁栄しようがどっちでもいいので結構にいい加減である。

しかし、賈?は袁紹の次の言葉でその目を鋭くすることとなる。

「私としては詠さんにそろそろお目当ての事柄をお話していただきたいと思ひまして」

「……麗羽殿、ここではアレですから……」

「ええ、よろしくてよ。張遼さんも一緒にどうぞ。あなた達は私に仕えているんじゃないんでしょう」

張遼もその言葉にこりや役者やなあ、と思わずにいらなかった。

袁紹の城は極めて大きく、そして荘厳だ。

元々家柄に相応しく派手であったのが、袁紹の趣味により更に大変な状態になっている。

賈?曰く、観光名所にして料金取った方が儲かるんじゃない、と言っくらいに。

その事を聞いた袁紹が庶人に私の家を見せてあげるのですわ、と入場料を取り、一般開放したのは言うまでもない。

ともあれ、そんな派手な城にある謁見の間……ではなく、普通の応接間で彼女達は向き合っていた。

無論、賈？と張遼だけでなく、そこには董卓の姿も。

そして、人払いが済むなり、袁紹はゆっくりと口を開く。

「さて、私のことを皆さん馬鹿だ馬鹿だと思っていらっしゃるようですが……本当にそうなのか、と疑いもしないなんてお馬鹿です」と

そう言い、高笑い。

発言自体はもっともなのだが、その高笑いで台無しである。

「詠さん。あなたのおかげで袁家に巢食うお馬鹿さん達を皆、始末できましたわ。この袁本初、全くあなたの腕に感服せざるを得ません」

そう言い、袁紹は深々と頭を下げた。

張遼も董卓も信じられない、といった顔で彼女を見つめている中、唯一人、賈？だけは平然としていた。

「私はただあなたから名家に相応しくない行いをしている輩を見つけ出せ、と言われたに過ぎません」

「ええ、ええ、どうにも田豊さんや沮授さん、郭図さんなどでは少々力不足で……」

賈？は内心溜息を吐いた。

つまり、全ては袁紹達の演技だったのだ。

使える田豊や沮授を冷遇し、耳障りの良いことを言わせている郭図を筆頭に厚遇する。

そして、賄賂などをしている連中をあぶり出す……

長く続く名家であればあるほど、その甘い汁は多く、それに集る輩も多い。

それら全てをあぶり出す為には一時的な泥を被っても、馬鹿を演じなければならない。

賈？としても致し方ない部分はある。

客将となる前に袁紹について情報収集を街で行ったのだが、誰も彼も馬鹿だ馬鹿だ、と言い。

そして賈？も実際に会って馬鹿だ、と判断してしまった。

しかし、それは賈？の誇りが許さない。

今回は命に関わるようなものではなかったが、それでも高順の期待を裏切ったかのように悔しかった。

「さて、詠さん。何を目当てにしている？ ゴミ掃除をお手伝いしていただいたので、その御礼にしっかりと秘密も守りますわ」

賈？は深呼吸一つし、ゆっくりと告げる。

「我が主は高順。我らの望みは宦官の排除」

その一言で袁紹の目がずっと細くなった。

「それは中々に面白いことですわね……異民族の方が宦官を倒した

がるとは……」

「尊皇討奸、奸賊討つべし……とのことです」

「奸賊は漢族でなくて？」

袁紹の軽い反撃に賈？は笑みを浮かべる。

「私の主は漢族より嫌われています。漢族をそうすることもできません
でしょう」

ですが、と賈？は続ける。

「この賈文和がそうはさせません。彼女の夢に庶人の幸福をねじ込んでみせましょう」

これ以上ない程の説得力であった。

袁紹は深く、深く溜息を吐く。

「あなたのような方を配下に行っているなんて……とても羨ましい」

袁紹と賈？が会話している最中、張遼と董卓はウチらいる意味あるんかな、意味ないですよ、とそんなことをひそひそと話していた。

袁紹と賈？だけの世界であって、それ以外はただの風景と化していることは間違いない。

「お望みは？」

「我が主は太学へ行きたがっています。何進將軍への取り次ぎと後ろ盾を」

「あら、随分と変わってらっしゃる方なのね」

袁紹の声にはただの戦馬鹿ではないのか、とそういう意図が隠れていた。

それを正確に読み取った賈？は不敵な笑みを浮かべ、返す。

「主は武官が政治に口を出すべからず、とそう言っております」

「道理ですわ。馬鹿に限って色々なところに口を出したがるのは困りものです」

「無論、今回の一件は政治に関わることですし、その後も抜けることはできないでしょう」

「では、その言葉と矛盾するのではなくて？」

「ええ、矛盾しております。故に宦官排除は一種の売り込みなのです。負け犬根性は私が許しませんが、最終的にどこかの諸侯に取り込まれてしまうことがあるかもしれない。その際の方針とlotteくだされば……」

なるほど、と袁紹は頷きつつ、ついである単語について問いかける。

「売り込みとは？」

「我が主、高順はどれだけの諸侯が自分にどれだけの高値をつけるか……それを確認したい、と」

袁紹は目を瞬かせる。

それだけの為に宦官打倒なんぞ……考えが極端すぎる。だが、それは彼女と通じるものがある。

「……高順殿は派手好きなのですね」

「派手か地味かで言えば派手になります」

「仲良くなれそうですわ」

その言葉に賈？は高順と袁紹を横に並べてみた。
そして、違和感がまるでないことに気がついた。

「ともあれ、あなた方は袁家がその身分を保障致しましょう。高順殿の件についても了解致しましたわ」

袁紹の言葉に賈？はただ頭を下げる。

それにつられ、張遼と董卓も慌てて頭を下げた。

その様子に笑ってしまう袁紹。

「ああ、それと……宦官を倒した後は私の好き勝手にしてよろしくて？」

さり気なく宮中での権力を得ようとねじ込んできた袁紹。
しかし、その程度では賈？は揺るがない。

「并州をくだされば後は如何ようにも」

さらり、と賈？は返した。

并州といえば冀州の西に位置し、北方異民族の侵入に悩まされている地域だ。

冀州の北は幽州であり、海に近い側から順に青州、？州、司州となる。

さすがの袁紹も苦笑する。

并州騎兵の勇猛さは涼州騎兵に勝るとも劣らない。

「幽州では駄目ですか？」

その問いに賈？は笑みで答える。

幽州は袁紹のいる冀州を北から襲える位置にあり、そういった意味では極めて重要だ。

だが、遼西郡以西はともかく、遼東郡以東は未開の地であり、生産力などは極めて低い。

おまけに幽州は北方異民族にやはり侵入を受けている。

「ですが、并州はさすがに無理ですわ。我が袁家に対し、蓋をしたいのですの？」

「いいえ、そうではありません。ですが、宦官を実際に斬るのは我が主なのです。少数でもって都の中枢を襲われる……これがどれほどの衝撃か、あなたはお分かりですか？」

そう言われてしまえば袁紹は黙らざるを得ない。

その様子に賈？は内心ほくそ笑みつつ、告げる。

「ですが、我々は袁家と敵対したくはありません。故にここは一つ、折れることに致しましょう」

「では……？」

「幽州をくだされば。ただし、必要な金銭や物資を無償で提供していただきたい。またいきなり刺史は反乱を頻発するので、最初はどこか適当なところの太守に……」

「それくらいでしたら幾らでも」

そう言い、袁紹は高笑い。

袁家の財政はそれ程までにとんでもなかった。

一見すれば貧乏籤を取えて引いたように見えるが、未来の知識というものが備わっていればまさにやりたい放題できる土地なのであ

る。

既得権益が少ないことから抵抗する輩は少ない。

州財政は万年赤字だろうが、そこは袁家からの援助で補う。

北方異民族に関しては高順の名が彼らにも広まっているので抑止力として期待できる。

元々の人口が少なくとも、そこは発展すればどうにでもできる。

「では文書に……」

「わかりましたわ。ですが、報酬は成功した後に……」

「心得ています」

こうして高順の知らぬところでほとんどん拍子に宦官打倒がなれば幽州の太守、そしてその後は刺史となることが決定してしまった。

戦場に散らかった死体処理などが終わり、馬騰を始めとした連合軍が引き上げを開始したのはつい昨日のこと。

戦が終わってもう2週間である。

なお、馬騰は高順に落ち着いたら自分のところに来るように、と約束させられていた。

それは別に彼女としては一向に構わない。

和平会議の後の宴会で馬騰は勝ち負けは別として異常な緊張から解放され、どうにかマトモな精神状態となっていたからだ。

まさか自分の領地で袋叩きにする筈もない。

そして、皆撤去の指揮を取る高順に華雄は声を掛けた。

高順としても華雄に言わねばならないことがあったのでそれはちようどよかった。

適当な天幕に入り、2人きりになると華雄は真っ直ぐに高順の瞳を見つめる。

「私はまず最初に夜襲で董君雅を討った」

それを高順が予期していなかった、といえは嘘になる。

顔がバレてしまえば本隊に潜り込めない。

ならば、顔を知っている者を先に始末するのは実に理にかなっている。

不思議と高順に悲しみはなかった。

ただ、何ともいえない寂寥感が彼女を襲い、耐えられずに華雄に抱きついた。

それを彼女は優しく受け止め、彼女の背中に手を回す。

そして、更に追い打ちを掛けるよう、華雄は告げる。

それは高順の母から頼まれたことだ。

それは娘に死を教えて欲しい、ということ。

「お前の指揮は実に見事だ。万全準備を整え、お前は見ていただけで終わった。これ以上無い程の戦上手だろう。お前は1万の敵兵をお前の指揮で殺し、あの地獄を作り上げたのだ」

攻め寄せた敵兵のうち、死者は1万余り、負傷者は倍の数に達する。

華雄の言葉は高順の心にあつた僅かな傷に刃を突き立て、さらにそこに塩を摺り込む行為だ。

だが、彼女は容赦しない。

命が軽い時代だからこそ、命の重みを知らなくてはならないのだ。勿論、奪った命を背負えとかそういった高説を垂れるような華雄ではない。

しかし、高順は涙を流さず、ただ華雄を強く抱きしめた。

それから半刻程の時間が経過し、高順は呟くように言った。

「嵐、2年くらい前、知らないからとあなたを馬鹿にして侮辱した。ごめんなさい」

「……？ 何かあったか？」

返ってきた答えに高順は溜息を吐きたくなった。

その彼女の態度に華雄は記憶を漁り、ああ、と声を上げた。

「そういえばそんなこともあったな。あれのおかげで私は頑張れた

ものだから、気にするな」

ぼんぼん、と高順の背中を叩く。

「で、お前は どうするんだ？ 人の死に対して」

「…… どうしようもできない。敵は殺す、としか言えない」

その言葉にもしや、と華雄は問いかける。

「お前、もしかして自分の手で殺したことがないのか？」

「過去に賊を火計でやっ takurai」

「ああ、だから実感が沸かないのか……」

納得したような華雄に高順は僅かに頷く。

やがて華雄はよし、と声を上げると高順を僅かに離し、その両肩を持ち、まっすぐにその瞳を見据えた。

「私はお前の剣となろう。敵を直接殺すのは私、お前は全体を指揮し、私を使え。もし、お前が罪の意識に苛まれてもしたら私が傍にいよう」

凜とした表情の華雄。

それはまさしく誓いと言っている。

母以外で唯一、真名を許した華雄にとって高順はそれだけに特別であり、そうするに値する者であった。

対する高順は言葉は不要と華雄の視線を真っ向から受け、ゆっくりと頷く。

「この後、お前は どうするんだ？」

「馬寿成殿のところに寄った後、旅に出る」
「決まりだ。私も当然ついていくぞ」

うんうん、と頷く華雄。

そんな彼女に高順は意を決して告げる。

「嵐、私は宦官を討つ」

暫しの間。

華雄は目をパチクリとさせる。

「……宦官？」

「尊皇討奸、奸賊討つべし」

「いや……何で？」

困惑顔の華雄に高順はただ告げる。

「少なくとも平和の為じゃないことは確かね」

単なる宮中の権力闘争へ割って入るだけであり、その結果として得られるご褒美目当てである。

勿論、高順にとつては自分は漢族を毛嫌いしているわけではない、とそういうアピールでもある。

そうすることで漢族にとつてのイメージを良くし、その後の戦乱の時代に有利に働くようする。

例え敗れたとしても英雄達から賞賛され、歓呼の声で迎えられる……そういう夢が彼女にはあった。

「自分の為か。いいぞ。そういう目的の方が余程信用できる。正義だ平和だ民の為だどうのこうのは曖昧過ぎてよく分からね」

そう言い、華雄は利き手を差し出した。
高順はその手を両手で握る。

「私はお前のことをよく考える。友として、好敵手として、女として。共にいた期間は短いのに」

「嫌かしら？」

「いや、むしろ大歓迎さ」

お互いに何も言わずに目を閉じ、ゆつくりと唇を重ね合わせた。
触れる感触は柔らかく、ほのかに香るお互いの匂い。
どちらからともなく、口を開きその舌を絡め合わせ始める。

華雄は一度、口を話し、高順の耳元で普段の彼女なら到底出さないであろう甘い声で囁く。

「私は馬に乗るのは大得意だが……男に乗るのは初めてなんだ。下手でも許して欲しい」

「私が両性具有って知ってたの？」

「ああ、お前の母に聞いている」

そして、華雄は再び自分の唇を高順に重ねた。
再び開始される舌の絡め合い。

やがて、天幕に響く水音はやがて嬌声へと変わっていった。

忠誠こそ彼女らの名譽（前書き）

独自設定・解釈あり。

文中の詩はJASRACにおいて無信託です。

忠誠こそ彼女らの名譽

袁紹は泣いていた。

零れ落ちる涙はとめどなく、床へと滴り落ちる。

たまらなくなつたのか、その身を折つてしまう。

彼女の前にいるのはただ賈？1人。

泣く袁紹を賈？は高順の詩が予想以上の効果を發揮し、嬉しい誤算とばかりに内心ほくそ笑んでいた。

袁家はまさしく漢王朝の忠臣であり、重臣の家系である。

代々の当主は勿論、袁紹も漢あつてこそこの袁家である、と重々承知している。

故に宦官の専横に対抗する為に何進と手を結び、これを排除せんと日々暗躍している。

だからこそ、高順の詩。

「これを……書いた方は……」

涙を隠そうともせずに袁紹は顔を上げ、尋ねる。

「我が主です。そして、その詩の題名は維新」

「維新……詩経からですか……」

袁紹は心底感心していた。

まさか異民族の高順が知っているとは思ひも寄らず、袁紹の中で高順への好感度は急上昇だ。

この時代において、学問を修めるといっただけで知識人であり、また上流階級の者と交流するには必須であった。

「主はその詩に共感できる者こそ真の志士と仰っておりました」

賈？はさらりとそう告げ、袁紹の心を煽る。

実際に高順はそうは言っていないのだが、それらしいことは言っているのだから嘘は言っていない。

袁紹はゆつくりとその詩を読み上げる。

汨羅の淵に波騒ぎ 巫山の雲は乱れ飛ぶ 混濁の世に我立てば
義憤に燃えて血潮湧く

権門上に傲れども 国を憂うる誠なし 宦官富を誇れども 社稷
を思う心なし

ああ人栄えて国滅ぶ 盲たる民世に踊る 治乱興亡夢に似て 世
は一局の碁なりけり

光和維新の春の空 正義に結ぶ丈夫が 胸裡百万兵足りて 散る
や万朶の桜花

古びし死骸乗り越えて 雲漂揺の身は一つ 国を憂いて立つから
は 丈夫の歌なからめや

天の怒りか地の声か そもただならぬ響きあり 民永劫の眠りよ
り 醒めよ御国の朝ぼらけ

見よ九天の雲は垂れ 四海の波は雄叫びて 革新の時至りぬと吹
くや 御国の夕嵐

ああうらぶれし天地の 迷いの道を人はゆく 栄華を誇る塵の世
に 誰が高樓の眺めぞや

功名なにか夢の跡 消えざるものはただ誠 人生意気に感じては
成否を誰かあげつらう
やめよ離騷の一悲曲 悲歌慷慨の日は去りぬ 我らが剣今こそは
廓清の血に踊るかな

朗々と読み上げ、袁紹は再び感動に身を震わせつつ、口を開く。

「桜を用いたところが巧いと思いますわ。あまり人気の無い花ですけど、ぱつと花を咲かせた後、散っていく……その散り際の潔さ、儚さ……」

先の詩を要約すれば、荒廃した国や飢える民を憂い、志士として国の変革の為に死を覚悟して取り組む。

それは漢の忠臣、袁紹の心をこれ以上ないほどにくすぐるもの。

高順が聞いたらうまく繋ぎ合わせた三上卓に言ってくれ、と答えるだろう。

元々これは昭和維新の歌であり、これを作った三上卓は土井晩翠や大川周明の詩集から抜粋し、繋ぎ合わせただけだったりする。

現代風に言えば有名歌手の歌からいい歌詞をパクって繋ぎ合わせてそれを新曲として発表したに過ぎない。

とはいえ、まさか2世紀初頭にそういった元ネタとなった人物達がいるわけもなく、また著作権でうるさい某団体が時空を超えて追いかけてくるなんてこともない。

というよりか、この歌自体が、その某団体に著作権を預けていなかったりする。

ある種の開き直りと共に高順は若干変えて賈？に渡したのである。これも未来知識的な反則と言えるだろう。

1600年以上先、彼らが売れなくなってしまいかもしれないが、そんな遙かな未来よりも10年後の未来の方が高順にとっては重要だ。

未来を生き、かつ事情を知っている人間からすれば人の禪で相撲を取る恥知らずとかそういうことを言われそうであるが、そこらも覚悟の上であつた。

「主は確かに売り込みの為であり、漢の行く末も、庶人の幸福も今は考えておりません」

賈？はですが、と続ける。

「このような詩を書くということは、心の奥底でそう思っている可能性もあります」

「ええ、ええ……それは本当でしょう」

肯定する袁紹だが、賈？は可能性としか言っていない。

実際にそうなのは高順に聞いてみなければどうなのかは分からないが、曹孟徳に仕えたいというあたり、きっと漢をぶち壊したいのだろうということは予想がつく。

未来知識の通りになれば曹孟徳の行く道は霸道。それは漢とは両立できないもの。

そして、腐って崩れそうな家は直すよりも壊して新たに建て直した方が早く、安全なのである。

賈？が何故、ここでこの手札を使つたか。

それは袁紹を心理的に高順へ傾けてしまおうというものに他ならない。

つまり、高順は極めて好ましい相手である、と彼女に印象付けることで将来かかるであろう膨大な資金と物資を渋らせることなく供出させる為だ。

確かに袁紹は先の密約で必要な物資や資金の無償提供を約束した。だが、それはあくまで彼女の考えられる常識の範囲である。

袁家の金は確かに膨大と言つていいが、賈？が改めて試算したところ、幽州全土を発展させる為には資金だけで1000万単位で掛かり、最高で億を超えるだけの額となる。

参考までに三公の一つである司徒がだいたい500万銭、最高位である太尉を1億銭で曹操の父である曹嵩が買つている。

さすがの袁家も普通にそれだけの金を出してしまえば傾くとまではいかないが、若干貧しい思いをすることは間違いない。

袁紹も100万程度なら出すだろうが、それほどまでとなると非常識、と渋ってしまうだろう。

だが、出させなければならぬし、そうさせるだけの資金的余裕が袁家にはある。

それが賈？が行つた名家に相応しくない行いをしていた連中の排除だ。

元々、彼女が袁紹に言われて行つたこと並程度に戻す為の仕事の一つであるが、賈？は幽州を押し付けられることを予期していた。

地政学的には極めて重要な位置であるが、その内情は土地が広い割に見返りが少なく旨味はあまりない。

袁紹が北方なんぞ放つて、さつさと南下政策を取りたいことが賣？でなくとも分かる。

しかし、并州の騎兵は袁紹としても欲しいところ。

ならばこそ、一見して土地が広く、かつ戦略的に冀州を背後から襲える重要な位置にある幽州に白羽の矢が立つ。

彼女が袁紹に幽州はどうか、と言われたときの笑みは予想通りになりつつあった状況への笑みであった。

そして、袁家の甘い汁を代々吸っていた連中が溜め込んでいた財はその資金を抽出できる程。

つまり、その財をそのまま高順に渡すだけであって、袁家は得もしなければ損もしていないことになる。

だが、そんな大金を他人にぼん、と渡すのは余程の大物か、余程の馬鹿のどちらかしかない。

袁紹はどちらでもない故に、そうさせる為には彼女の心情をこれ以上ない程に高順へ好意的なようにしておかなければならなかった。

「我が主の動向を掴め次第、こちらに来るよう伝えます」

「ええ、是非に。高順殿と会えるときを楽しみにしておりますわ」

袁紹の言葉に賣？は頷きつつ、これで高順が両性具有であることを明かさなくても良いということに安堵した。

そんなことを明かさずとも、袁紹は高順に協力するだろうことはもはや明白であった。

戦地から帰ってきて以来、馬騰は気が重かった。

負けた、ということ自体は良くはないが、そこまで彼女の気を落ち込ませるという原因ではない。

ただ問題は様々な風評被害だ。

馬騰はこれまで異民族に対し、勝利を重ねてきた。

敵よりも少ない兵力で敵を打ち破ったことも多い。

またその個人の武も天下に轟く程。

しかし、今回はどうだろうか。

戦鬪の推移を詳しく知らない者から見れば敵の10倍以上の兵力を率いたにも関わらず、甚大な被害を出し、負けて帰ってきた……という風にしか見えない。

勿論、生きて返ってきた兵士達も多い。

特に参加した諸侯のうち、10名は戦場にたどり着くことなく脱落しており、彼らの率いていた兵達は無傷で帰ってきている。

しかし、彼らではそういった風評被害を食い止めようにも食い止められなかった。

また武官達とはかくとして今回の討伐は兵糧確保や武具確保でかなりの予算が使われており、文官達はどうかあちこちから必要経費を調達していた。

朝廷からの意向であるならば仕方がない、と。

蓋を開けてみれば討伐失敗で彼らの努力は水の泡と消えた。

さすがにこれではやりきれず、自身の主へ陰口の一つも叩きたくなるもの。

もし馬騰が政にも優れ、善政を敷いていればあるいは民は彼女をかばったかもしれない。

だが、彼女は残念ながら武人であり、内政に関しては文官達の手を借り、どうにか民が飢えないようにする程度で精一杯だった。

それでもこの時代なら凄いいえるが、可もなく不可もない政ならば人々の記憶に残らない。

またそれらに加え、朝廷からの命令がより馬騰を窮地に立たせた。馬騰は確かにこれまで朝廷に仕え、異民族討伐で功績を上げてきた。

しかし、今回の討伐失敗は朝廷の権威を大きく傷つけた。役人達から見れば20万対2万でどうやって負けるのか、とそういう認識である。

現場と上層部の認識乖離は世の常。

故に彼らは馬騰を太守の地位や朝廷の將軍としての地位を奪い、それらを1ヶ月後、売りに出すことに決めた。

西涼の纏め役の彼女をそうすることは反発を招くが、中央からすればそれを補って余りある程の大失態であった。

馬騰の評価は多くの民の間でも、そして朝廷の中でも低下し、臣下達の間でも低下する。

唯一の救いは馬超と馬岱の存在だ。

彼女達は馬騰を励まし、精神的重圧を軽減してくれるが、それでも限界があった。

身内だけの祝勝会やら母親との諸々のことを片付けた高順と華雄が馬騰を尋ねたのはそんなとき。

2人に対し馬騰はまるで10年来の友人を迎えるかのように親しげであつた。

やってきた彼女達は応接間に通された。

応接間には既に馬超と見慣れぬ幼女があり、彼女達はどちらも然程緊張した様子ではない。

馬超は既に先の和平会議で馬騰と共に自己紹介を済ませており、幼女の方は生来の性格故か、ただ興味津々であつた。そんな幼女を馬騰は紹介する。

「あのときはいなかったが、この子は馬岱だ」

「おば様、たんぽぽはちゃんと自分で言えるもん！」

そう言つて頬を膨らませる幼女——馬岱に彼女以外の全員が微笑ましい視線を投げかける。

その視線を気にせず、馬岱は咳払い一つ。

「姓は馬、名は岱、字は伯瞻です！」

元氣の良い挨拶は華雄にとって点数は高かつた。

「私は華雄だ。中々いい子だな」

華雄の言葉にえへへ、と笑う馬岱。

「私は高順よ。馬伯瞻殿は先の戦に？」

「呼び捨てで、あと馬岱でいいよ……いい、です」

砕けた口調で言つて、姉役の馬超が物凄い視線で睨んだ為に体を固くしながら言い直す馬岱に高順も華雄も笑つてしまう。

「で、今日呼んだのは他でもない……先の宴会では色々とお互いに囲まれて碌に話もできなかった」

「戦争話について？」

「それもあるが、これからお前達がどうするか個人的な興味がまず先だな」

馬騰の言葉に華雄は高順へ視線を向け、僅かに頷く。

全て任せた——そういう意味であつた。

高順もまた心得た、と頷き口を開く。

「形式的だけでも、華雄は私の配下となっているの。で、このあとは旅に出る予定」

砕けた口調で話す高順だが、彼女と華雄は先の和平会議のとき、馬騰や馬超が砕けた口調でいい、と言つていたので問題はない。

「旅か。アテはあるのか？」

「一応は。あちこちで才能ある人材を見つけてつ、ちょっとやることがあるの」

「……新たな勢力を？」

馬騰は目を細め、問いかける。

「いいえ。私がやることは漢王朝の病巣を取り除くことよ」

その言葉に馬騰、そして馬超に緊張が走った。

馬岱は何のことかわからないようで首を傾げている。

そんな彼女に心惹かれたのか、華雄はおいでおいで、と手招きして招き寄せるとその頭を優しく撫でてやる。

馬岱は撫でられて嬉しそうだ。

「宦官をやるのか……？」

馬超は僅かに震える声で問いかけた。

高順は何も言わず、ただ笑みを浮かべるだけだ。

「漢の臣である私の前でそういう話をしていいのか？」

馬騰は平然と問いかける。

その問いに高順は肩を竦めてみせる。

「もう漢に忠義立てする意味はないんじゃない？ よろしくないことになっているのは街で民の噂を聞けばすぐに分かるわ」

その問いに馬騰は押し黙り、馬超は何か言いたげな顔だが、言葉は出てこない。

「寿成殿、2人で話しましょうか」

会話の主導権を完全に握った高順は内心ほくそ笑みつつ、そう誘った。

馬騰の要望で彼女の執務室へとやってきた。

そして、そこで高順は噂が本当であることを確信する。

執務室はあまりに綺麗過ぎたのだ。

まるでこれから引越します、とでもいうように。

「気づいただろう？」

馬騰は自嘲気味な笑みを浮かべている。

「私はあと半月もすれば太守でも將軍でも無くなる。ただの武人……でもないな。私の武はお前に通じなかった……否、そういう機会さえも無かった」

何故だ、と馬騰は問うた。

その目は剣呑な光を放っており、先程の友好的な雰囲気は皆無。

高順はその気迫に内心恐怖を感じつつも気丈な態度で告げた。

「私にとって自分の武勇とかそういうのはどうでもいいの。戦争に勝てばそんなものを上回るものが手に入る。負ければ幾ら個人の武勇が優れていようと敗軍の将よ」

馬騰はその言葉に高順の胸ぐらを掴んだ。
そして、思いつき顔を近づける。

「私は……お前に負けたのか……」

馬騰からすればつと出の小娘にしてやられたのだ。
自分のこれまでの人生全てを否定されたかのように感じてもおかしくはない。

無論、彼女としても頭では理解している。

華雄の働きや高順の事前準備や統率は見事であった、と。

だが、負けた代償が余りにも大きすぎた。

太守や將軍の地位は馬騰にとつてはただの飾りに過ぎない。
地位や自分の名誉よりも、彼女は自分のせいで漢の威信を大きく傷つけ、いらぬ不安を植えつけてしまったこと、そして膨大な兵を無駄死にさせたことを何よりも悔い、自分を許せないでいる。

そんな彼女を見つめつつ、高順は口を開く。

「私はただ知っていただけ。私の知ることをあなたが知ればきっとあなたはもつと上にいく」

でも、と続ける。

「あなたは楽になりたい、と願っている。ならばこそ」

高順はすつと壁際に立て掛けてある馬騰の槍を指し示した。
馬騰はその言葉の意味を正確に悟り、ゆっくりと胸ぐらを離し、

槍を手取る。

そして、その刃の根元部分を手近なところにあつた手ぬぐいで巻き、床に両膝をつけた。

彼女は手ぬぐいを巻いた部分を両手で握り、両目を強く閉じた。

穂先は馬騰の首筋に当たり、冷たい感触を彼女に伝える。

「名誉の死として看取ってあげましょう。それがせめてもの情け」

高順の言葉に馬騰は息を吸い込む。

彼女はゆっくりと槍を首へと突き刺そうと動かし――

からん、という音が部屋に木霊した。

槍を落とした馬騰は肩で息をし、そして自分の震える体をかき抱き、その頭を垂れる。

「死ぬのが怖い……」

対する高順はというと……どついう言葉を掛けるべきか迷ってい

た。

死を選べば自分のトラウマとなること確定だが、少なくとも馬騰を解放してやれる。

それが高順なりの勝者としてのけじめ。

馬騰は無様な生き恥を晒すくらいならば死を選ぶ、とそういう予想が彼女にはあった。

下手に行くところがないなら私のところに来い、というのはできない相談だ。

たとえその地位を追われたとしても、馬騰は自らを漢の臣であるとしているだろうことは想像に容易い。

異民族である高順に与するのは死んでも嫌なことだろう。

だが、現実には死を恐れ、見た目通りの少女のように馬騰は震えている。

どうすりゃいいんだ、と途方に暮れる高順だったが、自分と来ないか、と問いかけることにした。

駄目で元々、それで駄目なら母親としてどっかでひっそり馬超や馬岱と生きればいい、と言えはいいのだ。

「寿成殿、私と来ない？」

その言葉に馬騰はゆっくりと顔を上げた。

その目は潤んでおり、荒い息と相まって妙に艶やかだ。

「お前と……？」

問いに高順は頷き、言葉を紡ぐ。

「宦官を倒すことに協力しろ、とは言わない。あなたは先程も言っ

た通りに知らなかったから負けたに過ぎない。攻城戦の経験も少なかったのでしょう」

「でも、それは言い訳にしかない。私が負け、兵を無駄死にさせたのは確かだ」

「あなたは戦に負けたことがないの？　もしくは勝利したとき、兵に死者はいないの？」

「負けたこともあるし、勝利したときも大勢の死者を出したことがある」

「ならばなぜ、今回そこまで落ち込むのか？」

「桁が違う。1万を超える死者なんだぞ……街が2、3個消えるのと同じくらいだ……」

この件については平行線を辿る、と高順は悟り、すぐさま話題転換を図る。

「寿成殿、あなたは漢がこのまま続くと思う？」

単刀直入な問いに馬騰は押し黙る。

彼女とて分かっていた。

漢はもう長くない、と。

「それが答えよ。これから先、戦乱が起こるでしょう。万単位で人が死ぬでしょう。あなたはそのとき、どうするか？」

その問いに馬騰の答えは決まっている。

「力無き民を護りたい。せめて私の目の届く範囲では安心させてやりたい」

「余所の勢力が攻めてきたら、あなたは迎撃するのか？　護るべき民を兵として」

高順の問いは意地悪だ。

万単位で人が死ぬ、としておき、馬騰が民を護りたいが護る為には民の中から兵士を集めなければならない。

二律背反に対し、馬騰がどう答えるか。

問いに馬騰はただ瞑目した。

時間はじりじりと経過し、やがて四半刻が経ったときだった。

馬騰は高順をしっかりと見据え、告げた。

「その攻めてくる相手が民も認める名君であるならば戦わずに降伏しても良いと思う。だが、そうであるとは限らない」

だから、と彼女は続ける。

「私は戦う」

そう告げる馬騰はとても凛々しく、先程までとは別人の様であった。

「今回の戦、あなたはどう受け止めるか？」

「これまでと同じようにする。受け入れるだけだ。よくよく考えればおかしな話だ。私は幼いあの日、槍を取ったときに覚悟を決めた筈なのに」

確かに考えればおかしなことだ。

今回だけこんなにも馬騰が精神的に消耗するなど。

おそらくは自らの持ち味を全て殺された、未知の戦いであつたのだろう。

歴戦の将をして、じわじわと消耗を強いられるのは嫌なものであつた。

ともあれ、高順はそんな彼女に溜息一つ。

これが英雄か、と。

辛いことにも毅然と立ち向かう姿は羨ましいくらいにかっこ良かった。

「さっきの傷ついているあなたを手籠めにしてしまえばよかったかしらね……」

「いや、もうされたよ。されたとも。少なくともお前には悪い印象はない。先の戦でも華雄と共に、本当に見事だった」

馬騰はそう言い、立ち上がる。

「で、だ。生きる為には金が必要だ。かといって、悪い意味で有名になってしまった私は中々稼ぐのは難しいだろう」

一度広まった風評というのは中々消えてはくれない。

馬騰なら賊退治はお手の物だが、それすらも報酬を渋られそうであつた。

「蓄えはそれなりにあるとしても、な……それに私は漢に対して忠誠を誓っているが、それはあくまで陛下へのもの。私は宦官に忠誠を誓った覚えはない」

そう言い、馬騰はまっすぐに高順の瞳を見つめる。

「例え宦官を排除して漢の寿命が僅かしか伸びずとも、それでいい。漢が倒されるのもまた天命だろう。最後の瞬間まで看取るのも臣の務めだ」

「漢が倒れたなら、私へ忠誠を誓って欲しい」

欲張って、高順はそう言った。

馬騰はにかつと笑ってみせる。

「お前がそうするに値するなら私はそうしよう」

その答えに高順はただ肩を竦めるだけであつた。

「そろそろ戻ろう。もう1人の客人を放置しておくわけにはいかんだろう」

馬騰の言葉に高順は頷き、2人は先程の部屋へと戻った。

そこで2人が見たものは華雄にじゃれつく馬岱の姿と苦笑いする馬超の姿であつた。

5人の山賊狩り（前書き）

独自設定・解釈あり。

5人の山賊狩り

賈？は気が重かった。

顔良からついさっき聞かされたとある連絡を董卓に伝えねばならないことに。

その連絡は言うまでもなく、母の悲報。

だが、それも予期できたこと。

月には受け止めてもらわなくてはならない、とどつにか落ち込む気分を奮い立たせる。

董卓はほとんど一日中、書庫で過ごす。

彼女は貪欲に知識を吸収していく。

さすがに名家なだけあって、蔵書の種類と量は豊富であり、賈？もよく利用している。

書庫の一角に設けられたもはや定位置とでも言つべきところに董卓はいた。

机に向かい、農政に関する書を読んでいるらしい。

「月」

賈？が呼べば彼女は視線を本から動かし、賈？の姿を見つけ微笑む。

「詠ちゃん、どうかしたの？」

賈？はそのまま言うのではなく、少しでも軽減すべく遠回しに告げる。

「来るべきときが来た」

その言葉に董卓は僅かに身を震わせ、そして顔を俯かせる。
賈？のこわばった表情からどういう意味か察するのは容易であった。

「……母様が逝ったんだね」

「おそらくは彩の指揮ね。顔を知られているなら攪乱の為に潜入もままならない」

董卓はその言葉に悲しみがより大きくなるのを感じた。

彼女にとって母親も高順もどちらも大切な存在。

その2人が相争い、母が死んだ。

状況から高順を恨むこともできない。

故に彼女は自分を恨む方向へ。

「私がつとしっかりしてれば……」

そう言い、頭を抱える董卓に賈？は溜息一つ。

「あんたが稀代の大天才であつたとしても、どうにもならなかったわ」

「でも……それでも……」

「無理なものは無理よ。もし、あんたが辛いんなら彩にどうにかしてもらいなさい。自分の思いを全部ぶつければいいわ」

賈？はそう言い、自分の胸の奥に針が刺さったような感触を覚える。

彼女はそれの正体がおおよそ見当がつくが、敢えて無視した。

「とにかく、もう勉強は頭に入らないだろうから散歩でもしてきなさい。雑務はボクがやっておくから」

そう言い、賈？は董卓から書物を取り上げてしまう。

一見すれば突き放しているようにも見えるが、彼女なりの不器用な優しさであることは董卓にはよく分かった。

「うん……ありがとう、詠ちゃん」

「ばっ、ばっ！　べ、別にあんたのことを心配してるわけじゃないんだからね！」

素直な好意に弱いのが賈？の特徴だったりする。

そんな彼女の反応に董卓はくすくすと笑い、書庫から出ていった。後に残された賈？は一応元気になったらしい董卓にほっとしつつも、何だか納得がいかない。

「……まあいいか」

だが、それでもよし、として賈？は取り上げた農政書を片付けるのだった。

一方その頃、高順一行はあの会談から程なくして涼州を発ち、旅をしていた。

とりあえずの目的地は洛陽。

その人数は高順、華雄、馬騰、馬超、馬岱の僅か5人。

ただ問題もあり、立ち寄った街や村で高順と華雄を見た住民達は怯えや嫌悪の視線を向け、それに馬超や馬岱が憤怒し……という事態に発展してしまうことだ。

馬騰はそんな身内をぶん殴って止めるのだが、最終的に滞在することができなくなってしまう。

宿に宿泊することは勿論、マトモに買い物もできない。

無論、金はあるのだが、相手が売ってくれない。

馬騰達に買い出しを任せ、高順や華雄は郊外にいればそれで済むのだが、買い出しをする側からすればあまり気分のいいことではない。

ならばどうやって気楽に食料を得るか、とそいう話になってくる。

山賊になるのは論外、となれば必然的にやることは一つ。

「……弱すぎるぞ」

華雄は不満気な顔で死体の山にぶくーと頬を膨らませる。
その死体は数分前までここら一帯に蔓延っていた山賊達の成れの果てであつた。

「それなりに溜め込んでるな」

「酒もあるじゃないか……」

山賊達が溜め込んでいた食料やら酒を漁る馬超と馬騰。

「使えそうなものはこれくらいかな……」

これまた山賊達が使つた武器を集めている馬岱。
そして、高順はというと……1人、木陰でのんびりくつろいでいた。

一応、彼女はこの一行の代表であり、他の者は一応彼女の部下や客将となっている。

そんな一応の部下達が戦闘において極めて優秀な為にただか20人程度の山賊相手に高順がやることはなかった。
勿論、彼女も人を殺すのを間近で見て、先の戦よりは実感が湧いたが、それでも罪悪感に苛まれるということはない。
殺す覚悟も殺される覚悟も彼女は持っていない。

かつて賊を1人で窒息死させたときのように、誰かを殺すのにそんなものは必要ないのだ。

結局のところ、彼女の殺人への立ち位置は敵か否か——それに尽きる。

華雄もまたそれを悟り、高順の考えを否定も肯定もしなかった。こついうのに正解というものは存在しない、と彼女は知っていた。

さて、高順達がどうやって日々を食いつないでいるかというと山賊狩りだ。

山賊が溜め込んでいる食料、ついでに武器などの金目のものを奪っている。

運ぶ為の荷車も当然山賊が使っていたものだ。

幸いにも馬鹿力を誇る馬騰や马超がいるのでそこらは全く問題がない。

元々食料は罪もないどこかの農民達のものだが、返しに行くという考えは全くなかった。

それは当然、これまでの漢人の仕打ちによる。马超などはあんなことをする連中よりも山賊の方がまだマシ、とまで言ってしまう。

少なくとも、山賊達は高順や華雄を見て、嫌悪感を示さずに獲物を見つけた、とそういう表情だったからだ。

とても分かりやすい彼らはかえって好ましかった。

「彩、いつも通りに穴掘って焼くのか？」

華雄がそんなことを聞いてきた。
その言葉に頷き、肯定する高順。

「分かつてるかもしれないが、山賊とはいえ、火葬は死者への礼を欠く行為なんだが……」

横からそう言うてくる馬騰に高順はけんもほろろに返す。

「死者よりもまず生者を大事にしないといけないと思うの。火葬をしないと、土の中で死体は腐り、それにより疫病が巻き起こり、生きている人間が何千と死ぬ。死者を土葬するのは死者を増やす行為にあたり、それを死者は願っているのかしら？」

口も達者な高順に馬騰は押し黙る。

死体が腐ればどれだけ凄まじく、また神聖なものでないかは戦場でよく見ている。

そんなものを埋めてしまえば疫病が発生するのも頷ける。

だが、それでも中々受け入れられない考え方だ。

聞けば華雄などの異民族でも基本は土葬。

高順だけを異端とするのは簡単だが、彼女を黙らせるだけの論がなければ意味がなかった。

「死生観を変えるのは難しい。けども、受け入れて欲しい」

そう言い、軽く頭を下げる高順に馬騰は降参とばかりに両手を上げたのだった。

そんなこんなで山賊達の死体を茶毘に付した後、一行は再び歩みを再開した。

残念ながら、彼女達は馬を持つてはいない。

飼料の問題がそこに大きく立ちはだかっている。

それからしばらく歩いて休憩を取ることとなった。

各々が好き勝手にしている中、高順がそれなりに平らな切り株の上で紙に何やら書いていた。

華雄は不思議に思い、素早く後ろに回りこみ、内容を覗き込んだ。

「……輸送力強化に関する一考察？」

その声に山賊達から拝借した酒を飲んでいた馬騰の耳がぴくりと動いた。

補給で敗れたと言っても過言ではない彼女にとって、そういうものは極めて興味惹かれる事柄である。

「そうよ。騎兵の運用で弱点となりうるのは輜重隊の足の遅さ。そして、攻城戦や堅固な陣地を攻めるときに騎馬という最大の優位を活かせない」

高順の言葉に馬騰が告げる。

「輜重隊はともかく、そういった場所を攻めるのは歩兵に任せればいいんじゃないか？ 城や陣地は迂回し、後方にどんどん突っ込んでいけばいい」

馬騰の言うことは一見無謀であるが、高順にとってはまさに驚きであった。

それこそが彼女が思い描く騎兵による電撃戦。
その発想をすることは中々に難しい。

「言い訳になるかもしれないが、先の戦、もし本拠地などの拠点を持った相手ならばあの砦群を私は迂回し、後方の手薄な拠点を攻めたぞ」

そう言い、彼女は豊満な胸を張る
そのときぷるんと震えるのはご愛嬌。

「補給を断たれた状態でそこまでやれたとは思えないがな」

冷静な華雄のツツコミに馬騰はニヤリと笑ってみせる。

「補給に関してはアテがある。敵が対処できないような素早さで急襲し、奪えばいい」

「そんなにうまくいくわけないだろう」

何を言ってるんだ、と言いたげな華雄に対し、高順は思わず馬騰を抱きしめた。

思わぬ奇襲に華雄は呆然とし、馬騰は戸惑った声を上げる。

「あなたは絶対に私に必要な人！」

高順の言葉に一番衝撃を受けたのは言うまでもなく、華雄であった。

彼女は一步二歩、よろよろと後退り、尻餅をついた。

「あ、え、えつと……」

どうしたものか、と視線を巡らせる馬騰は馬超と馬岱をその視界に捉えた。

しかし、馬超は高順の言葉の意味を深読みしたのか、顔を真っ赤にし、対する馬岱はおば様の旦那になるのか、と何とか呟いていた。

「さ、彩……お前と私は誓い合った仲なのに！？ 契った仲なのに！」

盛大な勘違いを披露する華雄、そして契った仲ということに反応する馬超。

彼女は色々と限界にきたらしく、後ろへと倒れてしまった。

「……あのね、一言言わせてもらうと、私が言っているのは前線指揮官として極めて好ましく、是非とも私に仕えて欲しい、とそういう意味なのだけど？」

ジト目で見つめる高順に華雄は冷や汗をかきつつ、笑って誤魔化する。

「まあ、誤解されるようなことをした私も悪かったわ」

そう言い、馬騰から離れ、華雄に頭を下げる。

「べ、別に私は全然気にしてないぞ！ 私は長生きするタチなんぞな！ そういう細かいことは気にしない！」

華雄自身も何を言っているか分からないのか、中々に意味不明なことを口走っている。

「ともあれ、そういうことよ。で、肝心要の輸送の件だけでも、大体的に馬車を使うしか方法がないわ」

さすがに歴戦の戦士だけあって、冷静となるのは早く、高順の言葉にうんうんと馬騰も華雄も頷く。

「でも、馬車だと飼料が問題となるのよね」

「必要な費用だと割り切るしかないな。どうせなら歩兵も馬車で輸送したらどうだ？ 専用の馬車を仕立てれば迅速な展開が可能だろう」

華雄の言葉に高順はにつこりと笑う。

「嵐、あなたも絶対に必要な人ね」

「当然だ」

先ほどの醜態はどこへやら、不敵な笑みを浮かべ、そう返す華雄。

「他に問題点は整備された道ばかりではないことか。頑丈で雨風もしっかりと凌げるものでないと使いものにならない」

馬騰の言葉に高順は重々しく頷き、言葉を紡ぐ。

「山道も砂漠も荒地も沢もどこでも行ける頑丈なものとなれば鉄で車体を作るしかないけど……」

「そうすると今度は重くて馬が何頭も必要だよ」

横合いから馬岱が会話に加わってきた。

彼女とて幼いとはいえ、馬一族である。

戦に関しては強い。

「そもそも鉄をそんな風に加工作るのか？」

ぶつ倒れていた馬超も復帰し、根本的な疑問をぶつける。

「その辺は将来、旗揚げするなりしたときに改めて職人達と相談しながらやるしかないわ。あと、もし造れたとしてもそれ1台作るのに馬鹿みたいに高いお金が必要なら普通の馬車を何台も揃えた方がいいし」

高順の言葉に皆、頷く。

前途は多難であった。

奮起（前書き）

独自設定・解釈あり。

高順が本気を出すようです。

奮起

洛陽目指して進む高順一行。

馬騰としては洛陽に行くことは色々と心情的に複雑だが、それでも高順や華雄に洛陽について教えておかなければならない。宦官を倒すなら尚更だ。

そんなわけで今日も今日とて進む一行。

時折、馬騰に村や街で山賊から巻き上げた金目の物売ってもらい、路銀の足しにしつつ。今や雍州の武功近辺にやってきていた。

小さな川が横に流れ、反対側は森。

食事をするにはもってこいの場所を一行は進む。

そして、そろそろお昼休憩を取ろうか、と話していたときであった。

「何だアレ」

いの一番に気がついたのは華雄。

彼女の言葉に皆一斉にそちらを見る。

茂みから飛び出している何か青緑色の糸のようなものの束。その傍には帽子が転がっている。

「とりあえず警戒するに越したことはないだろう」

馬騰の言葉に皆一斉に戦闘態勢。

高順も何が出てくるか分からないので山賊達から拝借し、気に入っている剣を構える。

馬超と馬岱に荷物を任せ、3人でジリジリと近寄っていく。

そして、華雄が意を決してその青緑の物体を得物の柄の先端で突ついった。

感触的にどうやら髪の毛らしい、と彼女はあたりをつける。

「死体かもしれん」

そう言いつつ、華雄は茂みを掻き分け、首筋を見つけるとゆっくりと引つ張った。

予想以上の軽さに彼女は驚きつつも、完全に茂みから出すことに成功する。

それは馬岱と同じくらいの背丈の、女の子であった。

華雄は死体かどうか確認すべく、うつ伏せに倒れている女の子をひっくり返す。

その顔を見て、華雄は思わず息を飲んだ。

あまりにも痩せこけていた。

もう何日も食べていないのだろう。

肉などなく骨と皮しか残っていないのではないか、と思える程に。

残る4人もそれを見、思わず息を飲んだ。

「で、どうするんだ？」

いち早く我に返った馬騰が高順に問いかけた。
高順は暫しの逡巡の後、告げる。

「助ける」

「お前や華雄を嫌悪するかもしれないのに？」

挑戦的な視線を高順に向け、馬騰はそう問いかけた。

「今、彼女は私達を嫌っていない。それに、嫌われるということはそれだけ元気になったということ。どっちに転んでも別にいい」

それに、と彼女は続ける。

「たまには人助けの一つくらいしても悪くはない」

そう言いつつ、もはや問答は終わり、と高順は動く。

その女の子を胸に抱き、真剣な表情で呼吸と脈を確認する。

馬騰はその様子に自分の出番はないか、と思った。

彼女は母親であり、こういうときの対処法を心得ていた。

対する高順の知識は家庭の医学やテレビなどで聞きかじった程度。他には戦場での病気として代表的なものの症状と治療に必要な薬程度しか知らない。

しかし、彼女はそんなことなど関係ない、とやる気であった。

「とりあえず重湯を大至急」

その言葉に馬騰が心得た、と素早く動いた。

馬超と馬岱に水を汲んでくるよう指示を出し、テキパキと自らも準備を始めている。

高順は飢餓状態で起こりそうな病を頭に思い浮かべる。
戦場での飢餓、そこに襲いかかる病気。

すぐに彼女はガダルカナルという単語が浮かんできたが、幸いにもマラリアやデング熱は勿論のこと、エボラ出血熱という21世紀の医学でも治療が難しい感染症は中国には存在しない。

高順は冷静に女の子を観察し、足が酷くむくんでいることに気がついた。

これは、と気がついた彼女はただちに膝小僧のあたりを軽く叩く。正常なら足は神経によりかくん、と伸びる筈だ。

だが、その子の足は伸びない。

その原因はすぐに見当がついた。

また長期に渡り野菜を食べていないことが予期されることから、もう一つの病に罹っている可能性がある。

「塩漬けにした野菜を細かく砕いて。あと大豆を煮てそれをすり潰して」

数日もすればどうにかよくなる筈だ、と高順は信じたかった。

別段急いでいるわけでもなかった一行は女の子に食事をゆっくりと与えた。

胃がうけつけない為か、数度吐いたがそれでもどうにか食べさせることに成功した。

そして、雨風を凌げる場所を、と近くの街まで高順自ら女の子をおんぶし、また彼女と華雄はその容姿が目立たぬよう外套を纏った。多少怪しまれたものの、どうにかその街で宿を取ることができ、ようやく一息つくことができた。

はじめから外套被ってれば特に問題は起きなかったんじゃないのか、と一同は思ったが、過ぎたことを気にしてもしょうがない、と開き直すことにした。

そして、瞬く間に時間は過ぎ去った。

「……？」

ぱちくりと彼女は目を開けた。

見慣れぬ天井に不思議に思いつつ、起き上がろうとして力が入らないことに気がついた。

そして思い出す最期の風景。
痛む足に鳴るお腹。

そう思い、彼女はどうか視線だけ下げて足を見てみればそこにあったのは極々普通の足。

むくんでいたという事実はなかった、と言わんばかり。

そして極めつけはお腹の調子。

空腹感は全くなかった。

「……ここは……どこなのです？」

口減らしの為に僅かな金銭を持たされて村から出された彼女にとつて、こんな宿屋に泊まるお金は無い。

そもそもその金もとうの昔になくなっていく。

泥棒するしかない、と覚悟を決めたものの、彼女のような子供ではどうにもうまくできず。

「……死んだのですか？」

そう口に出し、ああ、と納得した。

ここは死後の国が何かなんだろう、と。

出なければ暖かい布団で寝るなんてことはできないし、あの足の病気も治らない、と。

扉が開いたのはそのときであつた。

彼女はその音にどうにか気合を入れて体を起こし、入ってきた人物に数度瞬きした。

その人物のは銀髪に色白という見慣れぬ容姿の少女であつた。

「気がついたの」

「あの、ここはどこなのですか？」

開口一番、彼女は尋ねた。

「雍州の武功よ」

「そうですか……死んでないのですね……」

安心したような、それでいて残念そうな彼女に少女は告げる。

「私は高順よ。あなたは？」

「ねねは姓は陳、名は宮、字は公台なのです」

「……ちよつと待ってね」

高順はそう言い、陳宮をじーつと見つめる。

見つめられた彼女は首を傾げるも、特に何も言わない。

高順はそれから3回連続で見つめた後、ようやく口を開いた。

「あなたの出身は？」

「？州東郡武陽県なのです」

「？州つて司州を超えてきたの？」

「はいです。口減らしの為に村を出され、それから放浪していたのです」

あの陳宮が口減らしで放浪というまさかの事実の高順に咄然。

若い頃から村の顔役として多くの名士達と交友を結び、曹操に仕え、その後呂布に仕えた……というのが高順の知識にある陳宮だ。

とてもではないが、口減らしで手放せるような人材ではない……とそこまで考えたところで、この世界は大まかなところでは三国志に似ているが、服装やら食べ物やらその他諸々の意味でオーパーツが大量にあることを思い出した。

それに彼女自身、馬一族の未来を変えてしまっている。

ならばそういうこともあるのだろっ、と最終的に納得してしまっ

た。

そんな高順に陳宮は問いかける。

「あなたがねねを助けてくれたのです?」

「一応そうなるかしらね。脱水症状、栄養失調、そこに脚気と壊血病の4連攻撃で死ぬ寸前だった」

その言葉に陳宮は首を傾げる。

栄養失調というのは何となくわかるが、それ以外の3つは聞いたこともないものであった。

陳宮が問うよりも早く、高順は告げる。

「詳しい病気の説明は面倒くさいから省くわ。ともあれ、あなたはこれからどうするの?」

その問いに陳宮は俯いた。

アテがあればとうの昔にどうにかしている。

それをわかっているだろう上で聞いてくるということは……

陳宮はある可能性に思い当たり、顔を上げ高順を睨んだ。

「ねねを売ろうというのですか?」

「……悪いけど、お金にはそんなに困ってない」

肩を竦めつつ、そう答える高順に陳宮は追撃する。

「ならば何故、ねねを助けたのですか? 慰み者にでもするつもりですか?」

高順はそこまで頭が回る陳宮に思わず感心してしまった。
助けたのはあくまで彼女の善意であるが、その後も面倒みなければ再びあの地獄を見るのは明らかだ。

「死んだ方がマシだってこともある、と？」

その問いに陳宮は頷く。

確かにその通りだよな、と高順も同意してしまう。

ここで高潔な精神の持ち主であるならば生きていればいいことであると説教の一つでも言うようなものだが、あいにくと高順はそんないい奴ではない。

「まず大前提から考えましょう。あなたは生きていたいのか、死にたいのか」

「生きる術を見い出せないなら死んだ方がいいのです。あなたがどこかの太守や県令でねねを部下にしたいとか酔狂なことを言うのなら別ですが」

「まあ、その歳じゃまともな仕事もなさそうだしね……」

今の陳宮の背丈はどう見ても一桁である。

大人ですら中々仕事がないというのにそんな彼女を雇う酔狂なところはまずないだろう。

「雇えるくらいの金はあるけど、あなたは何かできるの？ 性的なことはさせない。私の真名に誓って」

高順の言葉に陳宮は目を大きく見開いた。
真名に誓う、というのは絶対の約束だ。
破ってしまえば死よりも辛い恥となる。

「相手の誠意を得るにはこちらから誠意を見せなければならぬと思うの」

道理です、と陳宮は心の中で同意しつつ、口を開く。

「ねねはこう見えても村で一番勉強ができたのです。読み書き計算、あと農作業も手伝っていたのです」

「農作業ではどんな役割を？」

「主に人に指示を出していたのです」

なるほどなるほど、と高順は頷く。

賈？は政略も軍略何でもござれであるが、1人である以上、どうしても細かい穴が出てくる。

その穴を潰す役目は陳宮ならばできるのではないか、と高順は考えた。

また、月は素質はあるが、残念ながら未だ知識を取り込んでいない最中であるだろう、と高順は予想する。

董卓には経験が不足しているのだ。

対する陳宮は農作業の現場監督とはいえ、経験がある。

ならば知識を与え、軍略にも応用が利くように、そしてもっと色々なことを経験させてやれば……

武官、文官どちらも大事であるが、今は一応、戦時ではなく平時。ならばこそ優先されるのは文官である。

「……今、うちは戦争屋ばかりで文官が少ないのよ。見習い分も差引いて月に2000銭でどう？」

陳宮は思わず言葉を失った。

待遇が良すぎるのだ。

大人が働いて月に平均600錢程度であるのにその3倍以上の給与。

陳宮からすれば文字通りの目が飛び出るような大金であつた。

対する高順は逆の方を考えていた。

「少なかつた？」

その問いに陳宮はぶんぶんと首を勢い良く左右に振る。

「とりあえず、今、うちの頼れる軍師が色々暗躍しているから、しばらくは給与未払いで後で一括という形でいい？ あ、勿論、その間の食費とか諸々のものはこっちで出すから」

「だ、大丈夫なのです！」

陳宮にとつてとりあえず三食満足に食べられればそれでよかった。高順はその返答に満足そうに頷きつつ、彼女に問いかける。

「呂奉先という人物を知ってる？」

「知らないのです」

「曹孟徳は？」

「名前だけなら知っているのです」

なるほどなるほど、と再び高順は頷く。

「しかし、よく州を一つまたいでここまで来たわね」

「森できのみやきのこを食べて餓えを凌いでいたのです」

「毒きのことがそういうのには？」

「見分けがつくから大丈夫なのです」

馬超にその辺、教えてもらおうか、と高順はわりと真剣に考える。馬超はどうにも豪快で細かいことはあんまり気にしないタチだ。小腹が空いたから、とそこらに生えているきのこを食べそうなのは彼女が一番ありえそうであつた。

「あ、それと私羌族だけかい？」

「羌族なのです？」

唐突な問いにも関わらず、陳宮は普通に返してきた。不意を突こうとした高順は肩透かしを食らった形だ。こついうところが頭の回転が速い証拠なのかもしれない。

「ねねは人をバリバリと食べ、馬に乗った銀色の鬼と聞いたのです」
「……いや、どこの怪物よ」

人を食べるという事以外に関しては銀髪の戦鬼と読みかえれば合っているといえは合っているかもしれない。

「ところでねねも聞いていいのです？」

「いいわよ」

「高順殿は官軍を打ち破ったあの高順殿なのです？」

「少なくとも私以外に高順という名前を聞いたことはないわね」

おお、と陳宮は目を輝かせた。
そんな彼女に高順は問いかける。

「怖くないの？」

「漢王朝などもはや腐った家も同然なのです。護るべき家族……民を護ることなどできないのです」

凜とした声で陳宮は言い放った。

自らの体験やこれまでの見聞からそういうことは容易に推測できた。

「でも、あちこちで怖がられているみたいだけでも」

「そうなのです。漢は先の戦闘で力がないことを証明したのです。異民族に襲われるかもしれない、とそういう噂でいっぱいなのです」

ですが、と陳宮は続ける。

「それは異民族の実態を知らないからなのです。知らないことが一番怖いのです」

「……知ったら知ったで怒ると思うけども」

略奪がただの小遣い稼ぎである。

やられる側からすれば堪ったものではない。

「そうなのです？」

「うん。略奪するから恐れられてると思うんだけど、アレ、ただの小遣い稼ぎだしね」

「……高順殿はそういうことをしたのです？」

陳宮はじつと高順の瞳をその琥珀色の瞳で見据え、問いかけた。

「興味があつたのは確か。でも、やったことはない」

「今、やりたいと思うのです？」

「略奪よりももっと効率的で皆から好かれることをやるから、そん

なことをする意味はないわね」

高順の答えに陳宮はにつこりと笑った。

「ならば問題ないのです！」

そんな笑顔を向けられてはさすがの高順も少々恥ずかしくなる。
子供の笑み程強いものはあまりない。

「でも、私はあんまり漢人が好きじゃないわ。というか嫌い」

高順の言葉に陳宮はしゅんとした表情で肩を落とす。

彼女が嫌がらせやら何やらを受けたことは想像に難くない。

そして、陳宮はあることに気がついた。

「高順殿の軍師は羌族なのです？」

「いえ、漢人よ」

「その人は悪い人なのです？ 嫌がらせとかをしたりするのです？」

「そんなことするなら軍師なんてやらせてない……ああ、そういうこと」

気がついたらしい高順に陳宮はいです、と力強く頷く。

「理解し合えるし、全員が悪い輩ではない……そういうことね？」

「そうですね。時間は掛かるですが、きっと関係を修復することはできるのです」

「まあ、うちの民族はもう漢に手を出さないって決めたしね」

「ならば尚更なのです！」

陳宮に頷きつつ、賈？も結構前、似たようなことを言ってたわね、と高順は思い出す。

「でも、綺麗事だけじゃ世の中は回らないわよ？」

「心得ているつもりなのです。でも、草の根をかき分けるように少しずつやっていけばきっと大丈夫なのです」

なるほど、と頷く高順はある問いが浮かんできた。

別にそれは陳宮がやらずとも良いことだ。

「そもそも、なぜあなたがそこまでするの？」

「それが平和な世の中への第一歩だからなのです！　ねねは今の世の中を変えたいのです！」

自らの体験から陳宮がそう導いたのも当然だろう。

そして、彼女の夢に高順は思わず呟いた。

「……五族協和、王道楽土」

陳宮はその言葉に首を傾げる。

「諸々の異民族や漢族が協力し合い、徳でもって統治するという意味よ」

高順の説明に陳宮は目を輝かせる。

まさにそれこそが彼女が臆気ながらも思い描く夢。

陳宮の期待に染まった表情を見つつ、高順は思案する。

この時代なら西洋列強は影も形も存在していない。
ならば横槍もないが故に中国でそれを築くことはできるだろうし、

日本と友好関係を結び、それを近現代まで維持すれば一次・二次の大戦の様相は全く違うものになる。

否、そもそもそれが起きるかどうかわからない。

シベリアを取れば帝政ロシアやソ連の影響を日本が受けることは皆無、中国がうまくいこと発展すればソ連とも渡り合える。

技術は日本、市場や資源供給地を中国とすれば中々どうしてうまくいことアジアが回る。

その未来は石原莞爾の最終戦争論と似たような推移をする可能性が極めて高い。

アジアをまとめあげれば西洋列強やアメリカ、ロシアに打ち勝てる可能性は大いにある。

この時代ならば日本に対して中国や朝鮮が険悪な感情を抱いているわけもなく、今のうちから友好関係を築けば余程のことをしなければそのままお互いに友好的にいけるだろう。

アジア諸国が植民地化を免れれば西洋はその富を得ることができず、史実程に強大化しない。

故に、文明の中心は必然的に西洋を倒したアジアとなる。

そうなれば白人による黄色人種蔑視というものも出てこない。

黒人蔑視は出てくるかもしれないが、そこはアジアがフォローすれば白人は何も言えなくなる。

そして、黒人への偏見をなくさせる為にも今の異民族蔑視の風潮を何とかしないとイケない……

「……ある意味、私は最大の機会を得ている。私は結果を見ることができないが、歴史をどうこうできるかもしれないなんて滅多にあることじゃない」

思わず、高順の口からそんな言葉が出てきた。

そう、今彼女はまさしく未来を変える権利を手に行っていることを実感した。

彼女が行動すれば未来は変わる。

その最低のラインが中国を統一し、周辺諸国と永続的な同盟及び友好関係を結ぶこと。

高順は身を震わせた。

それは鳥肌ではなく、武者震い。

その顔には不敵な笑み。

「陳宮」

「はいです」

「あなたのおかげでどうやら私はうまくいきそう」

まさに奮起。

自分の思う未来にするには曹操も袁紹も孫堅も劉備も誰にも天下統一をされてはならない。

自らの手でやらねばそういうことはできない。

未来に関する知識や予想を伝えたところで、その進言を取り上げてくれるか分からないからだ。

「高順殿のお役に立てたのならばいいのです」

そんな可愛いことを言う陳宮の頭を高順は優しく撫でてやる。

えへへ、と笑みを浮かべる陳宮。

「……賈？がどこにいるか、それが問題ね」

そのとき、扉が叩かれた。

高順が誰何すれば何と賈？からの使者だという。

使者によれば今は冀州南皮の袁紹に客将として仕えており、すぐに来られたし、とのことだった。

「賈？、空気読みすぎ……」

偶然そうなただろうが、高順はそう言わずにいらなかった。そして、また扉が叩かれ、誰何する前にそれが開く。入ってきたのは買い出しに出かけていた華雄達だった。

彼女の建前と本音（前書き）

独自設定・解釈あり。

彼女の建前と本音

陳宮が自己紹介を行い、また高順が彼女を雇ったこと、そして現状の異民族蔑視の風潮を無くし、大陸統一を成し遂げることを宣言した。

宦官打倒後の明確な目標を高順が自ら語ったのだ。

客将という立場である馬超や馬岱は士気を大いにあげたものの、華雄、そして馬騰は違和感を覚えた。

彼女らが知る高順は少なくとも大義の為に動く輩ではない。

そこが好ましいところであり、欠点でもある。

高潔な者からすれば私利私欲で動く唾棄すべき輩に見えるだろう。とはいえ、少なくとも今この場にそういった高潔な輩はいない。敢えていえば幼いが故に汚いことを知らない陳宮や馬岱がそれにあたるかもしれないが、両者共、これまでにそれなりに汚いところは見ている筈だ。

だが、馬騰は自らの立場を弁え、何も言わない。

故に華雄は将来において内部分裂の元とならぬよう、敢えて嫌われ役を買って出ることにした。

「で、真意はどこなんだ？」

華雄の言葉に高順は首を傾げる。
そんな彼女に華雄はさらに続ける。

「お前が誰かの為に、と動くような奴ではないことはよく知っている。その公台がお前を1刻も経たないうちに話術で洗脳したというのはさすがにないだろう？」

「何を言っているのです！ 高順殿は心の底でそう思っていたからそう言ったに決まっています！」

怒る陳宮を相手にせず、華雄は視線を高順に注ぐ。

その瞳は僅かな虚偽も許さぬ、と言っている。

そして、華雄は僅かに高順の視線が自分から逸れたことを確認した。

それだけで彼女にとっては十分過ぎた。

「……ふむ。だいたいわかったぞ」

「いや、何も言っていないじゃないか」

腕を組み、頷く華雄に馬超はおいおい、とツッコミを入れる。
そんな彼女に不思議そうな華雄。

「目は口程に物を言う……というではないか？」

「確かに言っけどさ……」

一応の肯定をしつつ、母に視線を向ける。
馬騰はそれを受け、ゆっくりと口を開く。

「華雄と高順は長い付き合いと聞く。そういうこともあるんだろう」
「そういうもんかなー、といまいち納得がいかない馬超であったが、

とりあえず華雄の話を聞こうと口を閉じた。

「お前の本心は異民族蔑視をどうにかする為にそうするわけじゃないな」

問いかけではなく、確信であった。

華雄はさらに言葉を紡ぐ。

「お前は自分の為に動く奴だ。そこが好ましくもあり、欠点でもある。それから考えるに……欲を出したな？」

悪戯した子供を咎めるように華雄は高順に問いかけた。
言われた高順は僅かに体を震わせ、顔を俯かせる。

「公台の純粋な願いを体の良い隠れ蓑にして、王になろう……そして、歴史に名を残そう、未来を手に入れよう……大方そうではないか？」

陳宮が高順に顔を向ける。

彼女の顔は華雄の言葉を否定して欲しい、と言っていた。
対する馬騰達は口を出すべきではない、と感じつつもようやく彼女の本心が聞けることに安堵していた。

今まで目標とか夢とかそういうのをまったく言わなかった高順だ。
宦官打倒までの関係だとしても、今は身内であるのだから、教えて欲しいというのが彼女達の偽りなしの本音。

共感できるならば手伝いをするのもやぶさかではない。

対して高順は混乱していた。

それは彼女自身でも、華雄に言われた通り隠れ蓑にしようとしていたか、分からなかったからだ。

あのときのことを思い出し、少なくとも功名心から出たものではない……と高順は言おうとしたが、そうすることはできなかった。

高順自身、思っていたからだ。

彼女は英雄になりたかった。

歴史に名を残したかった。

皆からちやほやされるような、そんな特別な存在に。

陳宮に言われ、高順が思いついたあの考えを実現すれば名君と称されるに相応しい功績となるだろう。

平和な世を体现した王として。

1000年以上の後、歴史の教科書に載り、誰もが彼女の名と功績を知り、テレビでは特集が組まれ、コメンテーター達は誰も彼もが彼女を称賛する……そういう存在になりたかった。

そう、賈？の予想は見事に的中していた。

「彩」

黙して語らない高順に華雄は優しく声を掛けた。

「私は別に怒っているわけじゃない。ただ本音を言って欲しいだけだ」

穏やかな笑みを浮かべ、華雄はさらに言葉を紡いだ。

別段、欲があるのを彼女は否定するわけではない。

功名心も必要なものだ。

だが、本音を隠して建前だけでは甘い汁を吸いたいが為のゴマス

りはついてきても、本当の家臣は得られない。

「……本当に言っているの？」

「勿論だ。お前がどんな欲望を持っていたとしても、私も文和も仲頼も受け入れるだろう」

華雄の言葉に高順は遙か遠く、冀州にいる賈？や董卓を思い浮かべる。

久しく会っていないが為にとっても懐かしく思えた。

「……私は英雄になりたい」

ぼつり、と高順の口から言葉がこぼれた。

俯いていた彼女は顔を上げた。

「歴史に名を残したい。他の英雄から一目置かれたい」

なるほど、と華雄は頷き、視線を陳宮や馬騰達に向ける。

「だ、そうだが？」

その問いかけに一番に答えたのは陳宮であった。

「高順殿、その気持ちから出たものだとして、今も異民族蔑視をどうにかして平和な世をつくりたい、と思っているのです？」

問いに高順は陳宮の琥珀色の瞳をまっすぐに見据え、頷いた。

「ならばねねは高順殿についていくのですぞ！」

「良いのか？」

華雄の問いに陳宮は力強く頷く。

「ねねは別に名声とかそういうのはいらないのです。平和な世をつくって、それを見てニヤニヤしたいだけなのです」

「自己満足は最高の快樂だからな。で、その言葉はお前はそうしてくれる輩なら誰でもいい、と取れるんだが？」

暗に裏切りは許さない、と告げる華雄に陳宮はやれやれ、と溜息を吐く。

「欲望をさらけ出してくれる方がかえって信頼できるのです」
「確かにな」

うんうんと頷く華雄。
そんな2人を横目に、馬騰が口を開いた。

「なあ、高順の言ってることは要するに名を上げたいってことだろ？」

その言葉に高順は頷く。

「それって武人が己の武を誇りたいというのと同じことじゃないか？」

その言葉に一同はそういえば、と気がついた。
そう、何らおかしいことではない。

そもそも華雄の旅の目的も強くなりたいたいから、というものだ。
それは何ら恥じることはない。

ならばこそ、高順の目的である英雄になりたい、歴史に名を残したい、というのも別に大して変わらない。

「……もしかして高順って、バカ？」

馬岱の言葉に否定できずに俯いてしまう高順。

「と、ともかく、彩が表面取り繕って隠したり何だりしたのが悪い」

華雄は強引に纏めにいく。

確かに高順がさっさと自分の思いを打ち明けていれば回避できた事態である。

「よしよしですぞー高順殿はいい子ですぞー」

しまいには傍にいた陳宮に頭を撫でられる始末。

そんな高順を見た華雄は悲しみにくれている彼女もイイ、と思っ
てしまったが、そこは些細なことであった。

「何かおかしいような」

顔良は執務室で1つの書類を見、呟いた。

その書類は賈？がもってきたもので、嚴冬対策・飢饉対策として毛布、薪、食糧などの備蓄に関するものだ。

それ自体は理にかなっていることだが、その量が半端ではない。桁を2、3個間違えているんじゃないか、と顔良が思ってしまうくらいに膨大な量である。

袁家の財政からみればその購入費用は大したものではないが、それでも無駄遣いは顔良としては黙認できない。

「でも、文和さんだしなあ……」

顔良は賈？が苦手……とまではいかないが、あんまり会いたくない相手だ。

常に眉間に皺を寄せ、不機嫌そうな顔でガミガミと口うるさい……というのが袁家内での賈？への評価だ。

しかもその言っていることが正論だったり、言われた通りにやればうまくできたりするのだからたまらない。

おまけに当主の袁紹と真名を交換する程に仲がいい。

これには側近というか、悪友といった方がいいて顔良や文醜も首を傾げるばかりであった。

「……とりあえずいいか」

顔良はその書類を可のハンコを押すと次の書類に取り掛かった。また賈？からのもので、今度は馬車に関するもの。

書いてあることは先程と同じようなもので、災害時に迅速に物資を運ぶ為に頑丈な馬車を量産したいとのこと。

その為に必要な人材登用を行いたい云々と書いてあった。勿論、量産に必要な費用材料その他諸々についても。

「たぶん、もう話をつけてあるんだろうなあ……」

手回しが良い賈？である。

実際はもう材料その他諸々は揃っており、また生産責任者も決めているのだろう。

ここでゴネたら賈？本人が乗り込んできて完全に論破されることも予想がついた。

「田豊さんや沮授さんも口で勝てないみたいだし」

そう言いつつ、可のハンコを押す。

袁家の二大軍師が客将に勝てないのは何とも情けない話であるが、知っている人からすればあの賈？が相手ならしょうがない、と納得することだろう。

「つて、また文和さんの……」

次の書類も提出者が賈？であり、顔良はげっそりしたのだった。

「事後承諾で本当にいいんですか？」

丁寧だけでもどこか小馬鹿にしているような口調が響く。
言われた方はいうと、ただ頷く。
視線はそちらへと向かず、手元の紙に注がれている。

「怖い人ですねえ」

「うるさいわよ、張勳」

「はい」

賈？は溜息を吐く。

幽州発展の為に物流改善が必要。

その為には街道整備と馬車が必要。

街道整備に関してはともかくとして、馬車は今から作っておく必要がある。

それ故の此度の登用……であつたのだが、そういった職人達は袁家が抱え込んでしまっており、さすがに彼らを使うことは袁紹が許さなかった。

ならば、と賈？は工作が巧い人材を探し、見つけたのが張勳であった。

聞けば袁紹のところで仕官を断られたので、袁術のところへ行こうか、と思っていたという。

そこで賈？は自分の部下として登用し、彼女を馬車作りの総責任

者とした。

それだけならまだしも、賈？はあろうことが、必要な土地や作業員、材料を既に確保していた。

顔良へ提出したものは実質的な事後承諾の書類。

もつとも、承諾せねば賈？が赴いて説き伏せてしまうので、どちらにしても顔良は承諾せざるを得ない。

早いか遅いかの違いだ。

「ですけど、最低で1000台の馬車つてとんでもない数ですよ？万単位の軍勢の輜重隊を組むことができますし」

賈？は視線を張勳へと移し、ただ一言。

「災害対策用よ」

「いえ、だって……」

「災害対策なの」

災害対策の一点張りの賈？に張勳は納得する。

名目上はそうしておいて、謀反でも起こすのだろう、と。

「言っておくけど、袁紹を裏切ったりはしないから」

心中を見透かされたことに張勳は冷や汗が垂れる。

「あと、ボクはただの軍師に過ぎないわ。決めるのは別の人」

「……え？」

張勳は目を丸くした。

君主がいるならば何故袁家に、とそういう疑問が彼女に湧くのも当然のこと。

「色々あるの。もう少しすれば来ると思うから、そのときに紹介するわ」

「文和さんを軍師にするなんて……見る目がありますねえ……」
「当然よ」

胸を張ってそう言う彼女に張勳はなるほど、と頷き、そして告げる。

「大好きなんですネ」

につこり笑顔でそう言われ、賈？は顔を一瞬で真っ赤にする。慌てて否定するが、その態度がもはや肯定しているに等しい。

「若いていいですねえ」

「……あんたも若いでしょう。ともかく、作る馬車は全て部品の大さを統一しなさい」

「そうした方が修理とか楽ですねえ」

「それと部品の数もできるだけ少なくしなさい」

「それだと作るのが楽になりますねえ」

「あと、誰でも作れるように手引書を作りなさい」

「それだと私が用済みになって捨てられちゃいますねえ」

さり気なく返した張勳に賈？は不敵に笑った。

先ほどのお返しとばかりに。

「大丈夫よ。馬車なんてまだ第一歩だから。その後は船を作ってもらうわ」

ピシリ、と固まる張勳。

「陸と海の物流改善、これで物資と人が流れ込みやすくする。馬車や船の製造と平行して街道整備、港湾整備、治安向上、農政改革……」

「わ、私は作るの専門でいいんですね!？」

「悪いけどうち、人が少ないのよ」

爽やかな笑顔でそう返す賈?に張勳は項垂れた。

「ま、せいぜい頑張りなさい。睡眠時間くらいは確保してあげる」

手をひらひらと振り、賈?は視線を手元へと戻す。

高順がもたらした未来と今での農業の相違点とそこに関する考察を思い出しつつ、再び作業を進める。

賈?が今行なっているのは抽象的な案であつた高順の農政改革案を具体化する作業だ。

対する張勳は自分の机であーでもないこーでもない、と馬車の図面を引いている。

「おーっす、暇やから呑もうや」

勢い良く扉が開いたのはそんなときだった。

入ってきたのは張遼。

彼女の片手には酒瓶、もう一方にはつまみが盛られた皿。

「……霞、ボクの必殺技をもらいたくなければ今すぐに出ていきなさい」

「何や何や、詠はお冠か？」

「愛しのご主人様と会いたくて会いたくてイライラしてるんですよ」

からかいにのらない張勲ではない。

「さやか。月といい、詠といい、ほんまにあいつも罪な女やなあ」

張遼はうんうん、と頷く。

これは、と思った張勲はすかさず問いかける。

「私、最近文和さんの部下として入ったばかりなんで、そのご主人様について知らないんですけど……」

「ああ、ウチらのご主人様は巷で噂の」

「賈文和眼鏡斬りッ！」

椅子から飛び上がり、賈？は張遼目掛けて飛び蹴り。
奇襲にも関わらず、張遼はひょいっと回避。

「眼鏡斬りとか言いつつ、飛び蹴りっちゅうのはあかんやろ」

「相手の虚をこちらの実で突くのは基本よ」

「確かにそうやけど……」

何か納得いかなあ、と思いつつ、来客用の椅子にどっかりと座る張遼。

こうなったらテコでも動かないな、と賈？はすぐさま察知し、彼女に釘をさす。

「霞、悪いけどウチの大將に関しては来てから改めて紹介するわ。張勳を疑っているわけじゃないし、そもそも私達の目的は袁紹自体が認めていることだけでも」

「なるほどな。ま、我らが軍師様がそう言っんなら従うまでや」

「えー、教えてくれないんですかー？」

不満気な顔の張勳。

「あと1ヶ月かそこらで来ると思うから、それまでに馬車の設計と試作を終えておきなさい」

賈？の言葉に張勳は不満たらたらながらも、了解したのであった。

圧倒的戦力差（前書き）

独自設定・解釈あり。
微工口あり。

圧倒的戦力差

洛陽目指して……ではなく、冀州南皮目指して進むことになった高順一行。

道中特に何事も無く冀州の手前、并州へと入り、適当な街で宿を取ろうということになった。

高順と華雄は顔をすっぱりと外套で覆ったことで、門番に怪訝な顔をされたものの、どうにか街へと入ることに成功した。

そして、今夜の寝床となる宿を確保し、馬騰達が陳宮を連れて買い出しに行っている最中に溜まったものを吐き出してしまおう、と寝台の上で戦っているときであった。

「匈奴が出たぞおお」

窓の外から聞こえるそんな声に華雄と高順はお互いに顔を寄せ合った体勢で動きを止める。

「……どうするんだ？」

華雄はそう尋ねつつも高順の首筋に顔を埋め、口づけをしていく。

「どっ、しよっ……んっ」

答えようとした高順を華雄は容赦なく責め立てていく。

高順はどちらかというと被虐体質である。

対する華雄はその逆で嗜虐体質である。

何が言いたいか、というところの2人、そっちの意味での相性も抜群によかったりする。

窓の外の喧騒なんぞ遠い世界とばかりに再び燃え上がり始める華雄と高順。

このまま後半戦に突入かと思われたが、次第にうるさくなる窓の外。

子供の泣き声、物の割れる音。

ちらり、と華雄と高順が窓から眼下へと視線を向けてみれば家財道具を荷車に乗せて避難しようとしている大勢の人々。

2階ということもあり、実によく見えた。

義勇軍やら官軍、あるいはこの街固有の自警団などがいてもいい筈なのだが、どうやらそんなものはおらず、あっさりと街を放棄するらしい。

死を覚悟して立ち向かう、というのは中々にできないことだ。

ましてや、それが異民族が相手ならなおのこと。

匈奴もまた屈強な戦士が多いことを華雄も高順もよく知っていた。

「……うるさいな」

興が削がれた、と不機嫌そうな顔となる華雄。

無視できない程度にまで達した喧騒。

そのとき、廊下を慌ただしく走る音が聞こえてくる。

すかさず華雄と高順は慌てずにお互いに離れ、下着と服を手早く着る。

事後処理はまだしてない為に下着が大変な状態となるが、背に腹はかえられない。」

「大変だ！ 匈奴が攻めてきた！」

一番に飛び込んできたのは馬超。

その脇から馬岱と陳宮が買い物籠を抱えて現れる。

その中には野菜や肉がたくさん。

数日は持つだろう。

「どうするんだ？」

馬超を押しつけて入ってきた馬騰の問いに華雄は高順へと視線をやる。

「逃げましょう」

即断であった。

高順からすれば匈奴と戦ったところで旨味も何もない。

というよりか、陳宮を入れても6人という戦力で街に攻め寄せてくるような数の匈奴と戦えるとは到底思えない。

「おいおい、住民を見捨てるのかよ？ 連中、とてもじゃないが逃げ切れないぜ」

納得いかない、と馬超が問う。

彼女の言い分もある意味もつともだ。

ここで漢族を助ければ異民族への印象……というよりか、高順へ

の印象が良くなる可能性はある。

「何を言っているのです！ 聞けば匈奴は100騎以上の騎馬でもって攻めてきているらしいのですぞ？ ねね以外の皆さんが猛者であつても、回りこまれて袋叩きになるのです！」

高順の意見に賛成する陳宮。

さすがの馬騰も同意見とばかりに頷いている。

おまけに彼女達は馬を持っていない。

そして、たとえ馬がいても、幾ら何でも数に差がありすぎる。

そんな中、華雄が口を開いた。

「彩、逃げるのはいいとしてだ……嫌がらせをするのはアリではないか？」

「嫌がらせなら任せて！」

華雄の言葉に馬岱が手を挙げる。

その言葉に高順はふむ、と顎に手をあて思案する。

いつの間にか外からは喧騒が消えており、彼女が視線をやればそこには人っ子一人いない。

「馬超、さっき逃げ切れなかったのは街中から出られないという意味？ それとも街から出てすぐに追いつかれるという意味？」
「後者だ。老若男女にそれぞれの家財道具なんてお荷物抱えてちゃ、すぐに追いつかれるだろう」

なるほどなるほど、と高順は頷く。

「さっきの発言撤回。これなら勝てるわ」

まさかの発言に誰もが皆、目を丸くする。
嫌がらせを提案した華雄、それにのった馬岱も所詮は時間稼ぎのつもりであった。

「騎兵は平地での野戦においては最強だけでも、市街戦ではどうかしらね……」

怪しく笑う高順に一同、一步後ずさる。

彼女はやる気であった。

つい先程、逃げようと言っていたとは到底思えない。

朝令暮改は忌むべきことだが、それでもやれるならやってしまおう、というのが高順であった。

そして、市街戦はこの時代では勿論、21世紀の米軍ですらもやりたくない戦闘の一つだったりする。

何しろ、家屋の一つ一つが拠点となり、それらを一つずつ制圧していくという極めてまどろっこしい戦闘なのだ。

しかも、どこから攻撃されるか分からない為に攻撃側は神経を張り詰めっぱなしとなり、精神的にも疲弊する。

まあ、火でもって街ごと焼き払う、という手段もとれるのだが、今回攻めてくる匈奴は略奪が目的なのでそんなことはできない。

慌てて逃げ出したが故に残っている物も多いのだ。

「馬超と馬岱は通りの中心に落とし穴を掘って。通りの幅一杯に。その後は適当な家屋に隠れて」

2人が心得た、と頷いたのを確認し、高順は続ける。

「寿成殿と嵐は敵がやってくる門の付近に隠れ潜んで、敵の先頭が落とし穴に落ちたときに飛びかかる。で、2人が出た後に馬超と馬岱が家屋から飛びかかる」

「偵察も私と寿成殿が？」

華雄の問いかけに高順は頷く。

「四方にある門のうち、どの門からやってくるか連絡を。まあ、さっきの叫んだ輩がやってきた方角からだと思っけども」
「わかった。では早速行ってこよう」

華雄は頷き、馬騰に目配せ。

心得た、と馬騰は頷き2人は部屋から出ていった。

「ついにたんぽぽの悪戯が日の目を……！」

「蒲公英、さつさと行くぞ」

馬超に引つ張られて怪しく笑う馬岱が部屋を出ていった。
残ったのは陳宮と高順。

「高順殿とねねはどうするのです？」

「陳宮を1人にするわけにもいかないから、私とここで留守番」

高順の判断を臆病と見るか否かは人それぞれだ。

とはいえ、無防備な陳宮を1人にするわけにもいかないのは確か。

高順がぼんぼん、と自分の膝を叩けば陳宮はおずおずと彼女に近寄り、そしてその膝の上に座った。

陳宮の帽子を取って横に置き、彼女の頭を優しく撫でる。

さわり心地の良い髪に高順は頬を緩ませる。

対する陳宮も何だか母親に抱っこされている気分となり、遠い故郷のことを思い出す。

村を出されたのは辛いが、それでも懐かしかった。

「なあ！」

唐突にそんな声が窓の外から響いた。

高順と陳宮が窓から顔を出せば眼下には馬超と見慣れぬ赤髪に褐色肌の女の子。

その女の子の手にはどこかで見たような武器がある。

「こいつが街中で残ってて、何でも匈奴退治をするって言ってるんだけど！」

赤髪の子が視線を上げ、高順のものとかち合う。

「……あなた、名前は？」

高順の問いに女の子は呟くように答える。

「呂奉先」

まさかの人物の登場に高順は後ろにひっくり返った。

「高順殿！？ 傷は浅いですよー！」

慌てて陳宮は高順を抱き起こそうとするが、その身長差から中々彼女の体を起こせない。

何やってるんだ、と馬超は呂奉先——呂布の手を引っ張って宿に駆け込んだ。

「いや、面目ないわ……」

そう謝る高順。

呂布が并州出身だとは知っていたものの、まさかこんなところで出くわすとは彼女からすれば予想外であった。

もっとも、陳宮が出てきたときも予想外であったのだが。

「で、こいつどうすんだ？　一見ただけだとぼーっとしてて戦闘なんてできそうにないんだが」

馬超の言葉ももっともで知っている高順ですらも、呂布は木陰で昼寝しているのが似合いそうな女の子にしか見えない。

「大丈夫。恋、強い」

「強いつて言われてもなあ……」

がしがし、と頭をかく馬超。

「どうするのです？」

陳宮の問いに高順は一も二もなく、呂布の両手を握り、頭を深く下げた。

まさかの光景に馬超も陳宮も目を丸くする。

「ご協力、お願いします！」

呂布はその勢いに僅かに驚いた。
彼女にはこうやって誰かに頭を下げられ、お願いされる経験は無い。

初めてのことに彼女は戸惑いつつも、ゆっくりと込み上げてくる感じたことのない高ぶり。

誰かに期待されると心地良い、ということを経験は初めて知った。

「わかった。恋に任せて」

その言葉は短いが、力強い。

「ありがとう……馬超、彼女もあなたのところで。作戦を説明してあげて」

「わかった。まあ、お前がそう言うならコイツは強いんだろうから期待しておく」

「この大陸で1対1なら彼女より上の輩はいないと思う」

そこまで言うか、と馬超は驚きつつも呂布を見る。

視線を向けられた方は僅かに首を傾げる。

「……どうにも調子が狂うなあ」

盛大な溜息を吐きつつ、再び呂布の手を取り、馬超は部屋から出ていった。

「高順殿、奉先殿は強いのです？　ねねにはどうもそうは思えないのです……」

困惑した様子で問いかける陳宮。

「かつて存在した飛將軍と同じ程度には強いと思う。是非とも私の家臣となつて欲しい」

史実などを知っている高順からすればその史実通りの呂布であれば遠慮願いたいところだが、どうにもこの世界の呂布は裏切るようには見えない。

であればこそ、將軍として是非とも欲しいところだ。

そして、高順はあることに気がついた。

馬一族を除けば集まっている面々が全員史実の董卓軍の人物であることに。

これ、反董卓連合とか組まれたりしないよね、と思わず彼女は心配してしまう。

「高順殿？」

陳宮は高順の胸中を察したのか、心配そうな顔で彼女を見つめていた。

「何でもない」

そう言い、彼女は陳宮を再び膝の上へと招き寄せ、頭を撫で始める。

そんな彼女に陳宮はぎゅっと抱きつき、そこで気がついた。

「……高順殿、何だか変な匂いがするのです」

「気のせい」

そういえば後処理してなかったなあ、とすっかり忘れていた高順であった。

それから1刻後、匈奴と戦端が開かれたが、戦闘は極めて順調に推移した。

落とし穴に落ちて不意を突かれた先頭集団、それを見、後方より襲い掛かる馬騰と華雄。

後方に気が取られた瞬間に横から飛び出してくる馬超、馬岱、呂布。

幾ら匈奴が数で上回っていても大通りに追い込まれ、前方には落とし穴、後方と側方からの奇襲である。

機動力という最大の長所を封じられた状態で一騎当千の猛者に襲われてはどうにもならなかった。

故に敵の指揮官はこれは拙い、と全滅する前に降伏したのだった。

「げえっ！ 高順！」

捕まえた敵の指揮官である女性に高順が名乗ったら、そんな反応が返ってきた。

「傷ついた。謝罪と賠償を請求する……って何を言わせるのよ」

高順はそう返しつつ、女性のほっぺたをつんつんと突つつく。

「いや、だって……お前、あの高順だろ？ 10倍以上の官軍を打ち破ったっていう」

つつかれながらそう答える女性。

そんな彼女の言葉に華雄は咳払い。

私を忘れるな、とさりげない自己主張。

「私はあくまで全体の指揮を取っただけで、直接の勝因となったのはこっちの華雄よ」

「げえっ！ 華雄！」

そう紹介したら先ほどと同じ反応。

その反応に華雄は満足気に頷いている。

「で、こっちがその官軍の指揮官だった馬寿成殿」

「あのときは輜重隊と伝令を潰されてどうにもならなかった」

うんうん、と過去を思い出し頷く馬騰。

「……勝てるわけないだろう。というか、何でこんなところにいるんだ！」

彼女の叫びももつともだ。

好き好んで異民族が漢族の街にいく、とは思わない。
しかもそれがあの高順に華雄だ。

「冀州南皮の袁家に行こうとしているところなのよ」

「袁家に？」

「そうよ。あ、もしかしたら将来、どこかで旗揚げするかもしれないから、そのときは交易とかよろしく」

その言葉に女性は声のトーンを落として尋ねた。

「……羌族が征服するのか？」

「いえ、これは私の独断だし、そもそも私の形式的な部下で羌族は華雄しかいない。あとは漢族よ」

「だが、お前がとれば羌族がとったことになるだろう？」

「私としてはあなた方とも仲良くしたいのだけでも。その方が何より儲かる……ただ、最近は匈奴もよろしくないんでしょう？」

高順の問いかけに女性は隠しても無駄か、と悟り、言葉を紡ぐ。

「鮮卑の檀石槐が台頭して以降、うちはやられ放題だ。烏丸は袁家と友好関係にあり、うちも袁家とはそれなりに仲が良いから烏丸と一応は平和な状態だ。で、その鮮卑の連中はどことも手を結んでいない」

だが、と彼女は言葉を続ける。

「お前や華雄なら話は別だ。伝え聞けば烏丸や鮮卑にもその名が轟いているとか。ならば、漢族では成し得ない、鮮卑との協力関係も築けるかもしれない」

「まあ、どうなるかは分からないのが世の常」

そう言い、高順は女性の縄を切る。

「つて、おい、いいのかよ!？」

まさかの行動に馬超が驚くが、高順は涼しい顔で返す。

「物資が足りないなら袁家の賈文和っていうのを尋ねなさい。高順から言われてきたって言えば何とかしてくれるわ」

対価も物凄いだろうけど、と心の中で高順は呟いておく。

「うちが蝗害だということを知っていたのか？」

「いえ。ただ最近になって并州に何度も大規模な略奪を行なっているらしいから、食糧とかそういうのが不足しているんだと思ったのよ。略奪ってほら、小遣い稼ぎみたいなもんでしょ？」

「……恐ろしい奴だ」

「マトモな頭を持っていれば誰だって気づくと思うけども」

高順のその言葉に気づかなかった面々——呂布以外の者が落ち込む。

「というか、高順。お前、さり気なく情報収集しているんだな」

馬騰は呆れたような感心したような、微妙な顔だ。
そんな彼女に高順は不思議そうな顔をする。

「街中を歩いていればどこが襲われたとかそういうものが聞こえてくるでしょ？ それを統合すればだいたい見えてくるわ」
「いや、普通できないから」

馬騰のツツコミにうんうんと頷く面々。

さしもの華雄も戦場以外でそこまでは気を払うことはできなかった。

なお、2名は反応が違った。

「勉強になるのです」

「……お腹空いた」

陳宮と呂布だ。

陳宮はともかくとして、呂布は色々な意味でマイペースだ。
こういうところがある意味、史実などの呂布に通じるところかもしれない。

「ともあれ、生き残りを連れてさっさと戻って私のことを伝えて頂戴」

高順の言葉に女性は私達が攻撃したんだよな、と思わず困惑してしまったのは言うまでもなかった。

彼女の家臣（前書き）

独自設定・解釈あり。

彼女の家臣

「……さすがの私もこれは予想できなかった」

「これを予想できるなら占い師でもやった方がいいな」

高順の言葉に華雄が答える。

今、2人の目の前にはとんでもない連中がいる。

山と積まれた料理が恐ろしい勢いで消えていく。

その体のどこにそんなだけ入るんだ、と物理的にあり得ない量がたった5人の少女の腹に収まっていく様は一種の怪談のようなもの。

「奉先も大食いだったか……」

華雄の呟きに頷く高順。

呂布はともかくとして、これまでの旅路で陳宮が大食いであることが発覚したが、中々に意外であった。

成長期なのかもしれない。

今、一行は酒家で堂々と食事をとっていた。

彼女達は匈奴がきた街から移動していない。

匈奴がいなくなったことを悟った住民達が戻り、そこに残っていた高順達。

状況から見て追っ払ったことは明白であったが、匈奴ではないものの、高順と華雄は異民族であることは間違いない。

しかし、匈奴を追っ払ってくれた恩人でもあることから、どうしたものか、と街の顔役達が話し合い、街での滞在を許可された。

嫌悪感丸出しの住民達も恩人ではあるので、マトモに物を売った

り、こうして食事ができたり、とそういった意味で良い待遇をして
くれている。

ちなみにだが、匈奴退治のときは呂布とは自己紹介すらもして
おらず、そのまま顔役との会合、そして酒家で食事となっている。

「どうして？」

食事が終わったのか、呂布はレンゲを置いて問いかけた。
主語がない問いに高順も華雄も首を傾げる。
その様子に呂布は更に問いかける。

「2人共、いい奴。なぜ嫌われてるの？」

呂布の純粋な問いに答えたのは2人ではなく、2人の様子を見て
いた周囲の客であった。

「そいつらが異民族だからだ！ 異民族は全部死んじまえ！」

酔っ払った男の言葉。

他の客は誰も否定しない。

「異民族？ 匈奴？」

「私達は羌族よ。そして、私は高順。こっちは華雄」

その言葉に一瞬で酒家は沈黙に包まれた。

高順の名は彼らに悪口を言わせない。

「高順……知ってる。強い奴。でも、お前、そこまで強くない。不
思議」

小首を傾げる呂布。

彼女も20万の大軍を打ち破った高順の名を知っている。だが、彼女が見抜いた高順の実力は自分には及ばない。どうやって大軍を破ったのか、不思議でなかった。

「……私に関しては何も言わないんだな」

肩を落とす華雄を高順はまあまあ、と宥めつつ、口を開く。

「お腹が減っては戦はできない。あなたもそうでしょう?」

高順の言葉に呂布は僅かに頷く。

「じゃあ、ご飯を無くしちゃえば100万だろうが1000万だろうが簡単に倒せるよね?」

「……なるほど」

「それに敵のご飯を奪って自分のご飯にすれば……」

呂布が喉を鳴らす。

「炒飯特盛」

次に出てきた言葉は注文。

どうやらご飯のことを考えたらお腹がまた空いたらしい。

「何とも、独特な奴だな……」

華雄は肩を竦める。

彼女の言葉は密かに聞き耳を立てていた馬騰達の心を代弁してい

た。

会話が一旦途切れたところを見計らい、高順は問いかける。

「あなた、私達と来ない？ 三食のご飯をしつかり出すから」

「……セキトも一緒なら」

「了承。私は高順、よろしくね」

即答であった。

「真名。恋」

呂布の言葉にああ、と高順は告げる。

「彩」

そう言い、高順は手を呂布の前に差し出した。

呂布はその意味が分からないのか、上目遣いで高順を見つめ、僅かに首を傾げる。

真正面からその偉大なる一撃を頂いた高順は僅かによろめくが、何とか踏みとどまった。

「握手。信頼の証」

そう言えば、呂布はゆっくりと高順の手を握る。

「……いや、お前が主だから何も言わないが、少しくらいは相談しても……」

そう呟きつつ、華雄がジト目でその様子を見守る。

華雄はこの面々の中で一番早くから高順と共にいる。

故に最古参である自分に一言言っただけだった。

早い話が拗ねているのだ。

ぶすつとした顔の華雄に高順は思わず笑ってしまう。

「嵐は可愛いわね」

そう言いつつ、高順は華雄を抱き寄せる。

いつもは受けな彼女の積極的攻勢に華雄はやや戸惑いつつも、態度を崩さない。

しかし、それも高順が華雄の耳元で囁いた言葉で陥落してしまう。

「今夜はいっぱい鳴かせてあげる」

一瞬で顔が真っ赤に染まった華雄。

彼女の中ではもはや呂布どころの騒ぎではない。

「でえきてえるう」

「気色悪い声だすな！」

妙な声を出した馬岱に馬超はげんこつを食らわせ、馬騰はやはりそういう関係だったか、と頷き……

「高順殿……ねねは……ねねは……」

何だか悲しそうな陳宮がいた。

そして、そんな騒ぎは知らない、とばかりに呂布はやってきた特盛炒飯の征服にかかっていた。

「ところで高順。たんぽぽ達とは真名を交換しないの？ 奉先だけずるいー」

ぶーっと頬を膨らませる馬岱。

「いや、客将だし……」

そう言いつつ、馬騰へ視線をやる高順。

その視線を受けた彼女は笑みを浮かべる。

「絶対に必要な人と言われてしまったからな。本音も聞けたし、正式に仕官してやろう」

「ねねが言うのも何ですが……そんな簡単に決めていいのです？」

「人生で大事なことは面白いかどうかだ」

馬騰はそう言って陳宮の頭をがしがしと撫でてやる。

撫でられた方はやめるのです、ともがいている。

「改めて……姓は馬、名は騰、字は寿成、真名は燦」

朗々と彼女は名乗り上げた。

周囲の客達はもはやどう反応していいか分からず、ただただ事態の推移を見守るばかり。

なぜ、高順と馬騰が行動を共にしているのか……事情を知らねばさっぱり理解できない。

「我が名は姓は馬、名は超、字は孟起、真名は翠」

馬超もまた名乗り上げるが、口の端にご飯粒がついており、台無しである。

高順も華雄もそこらへんは見なかったことにした。

「たんぽぽは姓は馬、名は岱、字は伯瞻、真名は蒲公英！」

それらを受け、華雄がまず口を開いた。

「華雄だ。真名は嵐」

名乗った彼女に高順は視線を向けるが、華雄は微笑みを返す。

「真名、いいの？」

「構わん。これまでの旅でこいつらは信頼できると思うしな」

なるほど、と頷き高順もまた告げる。

「高順よ。真名は彩」

「ねねを忘れてもらっては困るのですぞー！ 姓は陳、名は宮、字は公台、真名は音々音なのです！」

高順が名乗って流れ的に終わってしまいそうなところに陳宮が割り込んでくる。

「……恋」

いつの間にか炒飯を食べ終えていた呂布が呟くように言った。
うんうん、と満足そうに高順は頷く。

「で、盛り上がっているところ悪いんだけど、皆さんが呆気に取られてるし、迷惑だからさっさと戻りましょう」

高順のあんまりといえばあんまりな言葉に馬騰がすかさず口を挟む。

「いや、槍を捧げたりとかそういうことをしてもいいんじゃないか？」

「営業妨害は忌むべきことよ」

そう言いつつ、高順は巾着袋から銭の束を取り出す。

真ん中に空いている穴に紐を通し、100枚ずつの束だ。

「迷惑料込みでこれだけで」

合計5束、500銭を店主へ渡す。

1銭はおよそ100円程度なので現代日本円換算で5万円だ。

「こ、こんなに!?!」

「お釣りはとつといて」

一度は言ってみたかったその言葉を言え、高順は微妙に機嫌が良くなる。

「ほらほら、お腹一杯になったらさっさと行くわよ」

高順の言葉に立ち上がる面々。

「邪魔したわね」

そう言い、高順は一同を引き連れ、酒家から出ていった。

彼女達が出ていった後、店主はぽつりと呟く。

「……意外と悪い奴じゃないのか」

その手に握られた銭はずしりと重かった。

出した料理の代金を補ってなお余りある量だ。

「さっき俺はああ言ったが……異民族全部が全部、悪虐非道な連中じゃないのかもしれない……」

やや酔いが抜けた男が頭をかきながらそう言った。

酔った勢いとはいえ、彼の知る異民族にあんなことを言ったら、激昂して斬り殺されてもおかしくはない。

こうして高順達は地味に評判を上げたのだった。

酒家から出た一行は宿へと舞い戻った。

同行者が1名増えた為に今までの2部屋からもう一つ部屋を借りる。

山賊達から巻き上げている為に意外と路銀に余裕はある。

なお宿に入る際、どこからともなく現れた犬を呂布が抱え上げ、その犬を皆に紹介するということが起こったものの、それ以外は特

に何もなかった。

そして、1つの部屋に集まってこれからのこと……目的は変わらず冀州南皮だが、そこに至るまでの細々としたところについて話し合うこととなった。

「個人的には途中で陳留に寄りたかったり」

「それなら洛陽見物もできる経路があるが……」

そう言い、ちらりと高順へ視線を送る馬騰。

案の定、高順は目を輝かせている。

「洛陽に行った後、黄河で船に乗って陳留近くの港で降りて陳留見物したら、また黄河で今度は南皮まで行く」

「それで決定……と言いたいところだけど、船酔いは大丈夫？ 特にねね」

話を振られた陳宮はというと、自信なさそうな顔をしている。

「ねねはその、船に乗ったことがないのです。だから心配なのです」というか、私達も乗ったことがないと思うんだが？」

華雄の的確なツッコミに高順は心配いらぬ理由を述べる。

「ねね以外の全員は馬で長時間やんちゃする。船より馬の方が遥かに揺れるでしょ？」

「道理だな。だが、万が一、全員船酔いで倒れたとあっては喜劇にもならんぞ」

「でもね、嵐。今後、水上戦……いえ、もったかつこよく言えば艦隊決戦があってもおかしくないでしょ？」

ピクリ、と華雄の体が震えた。

船のことなんぞさっぱりわからない華雄をしても、艦隊決戦という響きはそれほどまでに甘美なもの。

またその証拠にセキトと戯れている呂布を除いた他の面々も思い思いに空想し、危ない笑みを浮かべている。

「艦隊決戦の為には当然、船に慣れておかないと……こう、敵艦隊撃滅とか敵艦撃沈とかそういうこと、言ってみたいし聞いてみたいでしょ？」

こくこく、と華雄は首を縦に振る。

ちなみにだが……高順は当然海戦についても学んでいたりする。彼女としても艦隊決戦はやってみたい、という個人的願望があった。

「なら決まりね。一応、船酔いに効く薬とか買っておきましょうか」

その願いが実現するかどうかはさておいて、馬騰の提案は満場一致で受け入れられたのだった。

だが、高順は忘れていた。

彼女の最も信頼する軍師が南皮で首を長くして待っていることに寄り道することでガミガミ言われるのはもはや確定したようなものであった。

一方その頃、陳留ではある少女が報告を聞き、微笑んだ。
未だ幼いながらも太守として赴任して早半年。

ようやく詳細な街の現状が分かり、街の発展の為に動き出した
真つ最中。

頼れる身内が多いために今のところは順調だが、将来的にはもつ
と人材を集めねばならない、と思っていたところによってきたその
報告。

「あの高順が、華雄が、并州で目撃された……」

報告によれば住民から嫌われながらも片っ端から山賊を退治しつ
つ、東へ進んでいるらしい。

普通なら恐れるところだが、少女は違う。

彼女にとって有能であれば異民族だろうが何だろうが全く関係が
ない。

そもそも、住民が嫌っているのは単なる先入観である、と容易に
少女には判断できた。

高順達は住民を手にかかけたり、略奪をしたりしていない。
それが何よりの証拠だ。

「現状、欲しいのは文官……無論、彼女達の力は来るべき戦乱の為
に必要……」

だけでも、と彼女は続ける。

「今、手に入れるのは朝廷に要らぬ疑いをかけられるわね。ならば、友好的な関係を結んでおくべきか」

だが、と少女は続ける。

「問題はどうかやって会うか。彼女達がどこにいるか、きつかけはど
うするか……」

自ら会う、というのも中々に問題だ。

涼州以外で羌族と太守が会えば、それだけで疑いをかけられるに
は十分過ぎる。

「賊を利用するか……」

徐々にはあるが、賊となる農民は増えつつある。

それは悲しい事だが、少女の周辺でも同じ事。

だが、それすら利用すれば良い……そう彼女は考えた。

「使いを出し、賊退治の義勇軍として協力してもらいましょう」

断られたら断られたで、徹底的に追いかけて密会をすれば良い。
勿論、密会の時期は今ではなく、もっと世が乱れたそのときに。

とにもかくにも、自らの存在を知らせておくことが肝心であった。
少女は部屋の外にいるだろう兵に告げる。

「夏侯惇と夏侯淵を呼んできなさい」

面白くなりそうね、と少女――曹操は笑みを浮かべたのだった。

客将達（前書き）

独自設定・解釈あり。

客将達

「詠さん、今日は良い天気ですね」

にこにこ笑みを浮かべている袁紹。
そんな彼女に対して、賈？は告げる。

「単刀直入に言ってもらえませんか？」

「あら、心の準備はよろしいんですの？」

せつかく時間をあげたのに、と言いたげな袁紹。

とはいえ、賈？にとっても此度の呼び出しは予想がついていることだ。

「災害用の食糧等の備蓄は目を瞑りましょう」

ですが、と彼女は続ける。

「馬車は少々いただけませんわ。聞けば1000台にも及ぶ馬車を
作っているそうではありませんか？」

「災害対策用です。迅速に被災地に運ぶ為にはそれくらい必要かと」

「ええ、ええ、それはわかりますわ。ですが、それだけじゃないで
しょう？」

袁紹の問いに賈？は涼しい顔で答える。

「知りません」

きつぱりと言い切る彼女に袁紹はいつもの高笑いではなく、鈴のようにこころと笑いながら告げる。

「我が袁家は高順殿への支援を惜しみません。そちらから請求されればそれに答えねばなりません」

賈？の瞳をまっすぐに見据え、袁紹は告げる。

「あなたが動いて掻き集めている膨大な災害対策用の物資……それを援助物資として請求されれば我々はそれを提供しないといけませんね」

袁紹としてはお手並み拝見とばかりにわくわくとした心境であった。

この詰みの一手からどういう切り返しをしてくるか……

この程度返せない賈文和でないことを彼女はよく知っていた。

「確かにそういうこともあるかもしれませんが。ですが、我々はそれを請求しないかもしれません。であればこそ、災害対策用として集めている物資は無駄にはなりません」

袁紹は巧い切り返しに思わず感心してしまう。

そう、彼女は請求するものと決めつけていたが、高順側にとっては請求しない、という選択肢もあるのだ。

ならばこそ、災害対策用として備蓄している物資はそのままの用途に使える。

状況的にも感情的にも請求されるだろうことは袁紹にも分かる。だが、それをただ口に出すだけでは賈？にあつという間に論破さ

れて終わってしまふ。

あくまで冷静に、そして論理的に。

それができねば到底当主や軍師などではない。

「確かに請求しない、という選択肢もそちら側にありますわ。それがされず、いざ災害が生じたときに物資を放出すれば袁家の評判はますます上がりますね」

うんうん、と袁紹は頷く。

賈？は次に出てくる要求を予想し、考えられるどんな要求が出てきても対応できることに内心ほくそ笑む。

「ですが、袁家の財力は膨大といえど、そもその流通している食糧が減って飢餓を引き起こしては意味がありません」

「農政について口出ししても良い、と？」

「ええ、構いません。ただし、1人では大変でしょうから、顔良さんを助手につけます」

明確な監視役だが、賈？は全く狼狽えない。

顔良程度なら口でいくらでも言いくるめられるからだ。

「経過報告などは田豊さんにしてくださいね」

予想通りの展開に賈？は僅かに笑みを浮かべる。

実質的な監視役は田豊、顔良はただの囿であることが明白であった。

「ああ、それと」

袁紹は更に言葉を続ける。

「私の実妹と言っても過言ではない、袁術さんの教育を頼めますか？ あなたに」

「……はい？」

さしもの賈？も予想外の展開に目を丸くしてしまった。

有能とはいえ、彼女の身分は客將に過ぎない。

袁術をだまぐらかして袁家を食い物にしよう、とそういうことがありうるかもしれないのだ。

もっとも、既に袁紹をだまぐらかして食い物にしているような気がするが。

「ああ、ようやく一本とれましたわ」

そう言い、勝利の高笑いをする袁紹であった。

高順一行は洛陽に到着し、お馴染みの外套被って城門を突破しよ

うかと思ったものの、門番に咎められ外套を脱がないと入れさせない、と言われた。

さすがに帝の膝下となれば警備も厳しいようだ。

高順と華雄は外で待つ、と言ったが、それに関しては呂布と馬岱、陳宮が反対した。

2人からすればちょうど良く色々発散できる機会で一石二鳥であったのだが、彼女らの好意をむげにできない。

そんなこんなで一行は洛陽を素通りし、陳留にやってきていた。そして、陳留へと入ろうとする際、高順は外套を脱ぐ。

門番達は酷く驚き、何人かが連絡の為に街中へと走っていった。

まさかの行動に馬騰が問いかける。

「いいのか？」

「私の予想が確かなら、曹孟徳は治安の為にという理由をつけて表向きは拘束してくる」

表向きは、というところを強調した高順に馬超はどうしてだ、と尋ねた。

「彼女は有能な人材を集めるのが好きなの。有能であれば異民族だろうが何だろうが関係ないっていう人の筈」

そうなのか、と呂布を除いて頷く一同。

そのとき、慌ただしくこちらにやってくる一団を彼女らは発見した。

先頭にいるのは青髪の女性。

彼女は高順達の近くまでやってくると声を掛けた。

「あなた方は高順殿、華雄殿で相違ありませんか？」

いかにも、と頷く2人。

「私は姓は夏侯、名は淵、字は妙才と申します。我が主、曹孟徳様がお会いしたいとのこと。民を不安にさせぬの為にも同行願いたい」

そう言う彼女に言ったとおりになったでしょ、と華雄達にウィンクしてみせる高順だった。

高順達は陳留の城へと案内され、その謁見の間に通された。

そこで夏侯淵は曹操を呼んでくる、と奥に引っ込んだ。

「呼びつけておいて待たせるのかよ」

ぶー垂れる馬超に馬騰が言う。

「こういうのは様式美っていうのがあってだな……客が余程の大物でもない限り、少しだけ待たせてから登場した方が相手に舐められ

ないんだ」

「そついうもんなのか」

「そついうもんだ」

いまいち納得できていない馬超だが、それきり口を閉じた。

そのやり取りから数分後、長い黒髪の女性が金髪の少女を従えて入ってきた。

一応身分としては下であるので高順達は礼を尽くす。

その黒髪の女性は高い位置にある玉座に座り、少女がその横に控える。

「私が曹孟徳だ」

黒髪の女性がそう言い、更に言葉を続ける。

「高順殿、此度はよく陳留に立ち寄ってくれた」

その物言いに誰もが皆、彼女を曹操だと思っているのだろう。

馬騰は確かに漢においてそれなりに重要な地位にあったが、そもそもまだ一太守に過ぎない曹操を知っているわけもない。

故に彼女もまた目の前の女性を曹操だと信じた。

だが、高順だけは妙に引かなかった。

彼女の知識に加え、これまで培った経験が警鐘を鳴らした。

曹操は背が小さかった筈なのだ。

確かに彼女の知る三国志とは似ても似つかぬとはいえ、ある程度の判断基準としては通用する。

ならば、と高順は提案した。

「曹孟徳殿は才氣溢れる方と存じます。ならばこそ、是非ともその腕前を披露していただきたく」

そう言いつつ、高順はまっすぐに女性の目を見据えた。

彼女はその視線を真っ向から受け、頷く。

そして、高順は女性が何か言う前に素早く告げる。

「私は詩について大変興味がございます。ですので、是非とも曹孟徳殿の詩を一つ、この場で披露していただきたい」

にわかに女性の表情がこわばった。

視線はあちこちを彷徨った挙句、最終的に控える少女に向け、助けを求めているようだ。

「何をお困りか。あなたが真に曹孟徳殿であるならばその程度は極めて簡単なことの筈ですが……それとも、まさかあなたは偽物か？ならば、賊として処理しましょうぞ」

高順はそう言いつつ、視線を金髪の少女へと向ける。

そして、声には出さずに口を動かし、少女へと伝える。

あなたが曹孟徳だ、と。

少女は不敵な笑みを浮かべ、口を開いた。

「私が曹孟徳よ。試すような真似をして悪かったわね」

威圧感とでもいうべきものが、高順達に襲いかかる。

歴戦武人である馬騰や呂布すらも僅かに身じろぐ程度。

華雄や馬超、馬岱は冷や汗が滴り落ち、陳宮は体を震わせていた。

そんな中、唯一高順は曹孟徳についての予備知識があつたが故にそれを平然と受け流した。

全く動じていない高順に曹操は面白い、とばかりに口元を吊り上げる。

「孟徳殿、子供を怯えさせて……それでもあなたは上に立つ者ですか？」

故に高順の言葉は不意打ちとなつた。

そういう方向からの攻撃は曹操としても予想外であり、一気に毒気を抜かれてしまった。

「いえ、こちらとしても本意ではなかったわ」

そう言い、曹操はこほん、と咳払い一つ。

「改めて、私は姓は曹、名は操、字は孟徳。高順殿、華雄殿、あなた方には是非とも会ってみたいと思つていたの」

そう言い、彼女は玉座に座る。

ある意味、これ以上無いほどにお似合いの場所であつた。

「私個人としても、あなたには是非ともお会いしたい、と思つておりました」

「ええ……で、一つ疑問があるのだけでも……何で馬一族があなたと一緒にいるのかしら？」

さすがの曹操も、どうしてそうなったのか、さっぱりわからなかった。

「簡単に言えば、彼女達を私が登用しました」

「よく納得したわね」

「口も達者ですのう」

詳しい経緯を馬鹿正直に説明するのは馬騰を傷つけることになるが故の返答。

曹操もそこらは重々承知な為に高順の言葉に更なる追求はしない。

「ところで、私はその夏侯惇や夏侯淵にあなた方に使者を出すよう命じたのだけでも……」

そう言いつつ、横にいる黒髪の女性へ視線を向ける曹操。

「使者の方には会っていませんが……我々は洛陽に行き、そこから黄河を下ってきたので」

この時代、目当ての相手と連絡を取るのも一苦労である。

「孟徳様、私や秋蘭……失礼、夏侯淵は并州へと使いを出したので、おそらく入れ違いになってしまったかと」

「なるほどね。ま、どちらにせよあなた方がこうして私の目の前にいるのだから、問題ないわ」

そこで言葉を切り、曹操はじつくりと一同を見回す。

値踏みするかのような視線だが、今まで嫌悪にさらされていた一行からすればこの程度どうということはない。

「ところで……恥ずかしいことに私のところは人手不足なのよ。じわじわと賊も増えつつあるし」

「力を貸して欲しい、と？」

「話が早いわ。で、どうかしら？ 報酬も十分に出すわ」
「承りました」

高順の即答に曹操はやや驚く。

「他の者と相談しなくても？」

「私は一応、彼女らの主なので」

華雄はともかく、馬一族や他の2人はどう見ても漢族である。

そんな彼女らは高順の物言いに表情を変えていない。

どころか、褐色肌の赤髪少女なんぞは今にも眠りそうな程にうつとしているのを曹操は発見した。

個性的な家臣を統率するのも主君の仕事といえはそれまでだが、それでも彼女は高順に少しだけ同情した。

「……ともかく、ゆっくりと休んで頂戴。夏侯惇、彼女らを客室に案内なさい」

曹操はそう命じると謁見の間から出ていった。

主が出ていったことを確認すると、夏侯惇は相好を崩した。

「いや、済まなかったな。孟徳様はどうにも一捻りいれないと気が済まない方で」

そう言いつつ、彼女は名乗る。

それに高順達もそれぞれが名乗り返す。

自己紹介が済んだところで夏侯惇の案内で部屋へと向かう。

道中、彼女は色々な話をし、高順達を楽しませた。

気さくな夏侯惇に陳宮や馬岱はすっかり懐いてしまい、懐かれた方も満更ではないようだ。

対して少々不満なのが高順と華雄。

それぞれの妹分を取られてしまい、ふくれっ面の2人に馬騰と马超が大爆笑。

終始、和やかな雰囲気であった。

そんなこんなで彼女達は曹操の客将となった。

勿論、高順は冀州にいる董卓達について忘れておらず、抜かりなく手紙を書いた。

董卓、賈？、張遼へそれぞれ手紙を書き、更に賈？には要望書もついでに添えて。

また、お世話になっている袁紹にも礼状を書いておく。

返事が楽しみだ、と呑気に思う高順は董卓と賈？がどれほど再会を待ち望んでいるのか、知るべくもなかった。

そのとき歴史が動いた（前書き）

独自設定・解釈あり。

そのとき歴史が動いた

曹操の下でお手伝い……というよりか、見学したり、簡単な事務仕事をしたり、偶に夏侯惇と手合わせして過ごす高順達。

その中で唯一、陳宮を曹操がちょうどいいと小間使い兼文官見習いとして使っていた。

そうだったのも、人手が足りない、と曹操は言ったが、陳宮を除けばどうしてもいつも武官である、と分かっていたが故だ。

彼女らは確かに事務仕事もできるかもしれないが、それでも政ができるとは到底曹操には思えなかった。

そして、その武官は賊が出てくれないと働かせる場所がない。

平時において武官の活躍の場所といえば、兵の訓練や警邏くらいなものであるが、常備軍という構想こそあったものの、曹操は財政上の理由からそれをまだ実施していない。

故に賊が現れたらその都度、募兵して適当に訓練した後には武官が率いる、という他の諸侯と同じような体制であった。

強いて他と違つところを上げるならば親衛隊の存在だ。
真つ黒な鎧で統一されたその部隊は曹操の趣味と実益を兼ねた部隊であり、隊員は全員女の子である。

ともあれ、そんな隊を客将に任せるわけにもいかない。

そんなわけに残った仕事は警邏となるわけだが、何分、陳宮と呂布以外は訳ありである。

高順と華雄が警邏なんぞした日には住民達が恐慌状態に陥り、馬騰達は馬騰達で色々つつかれたくない過去がある。

陳宮は曹操自らが使っている。

となれば呂布になるが……色々な意味で不安になった曹操は何も言わなかった。

無論、給料もそれに応じて結構低いのだが、元々路銀には苦労していなかった面々だ。

そのことについては文句はない。

そんなわけで高順達は暇をしているのである。

故に高順は彼女と関係を深めようと暇を見つけて馬超をお茶に誘うことにした。

最近加入した呂布を除けば、最も関係が浅いのが彼女であったからだ。

「いやー悪いなー」

そう言いつつ、ばくばくと点心を食べる馬超。

城内にある食堂なのだが、格安ということもあってよく食べる。勿論、高順のおごりである。

「で、翠。今日、誘ったのは他でもないんだけど」
「んー？」

もぐもぐ馬超。

「ほら、私とあなたってあんまりお話したことなかったじゃない？」
「そーいえばそーだな」

傍にあつたお茶をがぶ飲み。

それで一息ついたのか、馬超は満足気な顔だ。

「まあ、ぶっちゃけて聞くけど……私のこと、嫌い？」

「へ？」

唐突な問いに馬超は鳩が豆鉄砲を食らったような顔となる。

そんな彼女に高順はゆっくりと言葉を紡ぐ。

「馬騰を負かしたこと」

「んー……別に私はどうとも思わないけどなあ」

そう言いつつ、ガシガシと馬超は頭をかく。

「ホントに？」

「ホント。そりゃ、うちの母ちゃんが負けるとは思ってもみなかったけどさ、勝負は時の運とも言っし」

うんうん、と頷く馬超。

そして、彼女は悪戯っぽい笑みを浮かべ、告げる。

「私個人としては今の生活が結構楽しいんだぜ？ 西涼にいた頃も楽しかったけど、何っーか、こっ、広い世界を見て回れる喜びつてやつ？」

それに、と馬超は続ける。

「私だって武人の端くれだから名を上げたいし、虐げられている民とかそういうのを見捨てることもできない。だから、彩の例の連中を打ち倒すっていうのに協力したいし、お前が天下取るっていうな

ら協力するよ。そうすりゃ私の名も勝手に上がる」

どうだ、と得意げな顔の馬超に高順は自然と笑みを浮かべてしま
う。

「まあ、それならいいわ。もし後ろからぐっさりやられたら……」
「待て、何故そこで止める。そして、その笑顔はなんだ」

にここに、とこれ以上ないくらいに笑みを浮かべている高順。
何だか寒気がしてきた馬超。
そして、高順は告げる。

「足の小指を箆笥の角にぶつける刑100万回だったわ」
「痛い痛い」

馬超は本当にぶつけたかのように痛そうな顔をする。
そんな彼女に気を取り直し、高順は言葉を紡ぐ。

「あなたの槍には期待しているわ。錦馬超」

その言葉に馬超は獰猛な笑みを浮かべた。

「いいぜ。存分に期待しとけ」

うん、と満面の笑みで頷く高順はそのまま調子に乗る。
具体的に言えば、馬岱から聞かされていた馬超の面白いリアクシ
ョンを見る為に。

「で、翠ってかっこよくて可愛いよね」
「……なななな!？」

馬超はがたつと椅子を倒して立ち上がる。
その顔は真っ赤。

「なんというか、抱きしめてあげたいし、抱きしめられたいような」
「ばつ馬鹿言つなよ！？ 私よりお前の方が綺麗だろ！」

「あら、私は綺麗とは言つてないけども。かつこよいと可愛い綺麗とは違うわ」

高順のその言葉は馬超に聞こえているのかいないのか。

彼女は顔を真っ赤にし、視線があっちこっちを彷徨っている。
大混乱のようだ。

「わ、わたし！ ちょっと用事があるから！」

そう言うなり猛烈な勢いで食堂から飛び出していこうとして壁にぶつかった。

幾ら頑丈な馬超といえど、タダで済む筈もなく、後ろに倒れてぴくぴくと全身を痙攣させている。

「……錦馬超は芸人なのね」

そんなどうでもいいことを呟きつつ、高順は椅子から立ち上がり、馬超の傍へと歩み寄り、容態を確認。

馬超は完全に伸びてるようだ。

からかい半分、本気半分であった高順は放つて置くわけにもいかないで、馬超を背負って彼女の部屋へと向かった。

ただ寝台に寝かせるだけでは面白くない。

そう考えた高順は寝台に寝かせ、さらに馬超の頭を膝に乗せる。そして、その顔を存分に見る。

「しかし、さすが蒲公英というか……」

高順が馬超と1対1で話すということをどこからか嗅ぎつけた馬超。

彼女が高順に吹き込んだことは馬超に可愛いとかそういうこと言
うと面白いことになる、というもの。

それを実行した結果は高順としては中々に満足のいくものであっ
た。

やられた馬超としてはたまったものではないが、色々な意味で関
係が深まったのは言うまでもない。

「……いつの間にか寝てる」

膝から聞こえてくる寝息。

穏やかな表情だ。

何だかその表情を見ていると高順は穏やかな気持ちになってしま
った。

優しくその頬を撫でてみれば気持ち良いのか、それともくすぐつ
たいのか、顔を少し動かす。

西涼の馬超といえば馬騰と共に羌族にもその名が広まっている歴戦の戦士。

歳は今の高順と同じ13歳程度の筈だが、高順と同じくらいに身長が高い。

見た目だけみれば17、8歳程度に見える。

そんな若さで勇名が広がる馬超が自分の前で無防備な様をさらしているとなると、中々に高順としてはくるものがあつた。

彼女は馬超の手を掴み、まじまじと見つめてみる。

普通の女の子の手だ。

ゴツゴツとしてもいなければ豆だらけでもない。

この綺麗な手は何万……は言い過ぎだが、それでも多くの命を奪い、血に染めているとは到底思えなかった。

「ん……」

その高順の行動がきっかけとなつたのか、馬超が僅かに身動ぎした。

そして、ゆっくりと瞼を開ける。

その視線は少し彷徨つた後に高順の顔を捉えた。

「――！」

変化は劇的であつた。

馬超はすぐさま逃れるよう横へと転がり床へと落ちた。

「……私が言うのも何だけど、もうちょっと突発的なことに対して

冷静に対処した方がいいと思う」

「自分で言うのも何だけど、私もそう思う……」

あいたたた、と後頭部を押さえつつ立ち上がる馬超。

「で、彩。私は可愛くはない」

「翠は可愛い」

真剣な顔で言われたが為に馬超は再び顔を真っ赤にし、一歩後ずさる。

「ど、どこが可愛いか言ってみるよ!」

「髪の中から足の先まで全部」

高順がそう答えれば馬超は奇声を発して飛び上がる。
面白いなあ、と高順は思いつつ。

「さて、私はそろそろ行くわ」

そう言い、彼女は寝台から立ち上がる。

「い、行くって?」

まだ顔が赤い馬超の問い。

「夏侯元讓と戦う約束をしてるのよ」

高順はどちらかといえば頭脳労働派ではあるが、自らの鍛錬にも手を抜いていない。

もっとも、華雄が傍にることから例え高順が嫌がっても、無理

矢理に手合わせさせられるのだが……

それはさておき、高順は陳留に至るまでに陳宮を除く面々と戦闘を重ねており、中々の腕前となっている。

呂布、馬騰、馬超といった面々には敵わないものの、馬岱には勝ち、華雄と互角程度だ。

こうしてみれば上から4番目辺りだが、上位3人がずば抜けているのでこれはしょうがない。

夏侯惇との手合わせと聞き、馬超の表情が変わった。

女の子のそれから、錦馬超と呼ばれる猛将のそれへと。

「私もついて行こう」

城の裏庭にある屋外練兵場。

その一角で夏侯惇は準備運動をしていた。

少数の警護兵や親衛隊を除けば、常備軍としての兵士はいない。

それ故に広い練兵場には夏侯惇と模擬戦の見物客しかおらず、静けさに満ちていた。

その模擬戦の見物客とは言ってもなく、この人であった。

「華琳様、我が武を存分に拝見ください」

2人しかいないが故に夏侯惇が真名で呼ぶ。

そんな彼女に微笑みつつ、やってくる高順に胸を踊らせる。

個人の武勇としては高順はそれほどでもない、と曹操は判断している。

彼女が最も評価するのは明らかな負け戦を勝ち戦にひっくり返す程の粘り強さ、さらに敵方であった馬一族を配下に引き入れてしまう、その懐の広さ。

曹操は客将として迎えて以来、夏侯姉妹は無論のこと、親衛隊や警護兵にも高順について執拗とも言えるほどにその様子を聞いている。

味方となればこれ以上ない程に頼もしいが、敵となればこれほどに厄介な輩もいない、というのが曹操が下した高順への評価。

今、引き込めば色々なところから目をつけられるが、是非とも欲しい……というのが曹操の偽らざる本音。

「きたな」

夏侯惇の言葉に曹操は思考から舞い戻る。

視線を出入り口へと向ければそこには剣を持った高順と自らの得物である十文字槍の銀閃を持っている馬超の姿が。

面白いことになった、と曹操は口元を僅かに歪ませる。

夏侯惇から聞いている。

彼女をしても呂布、馬騰、馬超には敵わない、と。

だが、実際に曹操はその場を見たことはない。

ならばこそ、錦馬超と呼ばれる馬超の戦いも見られるかもしれない、と思っただのだ。

しかし、馬超は高順からそそくさと距離を取った。

あくまで自分はおまけである、と行動で示した形だ。

曹操も見れば儲けもの程度に思っていたので、さほど気にすることもない。

「高順、今日こそ決着をつけよう」

そう言い、夏侯惇はその剣先を高順へと向ける。

「敗北はあなたに与えよう」

そう返し、高順は鞘から剣を抜く。

「……高順、あなたは自分の得物がないの？」

曹操は不思議に思い、問いかける。

高順が持っていた剣は城内の武器庫に置いてあるものと全く同じだ。

「良い得物があれば最良ですが、いつもそれが手元にあるとは限りません」

高順の物言いに曹操は感心してしまう。

そんな彼女を横目に高順は夏侯惇へと剣を向けた。

その剣は相手の得物である七星餓狼と比べたらかなり見劣りする普通の剣であった。

それにも関わらず、夏侯惇の闘志はいささかの衰えもない。

彼女はこれまで数回、高順とやりあっている。

だが、その全てが日暮れまで戦っても勝負がつかなかった。

過去の勝負においても、高順は武器庫にあったものを適当に持つてきて使っている。

得物に差が出るならば、疾うの昔に夏侯惇は高順を打ち倒していなければおかしいのだ。

「参る」

短く夏侯惇が告げた。

瞬間、彼女は一息に前へと駆け、横薙ぎに高順を切り裂かんとする。

それを読んでいたとばかりに高順はその場でしゃがみ、足払いを仕掛けるが、夏侯惇はすぐさま後ろへと飛び退き、再び前へ。

上段からの振り下ろしに高順は半歩横へ移動するだけで回避し、剣を突く。

正確に喉目掛けて突き出されたその一撃を顔を傾けることで回避し、夏侯惇は攻め続ける。

高順は回避に専念する。

彼女も馬鹿力だが、夏侯惇はそれ以上の馬鹿力だ。

それに加えてその得物、七星餓狼は並の剣なら斬ってしまう程。まともによつて勝てる道理はなく、夏侯惇と高順が戦うとき――

否、高順が雑兵以外の者と戦うときは常にこのような形となる。

「馬超、あなたはどつ見る？」

曹操は同じ見物客である馬超に問いかける。

「彩……高順は粘りに粘つて相手の集中が乱れる一瞬の隙を突く。その為なら1刻だろうが2刻だろうが戦い続ける。勿論、雑兵相手ならそんなことせずに力でねじ伏せるけど」

「でしようね。彼女はいつも回避を？」

その問いに馬超は頷く。

「鍛冶屋に頼んでいい得物を作ってもらつてよく言つたんだが、異民族の私にそうしてくれるとは思えないってさ。あいつもそういう得物を持てば回避一辺倒だけじゃなく、受けることもできるんだが……」

なるほど、と曹操は頷きつつ、勝負の行方を見守る。

長丁場になりそうだが、彼女はしっかりと見るつもりであった。

剣が空気を斬り裂く音が響く。

試合開始から既に1刻。

未だに勝負はつかず、攻める夏侯惇の隙を突き、偶に高順が反撃する。

立場は変わらず、これから変わることはない……それは明白であつた。

模擬戦を見るために無理矢理に作った時間とはいえ、あまり遅くなるのも曹操としては拙い。

彼女は認めざるをえない。

高順は自らの配下である猛将、夏侯惇と同程度の武力を誇っている、と。

曹操は高順の武勇はそれほどでもない、と判断した自らを恥じつつ、未だ戦う2人に告げる。

「そこまでよ」

曹操の言葉に高順と夏侯惇は止まった。

「両者ご苦勞。中々に見応えのある試合だったわ」

そう言いつつ、彼女は立ち上がる。

「孟徳様、私はまだ戦えます」

そう言う夏侯惇だが、息が荒い。

対する高順も肩で息をする有様。

とはいえ、ただで引かないことを知っている曹操は夏侯惇に告げる。

「夏侯惇、よくぞこの私にしっかりと高順の武とあなたの武を見せてくれた。ゆっくり休んで頂戴」

そう言われては夏侯惇といえど、引き下がらざるをえない。

「さて……高順」

名を呼びつつ、曹操はまっすぐに高順の瞳を見据える。

「一つ、聞きたいことがあるわ。嘘偽りなく答えて」

「何なりと」

「あなたはその力を持って何をする？」

びりびりとその場にいた者達の肌が泡立った。

目の前のたった一人の少女から出される圧倒的な威圧感。
呂布や馬騰、馬超のそれとも違うもの。
それは王の気迫とでもいうべきもの。

「私にとって都合の良い未来を招き寄せる。それだけよ」

引かぬとばかりに高順は礼儀をかなぐり捨て、毅然とした態度で告げた。

「その未来とは何か？」

「1000年先まで続く恒久的平和」

面白い、と曹操は口元を吊り上げる。

「その平和とはどのようなものか？」

「周辺諸国と同盟を結び、内政及び民衆の育成に努めること」
「民衆の育成？」

初めて……そう、初めて曹操は不意を突かれた。
内政に努める、というならば誰でも思いつくことだが、民衆の育成というのは彼女をしても想像の外であった。

「物質的に豊かになればなるほどに精神的に貧しくなっていく。金の為に人を殺し、金の為に倫理を踏みにじり、閉塞感が社会全体に蔓延していく。正直者が馬鹿を見る世の中となってはならない」

高順はそう言い放った。

それは彼女だからこそ言える言葉。

21世紀の日本は平和なようであつた。平和ではない。自殺者が年間3万人も出る社会のどこが平和だというのか。

「職場で、私塾で立場が弱いものに対する陰湿な私刑。それらは全て精神的に幼いからこそ起こりえること。自分にされて嫌なことはやらない。他人にはできるだけ優しくする。その2つが発展と共にできなくなっていく」

曹操は言葉を挟めない。

高順の異様な迫力。

それに気圧されていた。

「様々な書物を読み、その知識を試験するだけでは駄目だ。他者と議論を交わし、他者の意見を自分の糧としていく。そして、自分の違う意見の者を一方的に糾弾するだけでなく、そういう意見もあるのだ、と認めなくてはならない。健全な愛国心を養い、老若男女、身分を問わず他者の意見をしっかりと聞き、自ら考え行動する。それができるようになるこそが、民衆の育成に繋がると私は信じている」

まっすぐに曹操の瞳を見据え、高順は告げた。

「……私は目の前の貧しさを解消することに躍起になり、見えない貧しさを放置するところだった」

曹操は静かに言葉を紡ぐ。

そして、彼女はゆっくりと高順へ頭を下げる。

「どうか、私のところへ来て欲しい。私にはあなたが必要だわ」

その様子に夏侯惇は思わず唾を飲み込んだ。

彼女は主が誰かに頭を下げるなんてところを見たことがなかった。頭脳明晰とは残念ながら言えない夏侯惇だが、それでも高順の話は大陸を見回しても、彼女しか思いつかないだろうことは予想がついた。

なぜなら曹孟徳が思いつかなかったから。

夏侯惇にとってはそれだけで事足りる。

「彩……」

馬超が困惑気味に名を呼ぶ。

彼女からすれば模擬戦を見に来たのに何だか予想外の大事になってしまったのだ。

そうなるのも仕方がない。

そして、高順は高順で苦渋の選択であった。

天下を取る、と言い、賈？もまた最初から負け犬根性でいくのは許さない、と言っていた。

高順には自分を信じてついてきてくれる彼女達を裏切ることはできない。

曹孟徳に仕えたい、とかつて賈？に語ったように、高順は三国志の登場人物で一番心惹かれたのが曹操だ。

ずば抜けた人というところではなく、その極めて人間臭いところに。

官渡の戦いなどの一大決戦のときには弱気になったところを荀？や郭嘉に尻を蹴られながらどうにか踏ん張ったり、父親を殺されて我を忘れて坊主憎けりや袈裟までもと大虐殺したり。

完璧超人ではない、聞いていて飽きない曹操の逸話。

自然と目には涙が溜まり始めるが、それに構わず高順は断腸の思いで告げる。

「もし、あなたと私がもっと早くに出会っていたなら、きっと私はあなたを大陸の王にしたことでしょう」

夏侯惇はその遠回しな断りに文句を言おうとしたが、口を開くことはなかった。

高順があまりにも悲痛な表情であったからだ。

今にも泣きそうな顔でそう告げる彼女の心情は手に取るように分かる。

それだけに重い理由があるのだ、と夏侯惇は悟った。

曹操はゆっくりと顔を上げた。

断られたにも関わらず、その顔には不敵な笑みが。

「私は欲しいと思ったものは必ず手に入れる。高順、あなたが最終的に私の下に来るのは天命よ」

そう言いつつ、彼女はゆっくりと高順の頬へと手をやり、垂れた

涙の一滴を拭う。

「孟徳殿、私は私が最も信頼する軍師に負け犬根性でいくのは許さない、と言われております」

ほう、と曹操は楽しそうに笑う。

「私はあなたの軍勢を散々に打ち破り、もう勘弁して欲しいと泣きついてきたら軍門に下りましょう……早い話が、あなたが泣くまで攻撃をやめない」

「今ここで泣いちゃおうかしら？」

がくつと高順も夏侯惇も馬超も曹操のお茶目な攻撃に項垂れる。
先ほどまでであった厳粛な空気はどこへやら。

「も、孟徳様あ……」

勘弁してください、と言いたげな夏侯惇の声。

「冗談よ、冗談。ともあれ高順。私の真名をあなたに受け取って欲しい」

一転、真摯な表情で告げる曹操。

「我が真名は華琳。好きに呼ぶといいわ」
「じゃあ華琳」

そう言われた高順は躊躇いなく呼び捨てにしてみた。

先ほどのお茶目な攻撃への仕返しも兼ねている。

神聖な名である真名でそういうことをするのは問題のある行為なのだが、曹操は好きに呼ぶといいと言った手前、文句を言うことはできない。

そして、困ったことに曹操はこういう度胸のある輩は大好きであった。

夏侯惇も馬超も目を丸くするが、曹操は大いに笑う。

そんな曹操に高順は親近感を抱きつつ、告げる。

「私の真名は彩」

「さっちゃんと呼ぶわね」

さりげない曹操からの仕返しに高順は思わず唸る。

曹操はニヤニヤと笑みを浮かべ、高順の様子を窺っている。

そんな彼女に高順は自らの知識にある曹操の人物像と重なる。

曹操は私的な場ではユーモア溢れる人物であった、と。

ともあれ、このまま自分の呼び名がそれで固定されるのは高順としても勘弁して欲しい。

故に彼女に残された選択肢は唯一つ。

「参った。降参。だからさっちゃんはやめて」

両手を上げる高順によろしい、と鷹揚に頷く曹操。

「さて、私はそろそろ仕事に戻るわ」

そう言い、手をひらひらさせて曹操は練兵場を後にした。

そして、残された面々のうち最初に口を開いたのは夏侯惇であった。

「負けんぞ」

「……へ？」

思わず間の抜けた声を出す高順。

「華琳様の1番はこの夏侯元讓であるっ！」

叫ぶ夏侯惇。

飛んでいるカラスがアホーと鳴く。

「……ちよっと何言ってるかわかんないっすね」

思わずそう返す高順。

「というかだな……私は模擬戦を見に来ただけなのに、何だかとてもない場面を目撃したようではないんだが……」

頬をぽりぽりとかく馬超。

ある意味、彼女と夏侯惇は歴史の目撃者であった。

待つ者達（前書き）

独自設定・解釈あり。

待つ者達

賣？は自室でいつも以上に眉間に皺を寄せていた……ということではなく、珍しく彼女は頬を緩ませ、それでいて頬を朱に染めていた。

高順から届いた手紙。

要望書が1通と世間話的なものが1通。

要望書に関しては主に輸送に関して触れられており、馬車や船を大体的に利用した物資輸送や兵員輸送、果ては運河の掘削などにも触れられている。

これらは賣？としても想定していたことであり、抜かりはない。

問題はもう1通の、私的な方だ。

そこには近況報告や新たに配下に加わった者の簡単な紹介と共に高順の思いがちらちらと綴られており、彼女が民の為ではなく自分の利益の為に歴史に名を残したい旨が書かれていた。

それらを踏まえた上で賣？にはずっと一緒にいて欲しい、と。

最後に紙上で申し訳ないが、誰よりも早く賣？に伝えたかった、と書かれていた。

げに恐ろしきは高順である。

彼女は賣？の密かな思いをくすぐるかのように、こういうことをしてくるのだ。

そして、もつとも駄目なところは高順はあくまで軍師として賣？を見ており、女としては見ていないところ。

これが正史のように男同士であるならば深い絆で結ばれたとかそういう美談で済むところだが、何分この世界は正史とは違う。

故に賈？にとってこれは高順からの愛の告白である、とそういう風に受け取ってしまったのだ。

「……えへへ」

賈？ははにかんでしまう。

張勳辺りが見ればあなた誰ですか、と問いかけること間違い無い程に今の彼女は普段の刺々しさがなくなっている。

「もう我慢しなくていいのかな……」

嬉しそうな顔でそう呟きつつも、思い描くは董卓のこと。

彼女が高順を慕っているのは誰の目にも明らかであり、高順もまたそれを知っている。

この世界においても妾あるいは側室という概念はある。

とはいえ、君主が男であるならばそれは有効であるが、女が強いこの世界ではそういった存在は実質的な性欲発散の為に過ぎない。

それを踏まえた上で女君主は妾や側室を持つ。

性欲は色々な意味で偉大なのである。

故に賈？が出した結論は当然といえば当然なもの。

「月としっかり話し合って共有しよう」

賈？は彼女なりに両性具有について調べており、それによれば両性具有者は女であり男、男であり女、という性質から、性欲が極めて高いことがわかった。

調べていくうちに嘘か本当か分からないが、あの妲己が両性具有

者であつたというどうでもいいことまで出てきたが、そこは些細なことだ。

ともあれ、賣？は未だ男も女も知らない乙女であり、自分1人でそんな高順を受け止められるか、という不安があつた。

そして、彼女はすば抜けて頭が良かった。

下手に独占してこじれるよりは共有した方が問題が起きにくい、と判断したのだ。

感情を殺して冷徹に判断を下せる賣？だからこそ、そういう判断が下せたともいえる。

もつとも……

「絶対にあの華雄とかいうのと肌を重ねてるんでしょうけどね」

一転、渋い顔となる賣？。

別段、お互いに初めてでないと……というような信仰は彼女にはないが、それでも何となく釈然としない。

猫に置いておいた魚を取られるような、そんな気分。

「幼馴染風情にボクは負けない……胸の価値は大小じゃない。形なんだ！」

ばん、と机を叩いて立ち上がれば、ちょうど良く開く扉。

入ってきたのは張勳。

彼女は目をパチクリとさせる。

そんな彼女に賣？はゆつくりと椅子に座り、傍に置いてあつたお茶を啜る。

そして、賣？は問いかけた。

「何か用？　ボクは忙しいんだけど」

「今更なかったことにするのは無理ですよー？」

真面目腐った顔で賈？がなかったことにしようとするも、張勳はそれを見逃さない。

「で、それが愛しの主からの恋文ですか？」

張勳の視線は机の上に広げられている手紙に注がれる。
賈？は素早くそれらを引き出しへとしまう。

その行動に張勳はにっこりと笑みを浮かべる。

「大好きなんですネ」

「うるさい」

いつも通りの、否、いつも以上に眉間に皺を寄せる賈？に張勳はくすくすと笑う。

「文和さんがそこまで惚れるって凄い人なんですネえ」

「……まあ、カッコイイわね」

張勳はまさかの返答に少し驚きつつも、からかうよりも情報を引き出す方が先と判断。

すぐさま主を攻める方向へ。

「カッコイイ、ですか。きっとそれはもう凄いんでしょうね。強い方なんですか？」

「少なくとも、今、大陸で一番凄くて強いんじゃないの」

賈？の言うことはある意味、正解なのだが、張勳は恋は盲目という言葉を知っていたので、そこらへんを差っ引いて考える。

賈？がそういう評価をするということはある程度の名がある人物。そして、本拠地がない者といえは……

「西涼の馬騰さんですか？　うちの総大将は」
「……は？」

まさかの名前に賈？は目を丸くした。
その反応に張勳は外れと悟る。
故に真っ向勝負に出ることにした。

「そろそろ教えてくれてもいいんじゃないですか？　半月前、あと1ヶ月でこっち来るって聞いてたんですけど、待ち切れないです」

張勳の言葉に賈？は溜息を吐く。

まあ、陳留で客将をするなら1ヶ月以内に来れるとは限らない。
ならばこそ、もう明かしてもいいかもしれない。

「張勳、あんたから見てボクは愚かであるか否か？」

唐突な問いに張勳は首を傾げつつ、否と答える。

「ボクや董卓、張遼の主は高順。今ここにはいない配下として華雄、馬騰、馬超、馬岱、呂布、陳宮」

張勳は固まった。

しかし彼女もさるものですぐに我に返る。

「高順と華雄ってあの官軍を破った羌族の2人ですよ？　馬騰っ

てそのときの官軍の指揮官ですよね？ 何でそんな方達と一緒にいるんですか？」

張勳の問いも最もである。

とはいえ、賈？としても高順が馬騰を引き込んだことについては彼女からの手紙で知ったばかり。

彼女も驚いたが、そのことは告白まがいの文章で彼方へと飛んでいつてしまったのは言うまでもない。

「そこはボクもよくは分からないけど、今一番、あんたに聞きたいことは漢族ではない者を主に据えていることについてよ」

賈？の言葉に張勳は押し黙る。

わりとのほほんとしている彼女であっても、異民族については知っている。

略奪にあつた街や村に立ち寄ったこともあり、その凄まじさは臍気ながらも理解できる。

だが、賈？には誤算が一つあつた。

それは張勳が民の為に頑張るといふような人物ではないことだ。

生真面目な輩ならば異民族＝悪と断じて斬りかかってくるだろうが、彼女は自己中心的であり、自分が楽しければそれでいいや、という性質であつた。

「私個人としては別にどうとも思いませんね。個人的に異民族の方には興味ありますし……」

そこで言葉を切り、張勳はまっすぐに賈？を見据える。

「私もただの暗愚な輩に命を預けるような酔狂者じゃないです。そ

りや、暗愚であつてもとっても可愛かつたりすれば話は別ですが」
「要するに高順に君主としての器があるかどうか、見極めるってことね」

「そうということです」

肯定する張勳に賈？は不敵な笑みを浮かべてみせる。

「張勳、あなたは私の思った以上の成果を上げてくれているわ。だから、私はあなたみたいなのが他所へ行くのは大きな損失だと思う」

そう言いつつ、賈？は引き出しから冊子を取り出し、それを張勳へと渡す。

「大量生産に関する一考察及びその問題点？」

表題を読み上げ、張勳は首を傾げる。

そんな彼女に賈？は告げる。

「それ、高順が出した原案よ。それを見れば高順が馬鹿ではないことが分かるはず」

その言葉に張勳はパラパラと流し読みし始め……すぐに食い入るように読み始めた。

規格統一、流れ作業、作業の細分化及び簡素化などなど。

賈？に簡単に言われていたが、これらは張勳にとっては天啓に等しい。

ただ、悲しいことにこれらの知識は21世紀の学生であれば誰でも知っていること。

テレビでも製造ラインなどはたびたびCMやニュースなどで流れる上に、何よりも社会系科目を取っていれば間違いなく概念的なものが教科書に載っている。

彼女は顔を上げ、賈？をまっすぐに見つめた。

「文和さん、これは本当に高順さんが？」

「ボクの真名に誓ってもいいわ」

賈？の返答に張勳は感嘆の息を吐く。

「他にも農業や商業、軍事に関しても原案を出しているわ」

「……あとは人格だけですな」

「そればかりは会って判断して頂戴」

まあ、嫌いにはならないでしょうね、と賈？は心の中で呟く。

漢族嫌い……とはいっても、高順は全ての者を毛嫌いするというわけではない。

なぜならば、賈？や董卓、張遼もまた漢族であるからだ。

むしろ、そこらの役人よりも余程まともな人格であると賈？は判断していた。

「ともあれ、張勳。馬車の方はどうなの？」

「あ、はい。馬車に関しては一応の設計が終わり、試作に入りました。これからは問題点の洗い出しです」

「そう。で、それは何人乗りなの？」

ええと、と張勳は頭の中から詳細な性能を引き出す。

「確か4人乗りです」

「10人乗りが欲しいわ。それも完全武装した兵士が10人乗って、それなりの糧食も積める程度に」

「……みどりいろのおにが出ました」

「必要だから欲するの。鬼でも泰山府君でも何でもいいから作りなさい」

「はい」

「あと、ボクが注釈つけたこつちを持って行って役立てなさい」

賈？は張勳の手から高順の原案を取り、注釈付きのものを受け取る。

嬉しいものをもらったのだが、何分、要求される性能が鬼である。当然ながら1台に掛かる費用も安く抑えねばならないことから、

張勳の苦勞はとんでもない。

しょんぼりしながら張勳は退室していった。

そんな彼女を見送り、賈？は引き出しから冊子を取り出す。

そこに書かれていたのはひらがな及びカタカナ50音、そしてアルファベット。

賈？はこれらの文字を勉強しているところであった。

少なくとも漢の地で高順と自分しか知らないこの文字。

それはまさに暗号に最適であり、またアルファベットも読み方が幾つか種類があり、それらを用いればまず絶対に破れない暗号となる。

そして、ローマ字読みすればアルファベットとひらがなに変換が

容易に可能であることも見逃せない。

問題はひらがなを漢の言葉に変換するところだが、そこも高順は抜きかりなく必要最低限のものは既に冊子に書いてあった。

『……ボクは、あなたが好きです』

口に出し、賈？の顔が一瞬で真っ赤に染まる。

日本語で紡がれた言葉は他の誰かが聞いてもさっぱりわからないだろう。

「ええい！ やめやめ！」

ぶんぶんと首を左右に振り、大きく深呼吸。

彼女らしくないといえはらしくないが、まさかの告白でそれだけ浮かれている証拠であった。

ふう、と溜息を一つ吐いて、賈？は虚空をぼんやりと見つめる。
いつからこうなったのか、と。

「……初めはただのバカだと思ってたんだけど」

上司に無理矢理抱かれそうなところを助けてくれたことには感謝すれども、それだけで助けてくれた相手に恋愛感情を抱くような女は存在しない。

それについては賈？も例外ではない。

その後、高順の嫌われっぷりを目の当たりにし、さらに高順は賊退治に1人で行って成し遂げて……賈？がバカだと称したのもそこである。

幾ら何でもアレは無謀であった。

「真名を預けたときは……まだそういう気持ちじゃなかった」

呟き、賈？は思い出した。

高順の秘密を教えられたあのとき。

「何進に抱かれるって聞いたとき……かな。ボクは何か嫌だった」

知らないうちに惹かれていた……否、そうならざるをえなかった、と賈？は結論を出す。

「あんなに信頼されたら……主従関係なんか超えるよ……」

その声は虚空に消えていった。

同じ頃、董卓もまた自室で手紙をゆつくりと読んでいた。

彼女が受け取った高順からの手紙には近況報告や新しく配下となつた者達の簡単な紹介賈？と同じように書かれており、そこからが違った。

董卓を氣遣う言葉や賈？や張遼と関係はどうか、袁家の者に隠れてイジメられてはいないか、などどここの保護者だと言いたくなるようなものであった。

他にも書物を読むだけでは体に悪く、張遼に軽く鍛えてもらってはどうか、というものもある。

そして、紙上で申し訳ないが、という断りの後に彼女の母である董君雅の死に様が書かれていた。

正確には高順が華雄から詳細に聞き出し、当時の状況を淡々と綴ったのだ。

文末に高順は私も華雄も恨んでくれて構わないが、謝らない、と書いていた。

確かに後ろめたさはあったものの、それを補ってあまりある自らの母親と部族を守ったという思いが高順と華雄にはあった。

確かに董君雅には高順にとっては恩があるが、あくまでそれだけの関係だ。

そもそも華雄はただ使者として会ったに過ぎない。

「恨まないよ。恨めるわけじゃないよ……でも、ずっと一緒にいさせてもらっね」

全てを読み終えた董卓は呟いた。

その言葉は虚空に消えていく。

そんな彼女はあることに思い至った。

夜の生活をする際、胸は大きい方がいいだろう、と。

「……うーん」

董卓は自分の胸元に視線を向け、ついで記憶にある自分の母親、張遼、高順、張勲、賈？を思い浮かべる。

母も高順も張遼も張勲も皆、胸は大きかった上に背も高い。対して賈？は背は小さく、胸もそこまで大きくない。

そして、董卓本人はというと……チビでぺったんこであった。

背も高く、胸も大きい4人に共通する点。

それは鍛錬していること。

張勲は馬車にかかりきりだが、空いた時間に張遼と打ち合っているのを董卓は目撃している。

そして、鍛錬をしていない賈？が自分と似たようなものであることから、これは鍛錬しなければ、と董卓はすぐに思いつく。

彼女も好き好んでチビのぺったんこでいるわけではない。

「霞さんをお願いしよう」

思い立つたら吉日とばかりに董卓は張遼の下へ向かった。

「へ？ 鍛えて欲しい？」

自室で酒を飲んでいた張遼はまさかの来客のまさかの要望に目を丸くした。

「私、強くなりたいんです。色々な意味で」

「いや、それはええねんけど……」

じーつと張遼は董卓の上から下まで見回す。
華奢な体はともではないが、武器を持てそうに見えない。

下手に何かやって怪我でもさせたら賈？から大目玉を食らうのは間違いなく、張遼としてもそれは勘弁願いたいところだ。

「せやなあ……ほならこれ、持てたらええわ」

張遼はそう言い、壁に立てかけてあった己の青龍偃月刀を片手で持ち、董卓へと差し出す。

差し出された方はごくり、と唾を飲み込み、それをしっかりと両手で持つ。

「ほな、離すで？」

そう言い、張遼は手を離れた。

重さに耐えかねて董卓が取り落とすことを予想したが、それは外れた。

董卓は不思議そうな顔で手元の偃月刀を見、そして張遼の顔を見る。

「えっと、霞さん。武器ってこんなに軽いんですか？」

「……ちょう待ち。それ、重いで？片手で持ってみ？」

張遼の言葉に董卓は片手を離し、頭上に持ちあげてみせる。
彼女の顔は余裕そうであった。

「軽いんか？」

「はい。お箸を持ってるみたいです」

「じゃあ……あの棚、持ち上げてみ」

張遼は今度こそは、と棚を指さした。

書物がぎっしりと詰め込まれているその棚は張遼ですらも持ち上げるのは中々難しそうだ。

もつとも、その書物は張遼が暇つぶしにと持ってきた艶本と軍略に関する物が半々であつたりする。

董卓は偃月刀を張遼に返し、棚に向き合った。

そして、両端をしっかりと持ち……

「……悪い夢でも見てるんちゃうか」

張遼は目の前で起こったことが信じられなかった。

軽々と董卓は棚を持ち上げていた。

「えっと、もういいですか？」

「あ、せやな……おろしてええで」

張遼の言葉を受け、董卓は棚を床に下ろす。

「なあ、月。今まで重いもの持ったことあるん？」

「えっと、旅に出る前は使用人の方達が身の回りの世話を全部してくれて、勉強しかなかったので、お箸や筆以外のものはあまり……」

……

なるほど、と張遼は納得した。

太守の娘ともなれば荷物なんぞ運ばない。

そして、見た目から董卓が怪力を持っているようには到底思えない。

故に董君雅も勉学を優先させたことは想像に難くない。

「よっしゃ。ウチがいつちよ鍛えたる」

張遼の言葉に董卓は満面の笑みを浮かべる。
そんな彼女に張遼は釘をさす。

「やけど、今の時代で強くなるつちゅーことはいずれ人を殺すことや。できるんか？」

董卓はその言葉に一瞬怯む。

彼女の胸には幾つかの思いがある。

それは最初に思いついた背と胸が大きくなることも勿論だが、強くなればもつと高順の役に立てる、ということ。

董卓にとつて高順はもはや絶対に失ってはならない人物である。
その為なら彼女はどんなこともやるつもりであった。

「できます」

しばしの間を置いた答え。

張遼はまっすぐに董卓を見据え、董卓はその視線を真っ向から受ける。

睨み合いは数十秒にも及んだが、唐突に張遼は笑みを浮かべた。

「彩の為に？」

「へう……」

顔を真っ赤にし、俯く董卓。

そんな彼女に笑いつつ、頭を撫でる張遼。

「ええでええで。そういうのは大事や。刃を振るうのに重要なのは正義を抱くとかそういうもんやない。己が満足できる理由があるかどうかや」

そもそも張遼からして、戦闘ができればそれで良いという人種だ。酷い目に遭っている民を助ける為に、という義憤に駆られていうわけではない。

「でもまあ、とりあえずは詠の許可もらわんとな。詠は月の先生やし」

月にそんなことさせるなんてとんでもない、という大雷が落ちそうな予感がひしひしとしたが、張遼は最終的に賈？は許可するだろう、と確信する。

その理由は簡単で人手不足だから。

文武が両方できる人材というのは稀有である。

磨けば光る原石を、あの賈？が放って置くわけがないのだ。

「うん。詠ちゃんもきつと分かってくれる」

「せやせや。いやー、ここにきてまさかの事態やな。文醜や顔良の相手も飽きとったことやし」

張遼、暇を見つけては袁家の二枚看板を呼び出し、模擬戦を繰り返している。

顔良はともかく、文醜は大いに乗り気で張遼に挑み……コテンパンにされている。

文醜も弱くはないのだが、何分、猪であり攻撃が極めて読みやすかった。

そこへ降って湧いた董卓である。

弟子を取るといふのは張遼にとっても初めてであり、少しの気恥ずかしさと共にどんな風に育てようかと心が踊った。

そうして2人は連れ立って賈?の部屋へと向かったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3704w/>

彼女になった彼

2011年10月10日21時52分発行